

アラン

思想と年齢
(中)

高村 昌憲 訳

第一章 労働

破壊、征服、採掘、製造、輸送、取引、そこには労働があります。私たちが今やることは、これらの相違を詳説することではなく、一連の器具や動物や道具や機械の素晴らしさを詳説することでもありません。その反対に遊戯の概念を定めることが重要であり、労働と遊戯の間にある芸術にも触れない訳には行きません。これら三つの概念全体を、一つの視線の下で把握しなければならないとも私には思えます。どの場合でも重要なのは行動です。地上の人間たちによるどんな活動も、水と森と平原の変化も、至る所にある人間のしるしも、驚嘆すべき遺跡も、遊戯とか労働とか仕事を表しています。しかしながら、遊戯が地上に人間の跡を残すのは最小のものであり、その反対に芸術が力強いしるしを残していますが、それで十分です。ピラミッドのように最早手を触れることがありません。労働は、正確に言えばしるしを残しません、寧ろ労働そのものによって絶えず使用される手段とか道具であり、絶えず私たちの生命を維持する消費とか破壊を目指して屢々改められるものです。労働には急を要して連続して一貫したものがありますが、遊戯には見当たりませんし、暇な時に行う仕事にも見当たりません。そして労働のこの厳しい法則が二重の拘束を感じさせます。私たちは外部の必然性に捕らえられています。事物は私たちを損ない、破壊します。そして私たちの許可を求めること無く、又少しも考慮せずに保存することもあります。日光、雨、風、洪水は何時も強襲して来ます。小麦は季節に従って生長しますが、私たちの欲望に従うことはありません。その様にして私たちは常に奔走し、絶えず服従します。全ての人間は一つの仕事に赴きますが、その仕事は予見されているにしろ予見されていないにしろ、決して待っていてくれません。収穫か、地崩れか、火災か、暴風雨か、一日の始めに夕暮れまでに最も急を要するものは何か誰も言えません。しかし、もう一つのことは既に私たちにとっては急を要するものとなっていて、私たちの全ての活動を管理します。それは交換と協同という働きのために、どんな労働も一つの労働に依存しており、人間は人間を待っています。果実が熟した時に採り入れないと、私は果実を失います。私が約束した服を決められた日に配達しないと、私と約束したパンも肉も石炭も当てに出来なくなります。全ての活動に規定されている二重の必然性とは、以上の様なものです。

人間は従って、二つの方法によって捕らえられています。事物について意図が感知されないのは明白ですし、努力も感知されません。単に結果だけであり、翌日の労働は前日の労働に依存しています。諺の知恵はその点で決して潤れることがありません。何事も行うべき時があるとか、始め良ければ仕事の半分とか、砂上に家を建てないとか、結局は蒔いたものを取り入れるとか言っているのです。しかし私はフランクリン(1)の思想に、常に脅迫的な最も力強い必然性の表現を発見しましたが、それは不断の労働を要求しています。「空腹が労働者の窓辺で見詰めているが、敢えて中には這入らない」と彼は言っています。最初にこの観念を決して抱かないのは幼年時代の特権です。子供がその観念を感じるようになると、最早子供でなくなります。芸術家の

活動が他の法則に規定されているのも明白です。何故なら作品が美しければ、誰も試みの数を数えたりしないからです。

大人たちは、子供の成長を待つことが出来さえすれば、子供が大きくなるのを十分に待つ術を知ります。芸術家が十分に試みるのを待つことが大人たちに出来さえすれば、大人たちはそれを十分に待つ術を知ります。しかし、大人たちは現実の労働というこの厳しい条件によってすっかり支配されていて、定められた時間までに結果を出さなければならないのです。そこから不器用であったり、怠慢であったり、不正確であったりすると、蒔いたものを取り入れるにも別の方法になって来ます。見習い期間はその点で学校の勉強と異なるものであり、それとは反対のものでさえあります。見習いは美しい板を台無しにしたり、一人前の労働を破壊し、進行中の労働を停止させます。ここから人間よりも更に厳しい人間の判断力は、成功しない者の支援を拒みます。実際の真剣な生活の中で、それに基づく外的な自然は常に仮借なく圧迫しており、職業と地位を、結局のところその人間の商業的価値を決定しています。それは常に過去の実績によるのであり、口実や約束は無視されます。人間の環境はこの意味において非人間的です。何故なら外部の必然性と、気に入ってからにしろ強制からにしろ、私たち全員の分け前である服従を表すことしか行わないからです。そこから行為全体の流れを突然に止めて仕舞う怠慢な人に対しての呪いになります。一般に労働そのものの動きであり物音である、耳を傾けようとしなない騒音が生まれるのは、その人間の存在を約束した場所に駆けつけるからです。私が思う処では、怠慢な人は未だ地位を持っていないか、持ってないと思い込んでいる人です。驚くべきことですが、それは常に彼が当てにされていないと分かっていたり信じ込んでいるからで、決して急ぐことがないからです。その反対に、本当であろうと嘘であろうと、誰も彼の代わりをなす術を知らないという観念がその人間にあると仮定してみてください。あなたは前進する彼を見るでしょう。ですから人間は自分の労働を愛していると言うのでは不十分です。労働することとは遙かにもっと確実なものです。ベルトや歯車があなたの袖を不意に捕らえるように、大きな機械は情け容赦がありません。その人が協力して、他人が仕上げるための部品を絶えず提供してくれさえすれば、彼は自分の労働を自分自身で規定し、最も働く者であるのは驚くべき事実であることに例外は無いと私は思います。従って、金銭欲とか吝嗇とか野心という名称に基づいて続けられて行く労働や、維持して行くための名声や、ついには他人では同じ様に上手に作れない確かな行為から生まれた生き生きとした感情が、余りに屢々間違っ語られていると私は思います。小学生がこれらの行為の理由を見出さないのは明白です。授業で間違っ誤した処で、世界に不足するものは何もありません。最も活動的で、最も動き回り、最も疲れを知らない時期にあるのが幼年時代であり、恐らく最も怠惰な者が見出される理由もそこにあります。（完）

(1) フランクリン（一七〇六～九〇）は、米国の科学者・政治家で、避雷針を発明した。

第二章 作品

私は、労働と作品を見分けることが有益であると思います。労働の法則とは、使用と忘却が同時のものであるようです。誰が先年の取り入れのことを考えるでしょうか。犁は畝溝を描きます。小麦がそれらを覆います。畑は又、別の顔も見せます。しかし、この外観そのものは別の労働と、耕作によっても消されて仕舞います。運搬車と機械と工場は損耗して行きます。人は敬意のしるしも無く、投げ捨てます。他の労働のためになるなら、これらの残骸を再び取り上げます。壊れて山積み投げて捨てられた道具以上に、醜いものは最早ありません。錆びた機械や道路脇の壊れた車輪以上に、醜いものも最早ありません。労働で出来た書物は、人間が戻って来ることを全ての人々が気付く時、それらの書物を運んだり取り囲んだりする活動、あるいはそれらの短い休みにおいてしか意味がありません。それ故に工事建築物や道具に混じりながら踏まれていない草や小灌木などの、打ち捨てられたものしるしは貴重な廃墟とは全く別のものを生んでいます。荒れた建築現場では沈黙までもが驚きであり、不快です。鉄道線路にとって、お気に入りにはレールが輝いていることであり、植物は枯れて平らになっていて焦げた跡があり、全てのものが通行と使用を意味していることです。

これとは反対に、作品はこの活動とは関係の無い儘であると理解されています。この抵抗は既に意味のあるもので、恐らく芸術作品に固有のものであり、残骸の山積みも多くのことを説明しますので、表現よりも遠くの方へ行くことさえあります。従って水道橋とか城壁は、質量だけによっても記念建造物になるのが分かります。もしも抵抗することが無いならば、美しい形も決して無いと断定することが出来ます。無秩序でさえも、山々や絶壁を見れば分かる様に、質量によって何らかの美を持つことが出来ます。詩や音楽は、私たちの思考の様に外観上は動きが多く、記念建造物と非常に異なっているのかも知れませんが、作り上げる術がそこには認められます。それは変えることが容易であるだけに更にもっと敏感であり、変えることが直ぐには不可能である様に思われます。内容の抵抗と衝突にも事欠くことがありません。組み合わせられた音には、記念建造物や宝石の固さをそれなりに持っています。私たちはここで好みに忠実な輪郭に沿って行きますが、作品は僅かな変化にも死んで仕舞いますので、一つのあり方と他のあり方との間に選択の余地は少しもありません。そして恐らく、音楽の最も純粹な美は決して衰えないこれらの形式の中にあり、如何なる種類の愛撫も阿諛もありません。理解させるためであっても、今では何という目的でありましょう。芸術は遊戯ではないのです。芸術には真剣なものと永遠の成果があり、あらゆる種類の遊戯を力の限り拒絶しています。

芸術が保有する最も近いものは労働です。しかしながら労働によって区別されるのは、労働の諸形式が芸術とは違うものと呼び起こすものであり、芸術とは違う行為によるものであるからです。畑の畝溝は取入れを予告します。取入れの機が熟するのを人は待ちます。人間はここで準備しますが、更に形を破るために突進します。彼は既に刈り取った小麦の束と藁と粉とパンを見えています。庭はこれに反して季節毎に完成した何らかのものを見せて、謂わば人間の手を拒絶しています。庭の美は、主として様々な色彩とか葉の壊れやすい外観に存するのではなくて、兎に角、持続性も堅固さも無いが、寧ろテラスや階段や大きな樹木の列などのように基礎の安定し

た建造物における全てのものは季節以上に継続性を明示していると言わなければなりません。しかしながら、楽しみの庭は未だ殆どが一つの作品ではありません。その代わりに芸術作品は完成されたものであり、謂わば省略され削られたものであり、労働における小島を形づくっているのが良く分かります。労働によって加工された事物は役立ちますし、これからも役立つでしょうし、役立って来たことに全てが語られています。それらの誇りは道具に見るように、生産しながらすり減って来たことにあります。それらの目的はその外部にあります。それに引き替えて作品の目的は、それ自体にあります。例えば金銀を象眼した短刀は、使用されることなく装飾品として置かれていますので、明らかに何の役にも立っていません。恐らくそれはモデルであり、決して材料になることはありません。モデルやしるしや証人のようなものが作品です。交通の端で、機械とその操作人たちの波間から離れて神聖な儘の古代の教会も、そのことを良く示しています。

対立というものは、本質的に無感覚な移行と諸段階を前提としています。墓には用途がありません。人間はそこに最早、他の遺跡を心に刻みません。古い教会もすり減りますが、決して労働ですり減る道具の様ではありません。家も、駅や工場やホテルの様な道具でしかないことが起こります。その反対に、住宅には何時も何かの作品があります。何故なら、少なくとも労働だけのしるしを付けていないからです。労働のしるしには、過去に行った行動としての何らかのものを止めています。猟師たちは雄鹿を洞窟まで引き摺って行きます。角は脆い岩に切り込みます。そこには楽しい狩のしるしがあり、ある意味で思い出になります。しかし、壁にある動物のデッサンはそれとは別種のしるしです。使い古されて光沢のある椅子も又、別種のしるしを示しています。両方とも行動の循環は閉ざされています。デッサンの最も目立った特色は、その行動がそこでは自分自身に戻り、瞑想が動きを模倣するようになります。その反対に、引き摺られたこの雄鹿は、それとは別の行為に向かいました。それは結局のところ、事物を人間に従わせる破壊者の労働の一部でした。デッサンをする人は少しも所有しません。寧ろ所有されていると言えます。そして、この性格は住居の中にあり、人間の痕跡は絶えず人間に反応します。そこで順応するための肘掛椅子やベッド以外のものは作られません。事物と人間との対立は消えています。事物はその時には最早、食料や洋服や避難所や道具を作るために加工する材料としてあるではありません。反対に事物はその形状によって人間から人間自身への関係を、ついには思考するのを勧めることを表しています。以上は階段と梯子の相違でもあります。梯子は一つの手段でしかありません。でも、階段は取分け記念建造物であれば、人間の形状に従って直ぐに人間の行為を規定しますし、それは殆ど尊厳に従っているとさえ言えます。如何なる住居も、それは殆ど美しい言葉ですが、少なくとも私たちの性質に従って私たちを留めて整えてくれます。肘掛椅子は儀式のもので、それは決して力による活動に招きませんし、その様なことは考慮しませんが、人間はそれらの活動によって支配し、砕いているのです。数々の装飾は、これらの聖なる形状に他のものをつけ加えますが、それらは確かに人間を認めて形つくる効果もあります。家具の形状とデザインの間には隠された関係があるに違いありません。というのも、そのデザインが形状につけ加えているのを至る所で見受けられますし、まるで今は壊すことも形を変えることも問題が無く、反対に事物を模範にすることが問題であると告げているかの如くであるからです。しかしながら、私はデザインのこの威圧的な通知が何処から来るのか言うことが出来ません。又は、恐らくここで当然に連続的なデザインの線を考えてみなければなりません。それは事物を連れ戻すことで

もありますが、外部のものを限定することの執拗さにより、殆ど事物の内部へ連れ戻すことにもなると私は言います。つまりそれ故に、恐らく事物の内部が他の線によって描かれるのは必然性がありません。輪郭があれば十分ですし、紙面の大きな余白は、注意力を連れ戻して閉じ込める曲がりくねった線によって多くのことを表現しています。デザインは、沈思する機能への精力的な呼びかけであるということです。でも、それは全てのデザインに等しく当て嵌まるものではありません。何故なら上手に描かれた〈大洋〉とか大河は私たちを旅へ誘うからです。しかしここで問題としている装飾としてのデザインは、どんな行動への通路も閉鎖しています。その時に、そのデザインが知らせているもの以外の他のものには無い対象に戻るのを、法則と見做しているように見えます。それは記念建造物とか家とか家具を道具としてではなく、それら自体の裡に目的を持つ事物として考えるように促しています。いずれにしても、これらの合致したしるしによって住居が少しずつ作品と同列に移って行くのです。労働によって揺さ振られたり、しるしを付けられたり、数々の破片や埃で汚くなった仕事場と、それとは反対に全ての形状がその人間自身を本来の自然な形状に立ち帰らせながら目的であり聖なるものとなっている寝室との相違を、あなたは容易に見分けます。（完）

第三章 子供の仕事

大人の労働や大人の芸術から、子供の民衆や幸せな学校へ戻らなければなりません。子供は危険な目に会うと、辛うじて離れた母親の体組織へ戻ります。もしもあなたが自然の事物に対して強力な堰を作らずに子供たちを集めたなら、怖くて仕方ないでしょう。学校はかくしてやむを得ず自然の埒外にあり、周囲の人間組織によって守られて培われています。それ故に実際の労働はそこでも可能であるとは決して私は理解していません。本当に噛み付く実際の道具は、激しかったり弱まったりする狂ったような動きの中では場違いであり、それとは反対に制御されて加工される事物の中で動き回らなければなりません。もしも子供が働いたなら、絶え間ない監視と人間の集団による有効な保護の下でしか行うことが出来ません。そして、それは見習いの仕事場が見出して守った一つの比率です。見習いの学校は極めて異なった二つの制度が混合していることを認めなくてはなりません。そして子供は、こうしてお互いに似てもいない二種類の仕事を行い、教育と見習いを一度にやり損なう危険を負っています。

徒弟には試みることはありません。何故なら、労働という厳しい法則があり、そしてその必然性には決して考慮してくれることが無いからです。準備されていたり荒削りされていたりする品物は、どんなに僅かな即興によっても台無しになって仕舞います。特に品物が巧妙な場合は尚更です。実際の労働の秩序は混乱しています。時間と材料が無駄になります。それは悪評となり、もしも子供が包帯をして面白がるのであれば、響感を買わねばなりません。大人の知恵はここで服従するが如くに命令します。つまり荒々しくも強いやり方です。もしも徒弟が自分の損害において外部の秩序と人間の秩序に対して同時にぶつかるのでなかったなら、彼は見習いでなくなります。あの慎重さと労働者の忍耐強さを彼は獲得していません。その慎重さと忍耐強さは直ぐに器用な素人を驚かしますし、非常に早く追い抜きますが、素人を教える訳にはいかないのです。これらの厳しい教訓によって徒弟は、最初は掃除をしたり、整頓したりするような目立たない労働に立ち戻り、そこで最初の用心を学びます。そして次に、道具を使つての助手の役割に就きますが、それには長い間の観察期間があり、先ずは師匠に従って最も単純な行動でしか試みようとしません。模倣の姿勢は徒弟としての礼儀正しさであり、最初は自分勝手なやり方を信用しないような心構えです。従ってそこには事物や道具や人間への服従がありますが、主としてそれは失敗することへの恐れが明瞭にあるからです。この長い期間は無駄のように見えますが、決してそうではありません。決して間違えることなく覚えるには、助けてくれる条件などありません。そこに身を置かなければなりません。しかし、それも又覚えることではありません。それは全く別のことです。仕事場の代わりに軍隊での必要性によって御者とか電話手とか通信手の教育を受けたこともない者は、この服従という唯一の法則に基づくこの種の試みを決して良く理解しないでしょう。騒々しい好奇心や子供っぽい熱意は、それらの仕事によって先ず徹底的に沈められ、知性は奴隷となり、道具の先端に厳密に縛られているようになります。どんな職務も手仕事です。政治にしろ訴訟沙汰にしろ、徒弟でなかった者には何か不足しています。弁護士たちは、代訴人の書生を経験した者を直ぐに見分けます。職人が直ぐに素人を見分けるのも同じ方法です。大尉の仕事をして来なかった将軍など考えられません。思想はあらゆる主権者において

美しく偉大なものですが、人は決して全てのことを思考しません。

技術的なものであるこの見習い期間の見方によって、けっして技術的なものではない学校の勉強よりも人はもっと良く理解します。ここでは試みるための術を知るのを待つことは決してありません。ここでは誤りにも反故にも決して驚きません。ヴァイオリンの先生は間違っただけの音にも決して驚きません。しかし放浪する音楽家の家族においては、恐らく間違っただけの音を決して受け入れない見習い期間があります。教育にとっては極めて無縁の体罰という観念は、手仕事には自然です。そこでは事物そのものが罰しますし、あるいは寒さや空腹が罰します。又、生活費を稼ぐ子供には少なくとも節度が必要ですし、子供たちへの強制のための罰には手心も必要ですが、儀式も敬意も無いこの皮袋を攻撃する宇宙の辛辣さが失われることはありません。もしもヴァイオリンを演奏することが労働であったなら、酷く具合の悪い道具は傷付けるように、間違っただけの音も指を傷付けるに違いありません。徒弟ジャン・クリストフの指を傷付けるのも、木の規則が与えている何らかのものなのです。そして、この種の忠告は精神の下にある驚くべき注意力を与えています。軍隊の教育は本当のところ見習い期間であり、間違っただけの音も又決して受け入れません。兎に角、教育はそれを受け入れないのは事実ですし、間違いによって教えることもあるのです。従って学校の勉強の目的は、決して何かを生産することではありません。簿記の徒弟と教えるものを学ぶ子供には、大きな相違があります。それらには二つの方法があり、全く相反するものでさえあります。大人の労働の様に見習いの場合にも、反省は命取りになります。何故なら、必然的に反省は結果に基づいて道に迷うものであり、常に後悔と怒りによって運ばれて行き、常に希望を犠牲にしているからです。人が誤りによって学ぶのは、学校しかありません。文字通り学校の勉強においてだけです。誤りそのものに誤りを改める方法を認めるこの幸福な状況は、幼年時に特有のものであり、幼年時を長引かせます。だがその上更に、外部の必然性を遠ざける周囲の柵がなければ可能ではありません。子供が食べて行くために教えるのであるなら、もっと下手に教えるだろうと私は言ったりしませんが、別な風には教えるでしょう。新聞売り子のように数えるでしょうし、大臣のように教えるでしょう。間違っただけで「どうして」と「何故」を知る喜び、反故の忘却、やり直し、後悔しない無垢の精神、そこは誤りが走り回っていて大急ぎで繕う世界です。素行を改めたり、姿勢を正したりする精神に帰って行くことが拒否された世界であり、それらの精神を大人の世界に誰が見出すのでしょうか。飛行機が翼に拘らない時は、如何に考えれば良いのでしょうか。誤りは取り返しがつかない事実であって、せいぜい恐怖によってすっかり示しているだけで、少しも待っていてくれない他の事実で覆われています。日常の慌ただしいこの思想は、思想の中の思想を排除しています。

恐らくはここに認められるのは、称賛と軽蔑が代わる代わる見られるあの技術的巧妙さの強みと弱みです。行動は思考を焼き尽くすと言わねばなりませんし、繰返し言わねばなりません。このことによって思考したことを思考するのは、何時も遅過ぎます。何故なら、この回帰は意識であり、それは人間の協同と外部の必然性という二重の衝撃に基づいて労働に夢中になることで欲望を弱くしたり、点検したい新しい対象に直ぐに覆われて仕舞い、点検するための企てに追い込まれるからです。大臣の謁見はこの様にして次々に続きます。恐らく大臣は、出たり入ったりしている時間の中で、彼がしていることを理解するための時間的余裕が欲しいのです。しかし、その意味で言うと、手仕事は時間的余裕が出来ると、そこに必要なものを与えるのであり、時間的

余裕を望んだ事物は過ぎ去って忘れられます。場所を弁えないのです。私たちの思考は砂に消える水のように、行動の中で消えて行きます。幸せな幼年時代よ。幸せな学校時代は、何をやるかは大して重要でなく、やり直したり、同じ行動が再び行われても常に皺にならず、常に新しく、常に希望が完全な儘齎されます。そこでの罰は大したものではありません。そこでの成功は、長い模索を永遠に消して仕舞います。そこでは誤りを前に一種の遊戯によって、知るものを確信します。私は、本の入った鞆を高くする小学生の動きに、この幸せな軽薄さを読み取ります。この軽やかな注意力と自分自身への笑いを自らのものとして所有しているのが良き小学生である、と私は理解します。悪い小学生として、私が屢々より多くの真面目さを疑っていて老人臭いのを感じるの次のおりです。つまり彼は過去を演習の荷物のように運んでいて、配管工や会計係と同様に敢えて行おうとしないからです。学校の勉強を実際の労働の様に指導して、従って当初から成功するのを望むことは、思っている以上に一般的に多い間違いです。これは思想の吝嗇の如きもので、語法の誤りだけで破滅であると思う人なのです。ソクラテスは多分、誤りの中に止まって、その注意力で思考した最初の人物であり、罠にかかった狐のように決してそこから出て来ないのです。先ずは私を満腹にして騙した儘にして置いてくれ、とソクラテスは言っているかの如くです。(完)

第四章 遊戯

この長い回り道で私たちがついに遊戯そのものの概念に導かれるのは次のとおり、如何なる年齢であろうと、如何なる種類のものでであろうと、次回の勝負に前回の勝負は依存しないということです。この性格は、偶然の遊戯において余りに明白に示されます。しかし実際の労働の法則の否定を、まさにそこに認めなければなりません。その時は全ての遊戯に例外無くこの性格が改めて見出されます。如何なる遊戯にも、敗北とか勝利の如何なる痕跡も最早残っていない様な、大地が整地される瞬間が生じます。そして全てが一新されて再び開始します。それ故に遊戯とは忘却であり、記念物ではありません。そのことによって芸術と区別されます。遊戯は既得の地位、前歴、過去の業績に関する優位などはどんなものでも断固と否定します。この点で労働とも区別されます。遊戯とは蓄積された資本、獲得した事物はどんなものでも投げ出します。それは出発するには役立ちますが、結局は労働によって支えられ、真剣さと心配りと遠くへの注意と権利と権力を生む重い過去を投げ出します。労働というものは、準備と忍耐と長く続く粘り強さを含んでいます。やり直す時は、ずっと遠くからやり直さなければなりません。この法則は、時間についての継続した熟考により人間を成熟させることになります。でも、遊戯は若返らせるものです。それは幼年時の行動です。クロッキー遊び(1)にそれを見ます。全てが最初の状態に戻され、全てが解消され、球は最後に箱に戻されます。勝者も直ぐに勝った地位を失い、きれいになった地面に平等の立場で再び立ちます。まるで毎回の勝負が最初のものであるかの如くです。同様にルーレットも毎日がまるで最初のものであるかの如くです。トランプ遊びの毎回の勝負も、それまで先行した戦いや勝利からは関係が無くなって欲しいトランプの分配で始められますし、屢々新しい遊戯を始めるまでになります。再開してより一層良いことを願い、より一層良いことを行うというこの観念は、間違いや失敗をきれいに洗い流しますし、屢々不幸な労働にもやって来ます。しかし、それはやり場が無く無駄なものです。結果は地面を占めていて、失敗した作品に躓かなければなりません。

遊戯も外部の必然性から決して免れません。風船や独楽の遊戯は、重力と形状に依存しています。骰子の遊戯も同じであり、ルーレットの遊戯も同じです。しかしながら、その必然性は虚しい後悔で一杯であるかの如く不安な人間になるものです。何時までも決して一貫性を持たないものです。遊戯は又、人間的秩序の法則や競争からも免れないものです。しかし第一に、どんな利益も最後には返納されて、何時も平等が復元される瞬間となります。第二に、遊戯は外界と接触しない壺の中で行われるが如くです。惑星を覆っている一つの循環の中での労働として少しも捉えられておりません。狩をしたり、耕したり、運んだり、生産したりする数え切れない多くの人々に依存しておりません。遊戯は、チェスとかトランプとかテニスで遊ぶ人を見てお分かりの様に、一人ひとり数えて閉鎖された社会で、その度に行われていて、屢々隣人同志であったりしますが、共通するものは何もありません。それと反対に、労働する人は人々の宇宙と繋がっています。千里も遠く離れた所で船が沈んでも、全てが変わります。遊戯をする人は自分が引き摺っているものだけを承知しています。

幼年時代の遊戯へ行きましょう。自由な能力の増加としての数々の効果をそこに見ても、遊戯

を説明したことにはなりません。芸術も又、一つの余剰を前提としていますし、労働も同じです。豊かな社会においては極めて明白なことであり、資力の乏しい動物も同じです。何故なら、食物を獲得するには常に余分の力がなければならないからです。もしも食事が蓄積されずに、お座なりのものでしかなかったならば、最後の食事になるでしょう。例えば開墾は余剰を前提とした労働です。そして必要性は、労働と利益が増えて行けば、それにつれて増大します。又は、結局のところ実益には限度が全く無いのを人は知っていますので、厳密に言って遊戯をする理由は全く無いし、必要性の法則から逃れる何らかの方法としての観念も無いのかもしれないのです。

子供は能力を持て余しているから、自然に遊ぶと言われています。しかし、もしも子供が自分の食物を獲得しなければならなかったなら、与える以上に受け取る場合が多くなる成長の法則によって、他の誰よりも遊ばなくなるのは本当のようです。でも、実際には他人の労働によって子供は食物を与えられています。現実の労働の輪からさえも長い間離れています。もしも人間が鼠や兎の様な哀れな状況に連れ戻されたなら、最初に遊戯が消えているのを見ることでしょう。戯れる子猫は、単に母猫に養われているばかりでなく、人間にも養われているのです。野生の動物たちの戯れに関しては、そこに恐怖や激怒を考慮に入れることが出来ていません。遊戯は従って自然によるよりも制度によるものです。

自然の中にあるものは激怒であり、孤立していて遊び方も知らない子供に、直ぐさまそれらの効果が見られます。実を言うと、遊戯は退屈よりも寧ろ激怒に良く効く薬です。それ故に激怒の概念を自然の水準に保持し、性悪説を屢々信じさせる全ての仮定的な動機を取り除きながら、その概念を限定しなければなりません。プラトンは、彼という人間を頭と胸と腹の三つの部分で良く述べました。余りに単純なこれらのイメージを我が国の博士たちは軽蔑していますが、私は胸の殆ど無い大きな頭、小さな頭をした大きな腹、特に胸が全ての太鼓人間を屢々良く理解しました。我が国の三文作家たちは頭と腹しか描写しません。観念と欲求を描写したなら、全てを言ったと思います。ところが彼らは人間の悪の主要な源泉である怒りを忘れているのです。そして、人間がすべきものの中で、貧困が齎す欲求と食欲、並びに裕福が齎す激怒をもしも区別するなら、それは人間にとっての大きな光明となります。

筋肉及び筋肉で出来ている部位は、どんなものでも十分に充電された蓄電池の様なものであり、あるいは火花が期待される爆発物の様なものです。そしてその火花とは、分かっている限り神経を通して来ます。神経組織は血管と同様に、あらゆる部位に入り込んでいます。その組織はそれ自体で数え切れない程の岐路と中心があり、そこで出会う管も様々であり、共通になり更に合成された岐路にまでなりますが、それを脳と人は呼んでいます。これらの管の中で圧力の変化が波となって循環したり、各岐路があらゆる方向へ送り届ける以外のことを仮定しないとしても、既に動物の震えの法則はかなり把握されています。一匹の蠅に関して筋肉の塊を駆け回り、最も軽い四肢を先ず動かし、耳や尾にも駆け回り、ついにはその動物を狂気に変えます。神経と岐路、各筋肉の役目、動かすべき質量に従って、一つの部位から全ての部位へ行くこの前進的な伝達を放散と呼ぶことが出来ます。最初の放散は、医師が刺激という言葉で語るものであり、刺激は二重の意味で素晴らしい言葉です。医師たちが言う処では、外科医のメスを突く回りには防御のための反応が少しずつ広がって行くのが観察されるとのことです。ところで、もしもこの放散が外部の刺激にしか依存しなかったなら、激怒は決して起こらないでしょうし、単に多少なり

とも強力に導かれた戦いだけが行われるでしょう。しかし有機体においては、どんなに小さな活動もそれ自体が刺激になるのは明らかで、動物そのものへの爪や歯の作用は明らかに分かる様に、各部分が外部の異物の如く他の部分に作用しています。どんな生物も自らを傷付けることは多くあり得ますし、何時も自分自身の活動によって少しは自らを傷付けています。これらの伝播の波は、その様にして効果そのものによって維持され増幅されます。その動揺は雪崩の様に大きくなります。各部分は自らの力に応じて、あるいは障害に応じて引っ張り、叩き、裂き、そして噛みます。人はかっとなって、厳しくなった人を叩きます。怒りは、決してそれ以外のものが原因ではありません。これは蓄積された力を考えますが、疲れて終わります。多分、反省しても怒りの思い出とか、そこから新たに把握される恐怖とか、この短い病の予見や予感しかつ加わりません。それは反感や嫌悪や憎悪を説明すれば十分です。どんな敵愾心においても、単に苛立った思い出を見出すだけで人は驚くのでしょうか、それが些細なことではないのです。恥をすすぐためにつけ加えるあらゆる創意工夫は、ぞっとする程に軽薄なものですが、そうであっても慰めになるに違いありません。苛立つ人間の話をどれ程僅かにでも注意すれば、それらの話を既に余りに信じ過ぎているのです。それらは決して思想ではありません。最良は、それらを忘れることです。最悪は、その人が言ったことをその人に考えるように強く命令することです。その様なものが劇の実体です。正しい精神は、目的を探求する代わりに原因に遡ります。それが行動であり、まさに行動そのものです。馬が自らの駆ける音に怖くなるが如く、それが鞭で人間も打つのです。その様にして征服者の情熱は駆け回ります。パスカルが言った様に、野兎が与えられていたなら、野兎を欲しがめることは決してないでしょう。この種の野心は疲労に屈するだけです。その様にして征服者の愛は前進し、障害にはかっとなり怒ります。その様にして戦争も前進します。戦争は倦怠と権力者の娘であり、少しも欲求と欲望の娘ではありません。

子供はそこから全てが、あるいは殆ど全てが説明されます。ご存知のとおり、何一つ不足しないで育った子供が最も温和しい子供ではありません。手の遊戯のようにルールのない遊戯においては、如何にして独りでに荒々しくなるのかが観察されることでしょう。ルソーが私たちに語っている辛い戦いとは、本当に手に負えない子供を導かねばならなかったことです。一見した処、彼らは怪物です。しかしその子供が、本当の良薬である学校の遊戯に参加していなかった限りは、その点について口に出して言うてはなりません。走ることや叫ぶことに使われるものを教えて下さい。模倣とルールのある競争は、何ものにも代え難いマッサージによって、身体の外へ行動を引き出します。そして同時に精神は、遊戯が課している独自の働きによって恥や激昂が取り除かれることとなります。その様にして行動は決して動揺しませんし、観念も動揺しません。教師は、どんな騒音も動きも同等に忍従しなければなりません。そして私は、走り回る子供と、ドアを内から足蹴りにする子供との間に大した違いを見ません。主な相違は、教師が憎しみに燃えた情熱を見せる処からやって来るでしょうし、子供は自然にこの情熱を模倣します。人から言われる儘に子供は自分が意地悪で、そしてその儘であり続けているとさえ思っていることはあり得ます。同類を一目見て、先ず苛立ちそうになる者に災いあれ！ しかしながら意地悪な全ての子供が、意地悪な大人になるかどうか知らなければなりません。何故なら、立派な労働も又良薬になるからです。そして、ルソーがエミールのために労働を探すことにも私は驚きません。子供た

ちから切り離された一人の子供にとってのこの困難な状況において、彼はこれ以上良いものを見出すことが出来ませんでした。

私は七歳の頃、或る子供と大変に仲良しでしたが、彼の父親は毎日怒りと絶望の声を出していました。ところが私は、この恐るべき子供から少しも苦しめられることはありませんでした。そして私が知る限り、彼は穏やかで人から尊敬される大人になりました。このことから理解出来るのは、人間的でない観念を仮定したり拡大したりしないで、実際の原因によって苛立ちが説明されているかどうかです。それらの人間的でない観念が存在する限りは、原因よりも寧ろ結果なのです。それ故に何らかの意地悪さを仮定するのは決して合理的ではなく、特に口に出して言うことは許されません。というのも言葉はしるしを付けますし、動きでしかなかったものを常に観念に変えるからです。お分かりの様に、ボールを足で蹴ることは、健康のものである以上に理性のもので、要するに、遊戯は幼年時の宗教と考えなければなりません。あるいは同じことになるのですが、少しも働かない子供の民衆の芸術と考えなければなりません。そして、幼年時は長く大人の後を多分何時も付きまといま。同様に遊戯も又、少なくとも実際の労働の近隣で姿を変えたものなのです。（完）

(1) クロツケー遊びは、木球を木鎚で打ち、一定数の小さな鉄門を通過させてゴールを競う。

第五章 子供の民衆

キプリングの本の中で、像が調子に乗りすぎて杭を引き抜いたり、夜の呼び声に応えるために如何なる人も見たことが無い儀式である象たちのダンスに駆けつけたりします。かくして民衆から離れた子供は、子供たちの呼び声を聞きながら、閉じられた窓の背後で止まっています。綱を噛み切ることが出来るや否や、遊びに駆けつけますが、それは子供の民衆の儀式であり信仰です。彼はついに自分の同類をそこに見出しますし、彼らと同じ動きに無類の幸せを味わいます。そして彼らの動きの中に独自の動きのイマージュを認めると同時に、そこには規則があることも理解します。

家庭において、子供は決して自分自身ではありません。子供は全てが借りものです。彼は自分の年齢に相応しくない人の真似をします。子供はそこでは異邦人と同じです。何故なら人が貸してくれる感情も、自分が表す感情も、感受していないからです。この時、規則は彼にとって外部のものです。そして、規則を崇めているのですが、何時も背かざるを得なくなります。暇にかまけてのこれらの活動は逆上へ赴きます。そうでないと子供は臆病になるか破廉恥を抱くしかなくなります。それは又別の病でもあります。そこから動揺した退屈が生じますが、理解されることは余りに少ないものです。人が意地悪と呼びたがるものは恐らく、綱をちぎって子供の民衆を見付けに行くことが出来ないで苛々することではしかありません。良く知られていないこの民衆は、無神論者であると同時に宗教的でもあります。あらゆる遊戯には儀式と祈りがありますが、外部の神は全然おりません。変わることも老いることも無いかも知れないこの民衆は、自分自身に対して神なのです。自分自身の儀式を崇めて、他は一切崇めません。これは宗教の青年期です。子供は、子供にとっての神なのです。

俗人たちが観客になると大きな物議を醸します。遊戯に加われば尚更です。偽善者は、信仰を持った人々を騙せません。そこから不可解な気分の動きが起こります。子供であった私たちと一緒に、鉛の兵隊で遊びたがった無遠慮な或る父親を私は思い出します。彼はそのことを何も理解していないと私は明白に分かりました。彼の息子本人が、全てを直ぐにひっくり返しました。大人たちは決して子供たちと一緒に遊んではなりません。子供っぽくしても決して子供を騙せません。最も賢明な手段は、外国の儀式に臨まなければならないように、この民衆に対しては礼儀正しく遠慮深くしていることであるように私には思えます。一人の子供が同じ年頃の子供たちから離れていると、遊戯心が彼を年長者たちや両親からなお一層離します。彼は一人でしか上手に遊びません。

手品遊びは、神秘の役割が最も少ないものです。それらは自然の力に対抗して、殆ど何時も重力に対抗する何らかの効果を取得することが重要である点で、労働に似ています。しかし、その後には何も残らない点で遊戯なのです。従って或る意味で遊戯は労働を準備しますが、又或る意味でそうではありません。遊戯は何も生産しませんし、事物の世界においても何も変えません。サッカーの試合を二十戦しても、ボールとピッチをすり減らすだけです。成果は丸々全てが競技者にあります。こうした訳でより一層敏捷になって強くなるのであって、自らの主人になります。

そして、有益さに少しも相違がある訳ではありません。何故なら、敏捷で強いことが有益であるからです。他の処では祭日のために旗竿や旗や台を全て準備する如く、厳密には有益で無いとしても、それでも労働に変わりありません。庭は贅沢なものかも知れませんが、しかし園芸は、幼い子供が砂場で均斉と一直線を求めながら何らかの秩序に従って小枝を植えて行こうとしなくても、遊戯ではありません。しかもこの傑作は滅びるものです。事物はその時、規則に従って行動するための一つの機会でしかありません。その代わりに本当の園芸においては事物が規則を与えています。そして私はここで単に思い起こすのですが、芸術が断じて遊戯では無い決定的な理由がそこにあります。狩も同じく遊戯ではありません。というのも規則を与えるのは、対象である兎とかヤマウズラとか雄鹿であるからです。ところが、もしも子供たちが狩で遊ぶとなると、子供たちの間で何らかの規則を取り決めるようになり、一人が動物になり、他の子供たちは犬や猟師になるでしょう。足跡とか臭い、あるいは大人たちの声の後を追って行くのは遊戯ではありません。ところが紙切れを撒く人の後を走って追いつくのは遊戯です。この相違は非常に重要です。何故なら、遊戯においては無縁の事物や敵対する事物という観念が全く欠けているからです。従って遊戯は自分自身に立ち戻り、そして自分自身を対象と捕らえるからです。そこから結論されるのは、遊戯の規則は尊重されますが、反対に労働の規則は決して尊重されません。働く人間には最良の規則が無いので、知っている規則に従うのですが、近道の方法が見付かればそれを実行します。それと反対に遊戯においてはご存知のとおり、どんな方法も許されている訳ではありません。従って遊んでいる者は、全然事物に捕らえられません。彼は自分の約束に捕らえられているだけです。もっと適切に言うなら、自分の宗教に捕らえられているのです。もしもトランプ遊びが労働と受け取られていたなら、ガラスに映って見えるのに、予測して有利なトランプを見抜こうとするのは常識的ではありません。それ故に子供たちが本当に家を建てているなら、家を建てて遊んでいると私は決して言わないでしょう。何故ならその時は、遊戯を定義するものが欠けているからです。それは障害によるのではなくて、自分自身の意志によって捕らえられているものための何かを知ることであるからです。遊ぶ者は、遊ぶのを誓った者です。もしも子供たちが本当に家を建てたなら、その時は子供たちの行為として約束されている行為とか、禁止されている行為は何も無いのです。単に有益なもの、無益なもの、有害なものがあるだけです。正しく行動したのか、間違っただけで行動したのか、それはその家に住居している際や、その期間の長さによって決められるものです。それとは反対に、遊戯における対象は見せかけでしかありません。この側面によって遊戯は労働になり得ない何ものかです。しかし内部の体制に関しては、大人も子供も自分自身にしか従わないで自らを研究するので、労働以上の何ものかでもあります。サッカーの試合で、取分け観客がいない試合での全ての困難は、試合をする者の意志そのものから生じることです。少女がだんだんと難しい試みを行っていて、たった一つの間違いで誰からも強制されずに、誰からの意見でも無く、全て最初からやり直すのは見ても美しいことです。かくして玉突きなどの技量を必要とする遊戯においては、既に人間がここで自分自身と共に困難な中において少なくとも勝利のために懸命になっていることが分かります。人間は齢を取るにつれて先ず道徳と政治の問題へ赴きますが、それは注目するに値します。外部の必然性が何時も私たちの企図を支配しているというこの重要な観念は、確かに遊戯に欠けていますが、結局のところ私たちに力を与えているのは服従との引き替えでしかありません。しかし、それに反して

人間にとって最も緊急のある必要性が自分自身を管理したり、そして結局のところ規則に従って行っていないことに有益な行動があるという、このもう一つの観念が労働には欠けているのです。遊戯に人は誓約の力と制度特有の抵抗を体験します。それ故に政治は、遊戯によって学ぶのであり労働によって学ぶのと同様ですが、多分労働以上です。

儀式の遊戯においては、踊りや詩や歌が殆ど何時も結び付いています。あるいは少なくとも敬意と礼儀に対する模倣があります。従ってここにはそれ自身への義務が純粋な状態に身を捧げると同時に、それらの情熱を発生時に純粋にするための配慮が本質的予感となって現れています。人類は理性的で美しいが弱くて騒々しいと理解させてくれるに、これ以上相応しいものはありません。子供が自由になった時の動揺や叫び声に再び一度ならず注意を注がなければなりません、最後には喧嘩になります。それとは対照的に全ての遊戯、より一層明瞭に言うなら、儀式の遊戯は筋肉のエネルギーを大いに自由にするのはなくて、荒々しさや拘縮や激昂から綺麗にして規定することを目的に見倣しているのは明白です。以上が歌や輪舞の目的であり、そこには大抵常に踊りや演劇の古い要素が認められます。即ち、合唱隊や叙唱部を歌う人々です。しかし、単に子供の民衆という伝統によって規定された完全な事例を観察する機会はめったにありません。二つの例を引用するだけにします。

「塔よ、気を付けよ」は、交唱付きの一種のバレエで、私は一度しか、それもちらっと目にしただけでしか観察することが出来ませんでした。それは人類の実際の風習が、鳥類よりも殆ど良く知られていないと私には考えさせられました。この遊戯は庭園の階段の上で行われました。それは規則正しいリズムを持った襲撃のようなもので、ミュージクの神々の支配下であらゆる欲望と拒否の象徴のようなものでもありました。その日、私はこれらの不死の女たちを見ました。その光景は、人間嫌いを治すためのものでした。優雅であり、素晴らしい羞恥です。法則への宗教的な注意です。遠くを見据えた眼です。人間の声を追う耳です。そのことだけで自然であり、無垢であって未だ内容が無いのですが、それなりに大胆な感情が無くもありません。結局のところは待つことです。そして、心の曙です。

私たち人類に完全な独自性を把握する必要があるとするなら、気付かなければならないことは、自然がその様に構成するしかないことです。勝手気儘な自由は、変わり易さや逆上や激怒によって、見ていると直ぐに墮落します。こうした無秩序に付きまとう恥辱は、それらを頂点へ持って行きます。独りにされて、或る種の見世物にされている子供に、赤面させられるこの種の動揺を観察することも珍しいことではありません。これらの活動を制止するのは年齢が成せる業ですが、この縮小は無意識なしるしを予感させます。そして、最後には現実のものになります。これらのしるしへの恐怖は、自然さをすっかり隠して仕舞い、臆病な人々にとっては悪になります。そして最悪は、どの様な薬も遠ざけて、これらの絶望的なしるしには少しも意味が無くなることです。それ故に自然さは示すのが難しいのです。だがその上更に、村の踊り同様に歌う遊戯も自分自身が所有するものを各自が表しているのであり、嵐が来そうな人間の心については確信を与えます。そこから情動の感情は、情操の水準へ高められるのです。この正しい予感によって少女たちは解放されて自由になり、美しくなったのです。

私は、もっと野生的な踊りの様子を語っているのを聞いたことがありました。〈木の針〉とい

う遊戯では、繰返しと速い変化によって、踊る人々の鎖が縮まって束になり、〈狂女になって喜ぶ狂女〉をもう少し良く私たちに見せてくれているのが分かります。この交錯した遊戯は、或る不条理な詩と結び付いています。「針には糸が通っている。針は焼かれなければならない」。これらの不条理な言葉が、伝統的なものであるのを観察しましょう。それと同時に威圧的で堅固なリズムとも結び付いています。疑いも無くその時の精神は、この流浪する想像力と鎖で繋がり、不屈の音楽からの影響に基づいて同一の道に少なくとも連れ戻ることを喜んでいます。ここでは、理性は狂気を見分けて、その主人になり、その見方に耐えています。従ってこの遊戯は、先程のものよりも深いものでしょう。野生的な自然に、より一層近付いているでしょう。熱狂的な即興を敢えて生き生きと表すのでしょう。しかしながら、リズムの法則は一瞬たりとも屈服することはありません。先の遊戯においては、怪物は馴らされるよりも寧ろ忘れられ仕舞いました。きちんと服を着せられていました。かくして悲劇的なものの中には常に偽善があります。しかし喜劇には全く無いのです。

これらの二つの事例から考えられることは、儀式の遊戯が少なくとも人間的な法則に従って結んだり解いたりしながら、そして何時も間違いを教える外部の力による試練を前に、人間の生命の主要な働きと、最も一般的な危機を予め試みることであり、しかも用心を欠くことも無いことです。それは生きるための労働です。年齢というものは、人が道具を変えるように、感情からも更に分かれています。遊戯は一種の予想であり、厳密には観念の形成に類似するものです。輪郭が先ず閉ざされ、幾何学の空間と同じく形式が内容を待ちます。実を言えば少女たちの合唱隊が、速い変化の節で広がって織り成して行くのは感情の観念であり、その様な観念で一人ひとりは自分自身の生命を把握しますが、先ずはこの生命に問いかけ、そして何らかの方法で呼びかけます。これらの観念についても、事情は全ての観念と同じでしょう。幼年時代は、これらを形づくりします。青春時代は、これらを試みます。壮年時代は、大変な苦勞をしてそれらを維持します。老年時代は、非人間的な力による行為の前にそれらを行かせます。（完）

第六章 大人の遊戯

全ての大人の遊戯において最後に発見されるのは偶然の遊戯であり、それは全ての遊戯の中心になるものでもあります。しかし、この遊戯で遊ぶ人々以上に秘められているものは何もありません。外観上は露わで、単純で、冷笑的であり、殆ど不可解なものです。私は、最も剥き出しになっているこの危険とまさに隣り合わせにいる人間を屢々観察しましたが、彼は要求するのが最少であり、又最も多くもあります。私は、期待により曇った冷たい視線と、変わることの無い軽蔑を受け取りました。この人間やこの世界、全てのものに私は高慢な軽侮を感じました。それは多分、武器を投げ捨てた勇気です。この絶対的な遊戯は決して幼年時代のものではない、と言うのは正しいことです。幼年時代は行うことを決して諦めず、直ぐさま出来事の結果を変えて仕舞います。勿論、状況が許すことによります。独楽は閉ざされた従順な一つの宇宙です。その動きは固定されたその力の中に、自らの姿を映しています。垂鈴や円盤や球は、少なくとも人間の仕事を証言しています。そこでの必然性は、私たちの手段で測られます。そこに予見出来ないものは少しも入って来ません。しかし、これらの遊戯の時間は既に過ぎ去りました。労働が私たちを拘束し捕らえています。事物たちは抵抗します。人間も抵抗します。時間が作品にしるしを刻みます。考慮と用心と忍耐と祈りです。大いに術策を弄して来た老人はここで報復を待ち、そして決して忘れません。郡長に過ぎなかった一人の若者が怒りにいきり立って或る日、警察署長に報告させて早くやるように言いました。しかし彼は直ぐに、人々を独楽のように決して回転させられないことを知りました。何と言うべきでしょうか。大地にすっかりぴったりくっつけた大勢の人々を、労働の母である大地そのものに散乱しなければならないと言うべきです。すると穀物は実ります。もう待てない瞬間まで人々は、待たなければなりません。若駒に付けられる轡はこの様なものであり、若駒たちは歯をすり減らします。野心家たちも穴倉や基礎工事に何年もの最良の時をすり減らします。人はその好機に驚嘆しますし、それを素早く手に入れた幸福な人間にも驚嘆します。しかし彼がそれをしっかりと手に入れたのは大人になってからです。彼はそれを捕まえて、軽く揺すり、愛撫して、舐めて来ました。この様にして彼は一回きりですが、一生続く勝負において絶えず事物や人間に勝って来ました。続けること、受け入れること、従うこと、損失から利益を生むこと、失敗や廃墟の家から成功することの法則とは大人の労働であり、農業はその典型です。これらの真剣で熱心な生活に、損得を言うことは誰も決して出来ません。寧ろ、絶えることのない自然や人間たちの圧力によって常に損失になります。又は、しがみつきよじ登る努力によって常に利益にもなります。これらの生活を支配しているのは運命であり、予見出来ない足蹴りが至る所から起こって来るのです。しかし結局のところ、転がっている名も家に取り込まれます。運命は、勤勉な者には利益を与え、怠惰な者には損失を与えます。

遊戯をする者は、彼も財産も太陽の光で熟すことを決して望みません。彼は待つことに苛立ちます。彼は、決して報いられないし、相応に罰せられることさえも無い果敢さを決して背負い込みません。以上は、反省の第一の契機です。それは自然に従って遊戯することの拒絶です。障害も限定され、行動も同様に限定されて全てが十分に明らかになった人間に従って遊戯するための頑固さです。そして、沢山の未知の力が各人と共に引っ張っているのです、少なくともそれらの力

は未知で非人間的であって、無理な約束はしないのです。損失から利益を生み、利益から損失を生みながら、遠くでこの英知はやぶにらみで見当違いであり、何時も騙しているのです。その様な成金は、まさに何時も損をしている人間の顔をしています。労働は、穴を掘るこれらの相続人たちによって力強く表されますが、彼らは宝物を探していても、少しも探していないものを発見しているのです。無言で曖昧なこの財産は、非常に腹立たしいものです。人はそれを屈服させたいと思います。クーフォンテーヌが言うように、〈神〉を試み、そして最後は〈神〉が答えることです。しかし、デルフォイの神託は既に答える術を知っていました。

遊戯は常に答えています。ここには決して猶予が無く、曖昧なものは何もありません。運命に従わなくてはならないので、せめて運命が望んでいるものを知りましょう。この種の試みは、雌雄を決する処で不幸を招きますし、大人の遊戯の内奥にあるものです。戦争は、一日で全てを決定するためのこの意志によって、それらの大人の遊戯を全て集めます。言葉の見事さにもよりますが、交渉することとは、戦うことに反対するものです。ところが、この挑発の精神は戦士にあってさえも直ぐに慎重さに屈します。戦争は労働であり、策略であり、忍耐であるために、まさに迅速に終わります。又、同様に探検家は農夫にも外交官にもなります。従って遊戯の精神は、死んで仕舞うか、清められるかしなければなりません。

組み合わせられた遊戯においては、曖昧な処があります。運命を極力排除しているチェスの様な遊戯は、認識するのを決して待たずに、軽率に命じることでしか遊戯であり続けません。しかし、そこに専心する者はそれでは済まなくなると、正確に言うなら、労働に陥ります。どちら側からも上手にやったゲームというものは勝負になりません。西洋双六は、予見の精神に終止符を打つ骰子によって、この状況を削除します。トランプも他の方法で削除します。これらの遊戯は、悪運を最良に引き寄せる注意力によって、なお労働に似ています。これらのあらゆる遊戯も又、遊戯です。現実の必然性に左右されないのは次のことによるからですが、それは勝負が前例に依存していないのです。ところが、それらの遊戯は情熱を楽しませるだけです。実際の処、私は時々気付いていたように、真にトランプや骰子が好きな人々は、無駄な用心を捨てて何時も運命に問いかける機会を待っているのです。組み合わせる楽しみ、即ち知性にとっての固有の楽しみは狭い限界の中で行使するものですが、その時に近道の妙手は無く、重要な事柄を盲目的に決定します。結局のところは敢えて行って仕舞う楽しみを前にして、突然に無と同じになって仕舞うのです。途中で知恵を規則としないで情熱の遊戯を体験した人々は、人間の中で最高の機能とは決して理解することではなくて、欲することであるのを多分良く知っている唯一の人々です。そこから、如何なる思考も無いこれらの機械的で単調な遊戯となって、驚くべき情熱が発展して他の全ての情熱を消して仕舞います。もしもそこに人間の全てが無いとするなら、一体誰が遊ぶのでしょうか。

ここには一方に独りきりの必然性があり、その前には純粋な自由がある様に私には思えます。見抜いたり、予想したりすべきものは何も無い様に全てが規定されています。その反対に必然性は、事前にも事後にも出来ないので勝利から直ぐに剥奪されます。選択する能力は何時も同じものです。そして、克服出来ないこの不確かさは、お金を愛する人々を遊戯から遠ざけることになります。行ったり来たりするお金が、激しい欲望を目覚めさせない訳ではありません。だが、これらの欲望は何らかのやり方で操られ、回復され、取り除かれます。吝嗇も絶えず試みられま

すが、何の力も無いことを納得させられます。人間は自分の情熱に鞭打ち、そしてその情熱を軽蔑します。大胆な人々は、恐怖を待つことよりも探しに行く方が容易であることを良く知っています。退屈している人々には感動が必要であると時々言われます。労働は、時々しかし即興的に生き生きした感動を与えるから、ここでは十分ではありません。その反対に遊戯の感動は、指定された点で始まって終わります。それらの感動は見出され、捨てられ、調合されます。しかし、遙かに労働以上のものがあります。人はそれらを支配しますし、支配していることが証明されます。慎重さは打ち破られ、そして勇気だけが独り行使されます。それ故に遊ぶことは、常に半端な美德です。勝負に負けても潔い者は、絶えず欲望や恐怖から無関心へ達成します。でも、それはつまり激しい感動を生じさせますが、その感動よりも強いことを示しています。それで選択することにある自由らしきものの背後に、自らを支配することにある本物の自由が直ぐに姿を現します。遊戯は従って最も高い勇気に似ています。精神力は、服従と忍耐を望む労働の現実的な条件に従うことがありません。望む時に、そして望む儘に自らの試みをそこに見出します。事業や政治や戦争においても、気高い心は、恐れていることを試みるのでしょうか、それは人に勝つためであるよりも寧ろ自分に勝つためであるのです。これは恐らく、後退の最初の動きであり、自己から自己への大逆罪であり、アレクサンドロス大王が盃を空けたのもこれを行ったからです。この様にして人は遊戯し、毅然とした精神は既に損失を慰めています。どんな自然も御し難いこの心に従う時、自然でしかないこのルーレットで利益を得る喜びとは何でしょうか。(完)

第七章 運について

私は今、深く秘められた一つの観念に偶然に出会いますが、この観念は現実的で誰にも感動させます。私は、用心しなければ触れようと思いません。或る野心家で重要な人物について私は、彼は運が無いから決してこの儘でいないだろうと言ったことがありました。幸福にならないとも私は言えました。この別の言い方を覚えて置いて下さい。それは運に関する本当の顔を私たちに見せてくれることは十分にあり得ることなのです。しかし、そんなにも急がないことにしましょう。私は先ず、運が幼年時代の観念ではなく、青春時代のものでもなく、寧ろ経験の賜物であることに気付きます。迷信と同じ様なものであると私は言うでしょうし、全く年齢や革帯での折檻のしるしの様なものです。その上運は、あらゆる迷信を唯一の観念に集めているかも知れません。しかし運に共通している観念とは、絶えず有利とか不利とかいう一連の試みです。一つの試みが他の試みに如何に依存しているのか気付くことが出来ない、と先ず言いましょう。それなのに遊戯は、その様な観念を殆ど与えることが出来ずに、反対に受け取っている様に思えます。しかしながら何処から受け取っているのか、私には良く分かります。全ての遊戯に見出されるのは、各々の勝負が終わると全てがご破算になって、一つの試みが決して前の勝負の影響を受けないというやり方であることで、この条件によって私は良く分かります。しかしながら、その条件が本質的なものである偶然の遊戯と、その条件が事物の中でしか実現されず、試みる者の中では実現されず、技能を必要とする遊戯とを、区別しなければなりません。全てがご破算になったとしても、困難であったことが少しずつ容易になって行く訓練の素晴らしい効果が上がる時に、これを運と誰も呼びません。ところが技能を必要とする遊戯には、他の効果があります。それは不幸の想像力から生じるものです。落ちるだろうと思う者は、良く落ちるものであるからです。不幸の観念はその様に不幸を呼びます。そして自己へのこの予言は、余りに明瞭な特徴となって顔に出て来ます。そこから、少しも幸福でないとか少しも運が無いと一様に言われます。ここで注意しなければならないことで本質的に驚くべきことは、この不幸な顔は失敗した行動を極めて良く示していて、まさに生理学的にそれを説明していて、何も偶然のせいにしていないのです。ここでの遊戯のメカニズムは、遊戯者の筋肉状態が出来事の中には決して這入らず、又少しも這入ることが出来ないやり方で調整されているのです。例えルーレットを回したりトランプを配る手が無関心なものでないとしても、その時は情熱が何かを変えるにしても、情熱は赤と黒、偶数と奇数の相違を説明出来ないやり方で全てが調整されているのです。更にこの側面によって、偶然の遊戯は不運に対する最後の避難所になります。この観念はそれ故にここに持ち込まれます。でも、ここに居る場所はありません。この観念はここでは異邦人なのです。

この観念が、技能を必要とする遊戯や労働から齎されると言っても、それも又本当らしく思えません。というのも想像力は最初の観念しか動揺させないからです。これらの観念が訓練によって直ぐに打ち破られるのは、経験から分かります。しかしながら、勇気を失って最初の試みを続けなかった人々の裡には、何らかの痕跡が良く残されているかも知れません。顔に読むことが出来る自己への糾弾は、確かに不運の一端です。しかし、この力強いしるしを観察しましょう。それは他人の顔にも反射されます。何気なく送り返されて、説得することを原則とする全ての物事

にも糾弾を持ち込みます。手では触れない運で、好運とか悪運が走り回るのは、ここの人間の世界の中です。人の気に入ることが重要になるや否や、もしもそれに成功しないと確信される合図があるなら、どうしようもない障害になります。何故なら、そのことだけでも気に入らないからです。そして、相手もこのしるしを送るので、この不幸な男を前もって糾弾します。その結果、人間の視線には大変な力を持つようになり、屢々節度も無く使用されますが、それは麻痺させるのが確実な軽蔑のしるしによるのです。そして確かに自分自身のしるしによって、人々の顔にこのしるしを生じさせている者は、まさしく運が無いと言えるのです。美しさも又運を与えますが、美しさが無くても人を喜ばせることは出来ます。そして、あらゆる行動において自信と希望と勇気のしるしによって、判断を左右させることが出来ると言わざるを得ません。そこには運に関する本質的な点と最高の契機があります。さて次は、如何にしてそれらの運の効果が一つの試みから他の試みへ発展して行くかですが、あらゆる行動において重要なのは納得させることであり、結局は信用を得ることです。そして、一つの試みが物質的な連鎖による前例に決して依存しない場合においても同じです。他人たちは私たちが結果に沿って当然に判断し、私たちが既に示したものに似ている何かを私たちに期待することは、既に多くあります。人間の仕事は沢山の原因に依存していて、その多くは決して眼に見えないので、それが実行されるのは成功した人間の方法で判断することになります。もしも最初に利益を得たなら、二番目の成功には著しい有利が与えられることになります。逆の結果は更にもっと強烈なものです。何故なら全てを支配している老人は、信用することよりも疑うことに陥り易いからです。それ故に野心家は成功から成功へ、あるいは失敗から失敗へ自然に歩むのです。彼は自分が運ばれて行くのを、あるいは滑って行くのを感じています。しかし、特に野心家は次のことを知っています。彼が信用を得るのは相手からの信用によるものです。最も些細な成功も、より一層決然としたものになり、同時に見た目にもより一層心地良くなります。その反対に失敗は気難しくて、不器用になって迷いも出て来ますし、同時に見た目にも何とも不愉快になります。あるいは少なくとも全く邪魔になりますが、それは反省によるのではないのです。というのも反省すれば、人々はやはり同情しますし、進んで弱者たちを援助するからです。しかし直接的な効果によって観察者は、悲しそうな懇願者を疑うと同時に、自分自身も疑います。従って、悲しそうな顔の効果は屢々最初の時だけですが、気難しくなった人を逃亡させるには十分です。余り人の気に入られない経験をした人は、居直るか引き返すかすることになりますが、実際の手助けによって最後には運に打ち勝つことになると思えます。反対に人の気に入られているとの確信を持った人は、時々余りに苦い失敗をすることになり、一般的には悲しそうに憔悴した人々に対して弱々しくなります。その時は余りに早く諦めます。いずれにせよ現実であろうと仮定であろうと、反感のしるしは私たちにすっかり思い止まらせて仕舞います。私たちはどんな運も幸福も、幾多のしるしの中を探します。悪い目付きの迷信は最も力強く、最も古く、最も抵抗力があります。これらの顔は不幸を齎すと信じられていて、人は顔を背けますが、懇願する人も懇願される人も同じであるのは本当です。幸いなことに道は一本ではありません。兎に角、外部秩序の原因及び人間秩序の原因は、一団となってそれらの多様性と無限の組合せによって無関心でいるので、顔から顔へ遊戯する想像力が野心の足取りを唯一で規定しているか、その殆どを規定しているのは事実です。それはもう遊戯ではありません。その時は次の一撃が、前の一撃に依存しているのです。遊戯とは反対のものでさえあり

ます。青春は何時も名誉や羨望や憐憫の見る処では、余りに早く成長しますが、屢々失敗します。この時は自分の運を待ち、これに従い、利用し、あるいは諦めないで告発する観念が生じて来るのです。人は礼儀正しさの力に気付くことになるでしょう。しかし、それは顔付きやもてなしに齎される、これらに有利であったり有害であったりする伝言を少なくすることを、取分け目的に見做しています。だがその上更に、最少のしるしであっても、しるしの構成によって恐ろしい意味になって来ます。そして、しるしが無いと、臆病者が更にもっと素早く逃げ出すことは良くあります。臆病者は野心家と同じです。それらの人間の顔による遊戯は、失敗の連続が他の失敗を予告するのと同じ様に、成功の連続が他の成功を予告すると、余りに考える覚悟をさせます。以上は、幸せの一撃も、不幸な一撃も、連続したものから生み出されているという逆説的な観念の起源になっています。それは偶然の遊戯には何一つ基礎を築かない観念です。何故なら偶然というこの表現が言いたいのは、専らその様な善悪の連続は次の一撃がその前の一撃に何も依存せずに、遊戯者の情熱にも依存しないこの法則によって、全く無視されていることの様に私には思えるからです。しかし、遊戯者はまさしくここに心の愚かさや、しるしへの恐れや、結局のところ野心という病に効く薬を探しに来るので、好運や悪運の観念を齎したり、この上なく僅かな気配によって薬と共に観念を取り戻すのを信じても驚くに当たりません。観念のこの悪しき混同は、それ故にここの遊戯台で作られるのです。唯一の一撃がそれ自体で、他の何よりも多少なりとも本当らしいと見る感情を形づくりします。偶然の遊戯に関する理論は、断固としてこの観念を否定します。しかし、その理論はこの観念と係わり合っていますし、又私は、例えば同等の確率を定義したいと思えますし、その理論が否定するようなことを保持しながら、何らかの痕跡を止めていないとは断言しません。それは蓋然性のものであり、疑い深い私たちの心の中にしかないことです。この不実な観念の力は、どんなものも巻き付いて苛立たせており、恐らく次のようなものです。つまり人間の仕事という大きな仕事においては、蓋然性の計算は蓋然性を変えるのです。しかしもう一つのメドゥサ(1)の頭である数学者は、私をここで立ち止まらせます。(完)

(1) メドゥサは、ギリシア神話にて醜怪な顔をしていて、頭髮は蛇、眼は人を石に化す力を持つ。

写真（アランの家）



アランが1917年に購入して、生涯暮らしたパリ西郊ル・ヴェジネにある小さな家（記者撮影）

第一章 翼

春が過ぎる頃になると、誰にもひな鳥を育てる鳥たちを観察する機会を持ちました。単に農場や畑だけでなく、公園や通りの石畳の上にまでひな鳥を見ますし、翼を少し広げて震えているのが分かります。このしるしは私たちにとって嘴を開けることよりも意味がはっきり分かる訳ではありません。何故なら嘴を開けることは、行為の開始に過ぎないからです。しかし私たちは、その翼が何の役に立つのか最初は分かりませんから、大変なしるしなのです。従って、その目的によって理解するのではなくて、原因によって理解しなければなりません。震えは、抑制された開始の動きであって、常に悲惨のしるしでもあり、私たち人類にも良くあることに先ずは注意しましょう。それ故に翼のこの震えは、一見して飢えた者と養う者を、私たちには見分けられます。養う者の動きは、これと反対に突然で素早いもので、何のしるしでもありません。何のしるしでもないその行動は、それ自体が全ての存在における力のしるしです。

しかし、原因を見てみましょう。欲望が体全体を動かすのは、先に説明した放散によって、自然なことです。あるいはもっと適切に言うなら、この放散によって、欲求が欲望に姿を変えるのです。弱さや未熟によって欲望の動きが抑制され、それらが逆に不安にさせるのを意味するものであっても又、驚くに当たりません。最初の恐怖と同じ様に、最初の欲望も先ず動くものであり、取分け最も動きが多くて、最も軽くて、最も自由な部分を動くものであると理解することも出来ます。情動の最初の波は、馬を何時も跳び上がらせるものではありませんが、ダーウィンが指摘したように力強い動物の耳や尾っぽを直ぐに動かします。私が翼の震えを理解するのもそこからです。何しろ、翼以上に動くものがあるのでしょうか。しるしの生理学は、構造と状況を先ず考えなければならぬように私には思えます。沢山の筋肉があらゆるものに動揺させられますが、波とか液体とか何とでも言いたいように、全ての神経繊維における循環によるあらゆる方法で動揺させられます。もしも当て所の無いこの動揺の最初の効果を理解したいなら、沢山の筋肉が固い関節のどんなものの上に如何にして生まれるのか、影響を与えるのはどんな部分の上か、ぶつかったり支えたり噛み付いたりするのは何に対してかを見なければなりません。鳥の翼は従って優れた意味を持っているに違いありません。何故なら強くて自由であるからです。そうして、あなたは近付いてみて下さい。雛鳥が敏捷に飛び立って行くのを見るでしょう。その様なものが恐怖のしるしであり、逃亡そのものです。一定の意義を持つこととは、先ず行動することです。そして、しるしを理解することとは、先ずその行動を限定することです。橋の上から全ての人々は下を見詰めます。私も又見詰めます。私はしるしを理解したのです。全ての人々は逃げ、私も逃げます。私はこのしるしを見る前に、このしるしを理解する術を知る前に、このしるしが意味するものを知る前に、このしるしを理解しているのです。そして、模倣が十分に説明していることは、部分的には同じ構造と同じ状況によって、そして結局のところ次のことによって、つまり一つの形を知覚することは何時も何らかの動きによって模倣することであるのは余りに明らか

です。私は矢に従うために矢を作ります。しかし、私は決して矢ではありません。私は逃げるのを見る人間と共に、私も逃げます。何故なら私も人間であるからです。何時も戻らなければならないのはここです。しるしについての全ての光は、行動からやって来ます。

翼のこの震えにはそれ故に必要な場合には習慣によって、食べることに結び付いた行動を見出さなければなりませんし、儀式になった行為に変わるかも知れません。かくしてダーウィンは、ラブラドルの家鴨たちが台所の敷石の上で地団駄を踏んで、空腹であることを意味しているのを観察しました。それは家鴨たちが水底の泥の上で行う動きと同じであり、食べる幼虫を追い出しているのです。あなたは更に、ダーウィンには他の例を幾つも発見するでしょう。恐らく人間のしるしで最も注目すべきは、「はい」という頭部のしるしです。それは顎で物を食べる動きそのものです。そして、それとは逆に頭での「いいえ」は、適さないもの、同化出来ないものとしての食物を拒否します。この様にして黒鷯は食べたい物に嘴を真っ直ぐに刺して、突っ込むのです。そして反対の時には、他のどんな動きによっても、不必要な物を右に左に同じ様に勢い良く拒絶するのです。それは「はい」と言うことであり、「いいえ」と言うことでもあります。従って、この道を辿って私は巣の中の雛鳥の動きがどんなものであるのかを探し出します。親鳥が近付くと、各雛鳥は動き出して押し合いますが、取分けその時は腕のように翼を小さく動かします。それらの動きは余裕が少なく、継続して繰り返されます。何故なら、雛鳥たちはお互いに絶えず押し合い伸び上がるからです。構造と状況を絶えず考察することにしましょう。巣の形は、全ての卵を重力が絶えず集めて一つの存在になるようにしています。そこからはせいぜい古い欲望と結び付けられた震えになるのです。

ところで如何なる生き物も、食物を最初に取得した時の動きを忘れません。生き物が望んだり愛したりする時は、常にこれらの動きによっています。それ故にお分かりの様に、人間の口づけは乳を吸う動きを模倣しているものです。祈りの仕草は、乳児が体を傾けて母親に押し当てるのを模倣していますし、乳房を搾る両手の仕草までも模倣しているのは本当のようであるのと同じです。ところが鳥も乳を飲むと言えとするとするなら、単に嘴を開けているだけでなく、翼で支えを探してもいるのです。どんな欲望も自分の行動だけに依存しなくなると、それ故に謂わば巣に戻るでしょうし、最初の幼年時代に戻るのです。

少なくとも雀やアトリやシジュウカラの様な小鳥類は、私が今まで言って来たことを見事に立証しています。というのも同じ翼の震えにより、愛が意味されているからです。私はその中に豊かな混淆を感じます。何故なら、最も力強く自由な部分が全身の動揺の中で最初に動き出すのは自然であるからですが、同様に欲望が同意を求める時も、力による行為が常に抑制されて新たに又試みられるのは自然であるからです。そして、愛する人間においては屢々注目すべきものですが、精神の輝きも又、力による試みであるのは十分にあり得る事です。しかし、この征服は手に入れても何の役にも立たないので、深い恐怖によって素早く抑制されます。兎に角、愛が鳥を巣に戻す様に、人間を揺り籠に戻すのは事実です。子供の愛の神であるキューピットはそれ故に、人々が信じる以上に多くの意味があります。私たちは如何にして何時、欲することを学ぶのかを理解しなければなりません。そのことは大変緊密に私たちのしるしに結び付いた観念に、何らかの光を与えます。従って、どんな欲望も私たちを幼年時代へ導きます。そして臆病は、一部分から全体へ広がって行く動揺として既に理解されているのみならず、主として幼年時代への

回帰であるかも知れません。しかし、その反対に成熟や力強さのしるしを前面に出すことを求めると、直ちに人間の醜悪なものになるのは十分にあり得ることです。ですから人は大臣の前にいると、しるしに関しては全くセリメーヌの前にいるアルセストの状況になって仕舞います。そしてアルセスト自身は、主人や審判者になりたいと思う瞬間に、子供や幼児になるでしょう。魂の偉大さは、欲望においてであろうと僅かな思索においてさえも、決して幼年時代を妨げないことに屢々存すると私は信じるのが良くあります。私たちが何時も穿つのは、この最初の無知です。生きるものはどんなものでも、卵から出なければなりません。

いずれにしても欲望する人間は、自分の欲望そのものに反して、子供になって縮こまりますが、欲望を広げるためなら持ち続けるのでしょう。そして、愛以外でさえも、内省の必要性和弱さの喜劇によって、欲望の中にも僅かですが感動があります。従って人間が自分の欲望を抱いて孵すためと同じに、先ず要望した物から引き下がることは、何時も思い描いた術策によるのではないのです。それ故に、矛盾したしるしからの回避のために、私たちの感情を開花させる必要性によっても、羞恥心は自然なものです。ですから私たちの自然なしるしは、謎のようなものです。従って赤面は結果の実例であると同時に原因でもあるのは、それが無垢のしるしであり嘘のしるしでもあるからです。はっきりと話すことはそれ故に暴力と同じあり、欺瞞の善意と同じです。そこから詩人の策略が最も古い言葉にも現れています。そして、全ての人々のためにその文体の法則は、言うことしか言わない者には何も言わないのを余儀なくさせているのです。(完)

第二章 手

人間を知ることを目指すなら、全人類にとっての言語は一つだけであることです。その困難は言語の多様性から来るのでは無く、寧ろ同一の原因によっても言語が全て曖昧で、奥深く、心の中を隠し、神話のようなものであることから来ているのです。私は、タキトウス(1)の心の中に這入り込みたいと思うなら、自分自身の言語の中にも良く這入り込みますが、実際に骨の折れますし、測量と同じ地点に這入るのであると言いたいと思います。外国語で、取分け最早話されていない外国語は、少なくとも次の点が指摘出来ます。それは心を感じさせることは母国語の様に決して明瞭でない様に思われることです。現在使われている言語は、第一に事物を示し、しかも容易に示すという点で一見した処明瞭です。しかし、もしもあなたが英国人を辛抱出来ない処まで追い立てたなら、彼の顔付きはシェークスピアのソネットと同じ位に、私たちには慣れたもので曖昧になるでしょう。鳥の歌を翻訳するのは誰でしょうか。しかし手は翼と同じで、行動を開始することで顔よりも明白に、しかも普遍的に語ります。

手の自然な動きは、乳児の全ての小さな手に見られる様に、取ることであり、保持することです。乳児は、止まり木に止まる鳥の脚の如く、指に齧り付きます。情熱の全ては私たちの手を閉じます。すると拳が出来上がります。それ故に反対に、手を開くと常に観想的な思考のしるしになります。そこから両手を開くと同時に放して高くする、あの礼拝の動作になります。それは大地の財産を落とすことです。世界を信じることです。この動作は神学的です。それに実際的な動作が応えます。屢々それに続いて両手を合わせて、そして、まさに握り締めて組み合わせます。それは自己への回帰であり、情熱の動きですが、用心して何も取らず、誰も害しないことでもあります。殆ど自己によって熱狂を抑圧しています。両手を握り合わせるのではなくて、ぴったりとお互いに合わせるような中間的な動作は、常により一層人間に近い一種の瞑想と皆のための祈りを表しています。

握手をすることは、他者と結び付くことです。それは自分たち自身の拘束と、相手の拘束とを同時に感じることです。そのことは攻撃と取得に関しての一種の保証を生み出します。泥棒と悪賢い人は、握手をする術を良く知りません。彼らの働きは、取られること無く取ることにあります。反対に礼儀正しい文明人たちは、どんな出会いの時にも握手をします。彼らは全ての人々と握手をします。そして、握手をするというこの方法は、まさに握手をすること以外は些かも考えていないことを意味します。勿論、その虚心坦懐のしるしは、それ自身が深い平和のしるしです。ゴブセック(1)は、指を一本立てました。信頼が制限されたものですが、それでも信頼して約束したものを与えていました。掌が引っ込められることもあり、又動物のように逃げ去る手もあります。この下らない言葉には、学ぶべきものは何もありません。投機以外に困難なものは何も見出されませんし、この困難は誰にとっても同じです。握手をするのと同じで、手を拒絶する方法も沢山あるのを誰もが知っています。それらの結果は最も単純な人物にも残っていて、そこに数々の思考を生み出しているのを私は気付きましたが、その代わりに礼儀正しさは誰にも共通した文法に従って動作を調整しながら、それらの相違を消すように努めます。人見知りをする人の握手は、それ故に一編の詩のようなものです。それはしるしへの目覚めです。

お金を支払う動作には驚くべき多様性があることを私は観察しました。そこで把握されるのは、すなわち虚栄心であり、無頓着であり、吝嗇であり、あるいは秘密です。財布のような手もあります。それらの手が与えるものを人は決して知りません。その他の手は宇宙を証人と捉えます。一方では、最早戻って来ないですっきり開いて立ち去るために一度に与えます。もう一方では、手間取って閉じて立ち去ります。それらの手が全てを与えたのかどうか分かりません。紙幣の使用があらゆる動作を変えて、恐らく自然な反応によってお金を支払う人の感情を変えたのも本当です。貨幣の重さ、取分け金の重さは、手にとっては予告の様なものでした。人は金を持ち上げて、秤の長い竿に乗せるように自分からは遠く離れても執着することが気に入っていました。紙幣は別な風に愛されていて、別な風に質問されます。広げられ、試みられ、薄くて丈夫なその組織体は厚みで感知されます。多分、金よりも力強いものは感じませんが、証言はそれ以上あります。この時の富裕者の感情は拡散して行き、集中することはありません。吝嗇家は残そうと思わなければ思わない程、企てることが多くなります。財布の形をした手は、最早ここでは意味がありません。多分、その形は財布そのものの様に、今後は忘れられます。そして開かれた手は、他の思考への回路を与えます。

話し言葉が乾いて縮小される様に、全てがそこに押し付けられる様に、それは素晴らしいものです。それは誰もが自分自身の叫びを恐れるものです。それ故に、その声は一種の歌です。人間は自分自身の顔も又恐れますし、構成します。しかしながら、会食の習慣が幾つかの秘密を発見させてくれます。顎はもう一つの手である様に、破壊するための機能が余儀無くされていて、最も古いものです。そして食べることに外交的な技倆があるとはいえ、それでも頬や顎の力強い機能は殆ど偽善を受入れません。顔のこの部分には、荒々しさの全てのしるしが集められています。笑いは弛緩ですが又、荒々しさもあります。顔に関しては、それは飽食した人間のしるしです。ところで、このしるしは食事中に絶えず現れては消えます。そして、その動きの中に私は彼の本当の微笑を知ります。人間は全てのことを考えません。しかし、吝嗇家はこのことを考えたのだと私は思います。そこから、この原因に他の原因も加わって口は財布の様に引き締まり、一文字に結ばれます。それに反して人間は、両手で疑うことは殆どありません。両手は勝手に数えますし、説得し、苛立ちます。司教の手ですが、私は激しい苛立ちを見てびっくりしたことがありました。ペーパーナイフを見て、更に苛立ちが強くなっているのが分かりました。そこでスタンダールの登場人物は言います、「彼の両手を見なさい」。しかし、無意識に出るしるしを楽しむためには、それだけでも歳を取っていなければなりません。若者の愛は弁解しますし、同意を望みます。

一人の人間を両手で認識するという考えは、従って愚かなことではありません。一人の人間を筆跡で認識するという考えも又、愚かなことではありません。何故なら筆跡はお手本に順応するからであり、同時に全ての動作、その人間の全てがペンに影響を与えるからです。それらのしるしのこと以外に沢山のことを思考しなければ、決して書くことはないからです。自分自身を変えなければ、筆跡を変えることも出来ないと私は思います。それ故に筆跡を見れば見抜けることが沢山あり、手を見ること以上に沢山あるのは本当です。だが、それに対応している諸技能が存在して、生活の糧にさえもなっていますが、殆ど全てが幻想的なものであることに変わりありません。その点で手相学上の技倆は、外部的な出来事を予告するために、

人間の未来からは顔を背けているものなのです。もう一方の筆相学上の技倆も、丁寧な言葉で語る配慮から少しも明瞭でなく幻想的なものです。そして言葉がなければ、どんな言葉よりもそれ以上に言っていることが心に這入り込むことはありません。恰も人間は吝嗇で嫉妬深くて怒り易いが、それは演技でしかなく、決して傷付けないことを知るのは大変に重要であるかの様です。オセロは嫉妬深い、と言ったとしても、オセロを未だ知ったことにはなりません。何故なら、結局のところどんな人間も嫉妬深く、吝嗇で、怒り易いからです。これらの観念は普遍的であって、一般的ではないからです。正確に言うなら、それらは決して選択しなければならない観念ではなく、個人に近づくまで構成しなければならない諸形式であり、まさに数学者が固さ、引力、表面、摩擦を組合せながら、現実の落下に近付く様なものです。しかし、私は前もって行います。私たちは数々のしるしの王国に暫く止まっていなければならず、そこではしるしがしるしに答えます。もしも、しるしのためのこれらのしるしの働きが思想の遙か下で十分に行われなかったなら、思想そのものは対象を少しも持たないことになるでしょう。熟考は言葉を受け取るのあって、決して言葉を生みません。それ故に熟考は熟考になるのです。（完）

- (1) タキトゥス（五五〇頃～一二〇頃）は、古代ローマの歴史家で『ゲルマニア』『年代記』を著した。
- (2) ゴブセックは、バルザックの小説『人間喜劇』に登場する高利貸し。

第三章 声

聴覚は夜の感覚で常に開かれていて、眠りの中でも同じです。しかしながらこの点からすると、この感覚と他の感覚の間には程度の相違しかありません。嗅覚は聴覚よりも単に範囲が狭いだけです。触覚は嗅覚よりも更に狭いです。視覚に関しては、強烈な突然の光が視覚に接することが出来ない程であっても、十分に閉ざされている訳ではありません。聴覚は素早く警戒状態を私たちに取らせますが、それは距離も方向も曖昧であるからです。最も確実に私たちを守ってくれるものである視覚が不十分になると、十分に用心して聴覚を信用することも又、習慣となっています。これらの考察によって音の攻勢が理解されます。しかし未だ十分に理解されていません。音は私たちの全ての思考と結び付いています。人間の言葉の歴史は、主としてこの考察に依存しています。或る作家は、音は魂の兄弟であると言いましたが、この言葉は良く響きます。しかし、声によるしるしが優れたしるしになる幾つかの原因と、従って耳が私たちの思考に這入って来る真の入口になる理由を、人々が探求することも有益です。その他の感覚も、どんなものでも私たちの動きによって私たちを目覚めさせてくれます。例えば寒さがだんだんと忍び込んで来ると、私は目覚めて服を着ようとしています。物がぶつかると、このことで私は目覚めて、逃げたり追いかけたりします。強烈な光には、私は身を守ろうとしています。騒音は従って表面的には私を目覚めさせていない様に見えますが、私の中心の、謂わば精神によって私を捉えている様に見えます。風や雨や海や水車による物音の様に、良く知っているものが目覚めさせることはありません。恐らく私の動きは、光やもっと荒々しいその他の接触を変える様には物音を変えないと言わなければならないでしょう。従ってご存知の様に、呼び声は動きに身を置いたりしないで、その反対に動きを一時中断します。聞くことは待つことであり、その代わりに見ることは既に行動することです。又、手で触ることも行動することです。そこには大事な相違があります。物音に対して私は不動で目を覚まします。物音に対して私は沈黙します。極度な注意力は、極度な不動に結び付きます。そこから驚きは、聞くことの必然性によって反撃の無い目覚めです。そして呼吸も又、軽い物音になるので、夜に耳を傾ける者は息を止めます。そこから目覚めている身体の動きを一時中断する筋肉の衝撃は、生理学的なものの反動によって血液を心臓へ送り返し、虚ろな筋肉を非常に興奮させます。そこで物音に驚いた人は直ぐに心臓と動脈の音を聞き、注意を傾けて自分のものと外部のものを見分けます。従って物音が目覚めさせるものとは、行動よりも寧ろ情動です。そこからご存知の様に、連続していたり戻って来たりするような物音で、それと分かる二つの場合には先ず緊張を弛めて安心させるものにもなります。連続した音で同じ音が続くものは、所謂感動を取り戻し、私たちに一息つかせてくれます。戻って来る物音、待たれて予見されている物音は休息を与えます。そして恐らく、先ずはその反復に合わせて呼吸の活動を規制するように促します。音楽の沈黙が四分休止（溜息）と呼ばれるのも、一つの素晴らしい言葉遣いであるからです。溜息は、情動の一つの弛緩であり、息の一つの修復です。取分け規則正しい音楽の沈黙が、何故楽音と同じ位に表現するのかに人は気付きます。どの様な隠喩が無くとも、心臓がその様に先ずは噪音に捉えられますし、——これも又素晴らしい言葉ですが——魔法にかけられた（enchanté）様に楽音という一定の音によってとっくに和らげられて、ついには沈黙と噪音に順

応した曲によって秩序を守ります。しかし、それは待つことの規律を守らせることであり、満たされた期待で和らげることであり、それがリズムであると私たちは言うことができます。少しも目覚めさせない物音とは、次第に強くなる風の音の様な連続した音とか予告された音です。あるいは波とか水車の音の様に、リズムのある音です。この分析を十分に続けて行ったら、音楽と同時に、音楽の部分もある詩のこの部分を説明することになります。そして、雄弁の中にもやはり音楽の痕跡がありますが、それ以上の痕跡もあります。しかし、今は純粋な散文についての警告を考察したいと思います。

それでは音楽の計算された打撃との対照によって、詩や雄弁の準備と漸次的推移との対照によって、私は突然の音や呼びかけの攻撃を理解します。自然な声はごつごつしたり、せつがちであったりしていることから、何か不愉快なものがあります。いい加減な声は何時も苛立たせます。そして、その苛立ちの部分がどんな言葉においても、どんな合図とも同じで、容易に消せないことを単に知ったとしたなら、情熱についても大きな見方を持つことになります。それは臆病な人が勇気を奮い起こした時に、屢々恐れる程の結果を生むことになる原因の一つでもあります。正しく言うことや正しく発音することは、主として楽音を準備し、予告することであり、ついには楽音に目盛を付けることです。雄弁家や喜劇役者たちはそれに気付くと、何時も驚かせる単調な旋律でこの目的に達します。そして、それとは逆に即興とか発見による叫び声が、友人の間でさえも少しも苛立たせないのは非常に珍しいことです。叫び声の後に何時までも続く沈黙が、最も困惑させるものであることも明白です。どんな沈黙も準備されて限られている必要があります。少なくとも雄弁術に取り組んだ人々は、沈黙がどれ程僅かでも、適当な限度とか待たされる限度を越えるや否や、何らかの形で破局を迎えることを感じました。そのことに基づいて式辞を理解して下さい。面白くも無い時間を潰して如何なる効力を持つのか、そのやり方を理解して下さい。しかしながら、疲労感と苛立ちを齎す嘎れた声の攻勢から、ここでも又身を守らなければなりません。饒舌には屢々連続した残忍さや荒々しさがあり、そこからは最も刺々しい情熱が大変容易に目覚めることになります。厩舎の人々は、馬に話しかける前に馬には決して触れてはならないと言います。サロンの人々は、謂わばその人に軽く触れると同時に良く知っている言葉で、良く知っているお決まりの言葉遣いに沿って準備が出来て安心させる前に、その人に話してはならないことを知っています。予告されていない提案は何時も拒否されます。誰もがそのことを知っているに違いありません。しかし、それよりも知られていないことがあります。それは門衛が這入って来る者を先ず知らせるのと同じで、予告されない語調の人には不安を抱き、話をするその人間には直ぐに硬ばりますが、その姿勢は既に拒絶になっていますし、拒絶よりも遙かに悪いものです。

以上のことから十分に理解されることは、声は本来全ての合図の中で最も間違っって受け取られるものであり、最も曖昧で、最も感動的で、最も苛立たせるもので、最も騙すもので、友情にとって最悪であり、行動にとっても最悪であるということです。人間が規制された叫び声によって、自分を理解させるというのは驚くべきことです。慣例や習慣や風習を無視して自由に話をする、口論の源泉になるというのは自然なことです。しかし、最も古い芸術である詩や音楽や散文文学（雄弁）も同様にそこから述べています。何故なら、人々は言い方への変わらぬ注意によって、結局のところは書かれた言葉への用心によって、今日でも又どんな力でも取り出している

と自ら理解する (s'entendre) ことが出来ないからですが、自ら理解するとは二重の意味でも又美しい言葉です (1)。感情、細心、進歩、懐疑精神、結局は人間の文明というものは、声による言葉が他の全ての言葉に代わって、決められた行動でしかないデッサンが単純な文字になるために、しるしの中でその水準から落ちることにまでなった驚くべき事実依存しています。非常に大きな変化を、叫び声や呼び声や嘆きの声に課せられている非常に大きな規律を、如何に説明するのでしょうか。理解した代わりに模倣することで十分であるので、身振りだけで極めて明白で明らかに述べられているその様な衰退を、如何に説明するのでしょうか。ダーウィンはその点について、声による言葉が夜に役立つことが出来る唯一のものであるとの指摘によって、その主要なことを言っていました。夜は警戒の時間ですが、人間社会が人間と同様に古いのものであると定められるや否や、信頼と休息の時間でもあります。以上のことから、夜のしるしによる自然な構成が生まれますが、それは安心させるか、予告するか、警戒することが問題になるに応じて、注意深く観察された違いにもなって来ます。数々の人間社会の間での戦争状態は、それらのしるしが如何に秘密であったのかも説明しています。それらのしるしは本来曖昧でありますから、秘密になり得たのです。そこから普遍的なしるしである身振りや、ついには全ての芸術との対照によって、今日では既に驚かされている言語の混乱はどんな人間にも話しかけます。もう一度この広大な観念に倣って理解されるのは、夜が制度の母であり、動物が見るものを人間が聞く術を知って以来、ある日別種の自然が私たちの夜を照らすことです。しかしながらダーウィンの指摘は、この大きな主題を論じ尽くすには遙かに遠いです。

行動を規制するには非常に力強い音楽が考察されると、話し言葉の力強さももう少し把握され易くなります。行為の弱点は注意を前提にする点にあります。つまり行為は必然的に叫び声に先行されます。そして叫び声と行為が、極めて必然的に結び付いていると理解しなければならないのもそのためです。しかし行為のための注意は、対象のために注意する方向へ変えるとも言わなければなりません。そして、それは実際の行動を止めて、その代わりに行為そのものの模倣を用いることとなります。これでは時間の無駄です。軍事訓練においては、始めは教官の行為を模倣出来れば十分です。しかし実際の行動においては、見なければならないのは戦場であり、敵です。どんな行動にあっても視覚は全て忙殺されます。服従することは古くからある機能であり、又何時の時代にもある機能です。それは漕ぎ手たちが行うように、そして一本のロープを一緒に引っ張る人々が行うように、数々の音を行為に移すことなのです。

それ故に、注目に値することですが、行為への注意は注目そのものに閉じて、人間を人間に連れ戻すように到達します。それは踊りに見られるように、模倣された行為の交換は限り無く、その行為が対象の代わりになっています。お互いに理解し合うこの方法は、私が理解するのは単に私が理解されているという点によって、自分自身に限られています。それは言葉の形式であり、内容の無いものです。そして、以上が他者における自己の認識であり、それは出来事を除去しながら、結局のところ外部の自然というものを除去しながら、形の美しい全ての造形的芸術を指向します。フリーズ (絵様帯)、すなわち固定された踊りは、伝統的なもので古い様式の特色である、あの彫刻的な中空によってお分かりの様に、世界を消しています。それとは反対に、声のしるしは行為を遮ること無く、規制するのに極めて必然的に特有なものです。そして視覚や触覚

という生き生きとした知覚に結び付いていて、行動を規制しながら同じやり方でそれらの知覚も規制します。以上によって叫び声のこの能力とは、それ自体とは別のものを常に説明するための言葉です。それは低く制限されるしかないしるしなのです。

コントは、この点について又、より一層深いことを言いました。そして、恐らくコントは、自己省察の意味を声のしるしに結び付けたいと思いながら、主要な観念を把握したいのです。私は他人の行為を見るように自分の行為を見ることは決してありません。私はそのことを感じますし、自分自身の裡で体験しますが、これは内的な触覚の結果によるのであって、他人のことは分かりません。私の行為の外観、つまり他人にとっての外観はそれ故に私が独りの時、つまり他人が私を模倣した動きによって、私のイメージを送り返してくれない時、私には全く未知のものです。反対に私自身の声は、他人の声になっているかの如く、私の耳に鳴り響きます。従って、人間は自分自身と話をしますし、他人が話しているのを知るように自分と話すことを知ります。以上の様に、そこでの孤独には二つのものがあり、自分自身の思考の芽を作り、そして知覚します。そこからその独白は思想になります。この観念には豊かな発展が必要です。その上、その前には野生的な叫びと、常にそれに続く野生的な情動への注意が必要で、それは歌や詩や祈りや、最も抽象的な黙考にまで必要なのです。（完）

(1) 「自ら理解する (s'entendre)」には、「聞こえる」という意味もある。

第四章 聞くこと

理解することは、見ること以上を表します。それは別に驚くに当たりません。しかし、精通することは、理解すること以上を表します。悟性は、分かり易さに打ち勝ちました。そこには低俗な言葉遣いの一つの啓示があります。やがてお分かりになるでしょうが、他の啓示も幾つかあります。全ての啓示が夢を見させてくれます。今は前者の啓示を取り上げなければなりません。それはこの道を通して私が、厳格な悟性を改めて発見出来ると思うことではありません。既に申し上げた様に、私は遠回りして、それに近付きたいとは決して思いません。証明によって明らかにされた対象の中で悟性を捉えなければならず、その証明を明らかにして取り出さなければなりません。困難は小さくありません。しかし、今私たちが出会っている困難がそれではありません。私たちが敢えて証明しようとする生理学において、悟性の根本を幾つか発見することは予想している処です。何故なら、悟性は私たちの裡にあり、私たちと合体しているからです。しかし、如何なる証明も幼年時代には向いていなかったのだから、悟性へ導く自然の道も同様に決して証明を変えませんし、明らかに照らすことも出来ません。私たちの対象は今の処は想像力です。しかしながら、自然の活動に関する描写においても、もし私たちが一つの器官を発見する如く、悟性を発見し確認するに至らなかったなら、そして少なくともそれが存在することを見抜くまでにならなかったなら、生身の人間に何か欠けていることになるでしょう。精神と肉体の結合は社会と会話の中でお互いに体験して知っている、とデカルトは言いました。しるしの場所であるこの人間の世界に、悟性そのものを適用すること、そして謂わば人類と可能な限りの会話を続けるために、これらのしるしを点検すること以外に私たちは何をするのでしょうか。ところが、極めて適切に聞くという言葉は、私たちを引き留めて、安易な進展を先ず滅ぼして仕舞います。そして、それに倣って聞くことは少なくとも情熱であり、その代わりに見ることは私たちを対象に従って規制します。数字や図形を人は見ないのでしょうか。そして見た時は全てが言われていないのでしょうか。歴史的な城を訪問する如く、私たちが諸形式へ訪問させてくれるような人で、無言で幾何学を理解しなかったのは誰でしょうか。私はこれらの想像力の遊戯に多くの時間を割きましたが、それは私がそれらの遊戯を軽蔑していると気付かれたいからです。器用な人間が想像力を悟性と理解しないようにするためには、やはり証明そのものが需要ですが、それは一つの言葉です。かくして、そのことを考えるや否や、この力強い暗喩だけが直ぐに照らし出されますが、それに倣って声のしるしが思想そのものに結び付きます。少なくとも私たちに全てが注意します。自分が言っていることが何も分からないのが最悪であるとする民衆の知恵の公理によっても又注意されるのです。知ることとは従って自分が言っていることを知ることなのでしょう。

私たちの対象が私たちの思考でも良いこと、それが最後には真実になるでしょう。それは空であり、近寄れない対象であり、私たちの無謀な試みを変えられない唯一のものであり、それはたわ言を言うことから私たちを救ってくれた空なのです。しかし、沈思するタレス(1)の高尚な境地に関して私たちは最初からそこにいないと言わなければなりませんし、タレスはそこに達したのであり、又そこに戻ったのであって、決してそこに止まることが出来なかったと言わなければなりません。それは私たちの逃亡の地点であり、逃亡はどんな狂気にも意義を与えるでしょう。

しかし、想像力の狂気は私たちの最初の状態であり、通常の状態でもあります。眠りと夢想はこのことを十分に思い起こします。私たちの先生であるギリシア人たちは、悟性の中の悟性である言葉をロゴス（2）と呼びました。それは抽象的なものであり、殆ど乱暴なものです。しかし、それと同じギリシア人たちは、ミューズという聖なる名によって音楽をあらゆる英知と結び付け、あの美しい行列においてポリュヒュムニアをウラニア（3）に結び付ける時に、より一層良いものを私たちに教えてくれます。その信仰心は私たちにその行列を壊すことを思い止まらせます。それ故に、如何にして詩が私たちの思考の主人になったのかを、少なくとも一瞬の閃きによって理解しなければなりません。

聞くことは、最初は方向の無い生理学的な動揺によって私たちを自らに連れ戻します。言葉を聞くことは、人間の存在が分かることから私たちを安心させます。それは同類のしるしであり、社会の場所でもあります。動きを模倣することで私たちは自分を他人と似せますが、そのことを知らずにいます。現実の行動は最小であっても、他人との相違を感じさせますが、全ては場所の問題です。私は、他人を見るように私を見ることは出来ません。聾者の踊りは舞踏に達しないでしょう。ところが漕ぎ手の歌においては、或る方法で全員が一体になります。各人は他人の歌を聞く如くに、自分自身の歌を聞くに至ります。漕ぎ手は別々ですが、歌は一つです。音は結び付き合体しますが、まるでこの世には結び付き合体するものは何も無いかの如くです。行進する人は同じ音を立てます。共通した行動を証明するものは音以外にありません。群衆の中であって一人ひとり自分の場所を常に持っていて、各人の眼には各人の場所に従って変わる群衆を眺望するものがあります。しかし、幾つもの音は一つの音しか生みません。和合と同様に、不和も聴覚としての一つの現実です。同様にどんな模倣も顔を顰めませんが、知らされません。しかし、音による模倣は決して顔を顰めません。それ故に私は聴覚によって社会に触れます。私は社会を良く見ることが出来ることもあります。私が社会を、行列とか漕ぎ手の動きが大変良く一致した中に見るのも本当です。しかしその時、私は決してそこにおりません。極端な時にはそれらの結果がもっと良く理解されます。聾者は追い払われ削られます。しかし盲者は、夜間における皆と同じ様に、却って人間の環境の中に這入り込んでいるのです。人間の感情は眼を閉じているものの様です。そして盲目の愛は下らない諷刺とは別のことを意味しています。恐らく曖昧なこれらの指摘に倣って理解出来るのは、思想の最初の対象は音であるということです。思考することとは、対象と良く一致することです。結局のところ、そうなのです。しかし、只それだけであったなら、それは行動することになり、思考することではなくなります。行動には、あるが儘のものであって、それに止めている正確で健全な点があります。失敗した行動は、別の行動になります。独りでの適応するのは決して思想ではありません。何故なら適応しない者は死んでいるのであり、生きている者は誰もが成功したのであり、絶えず成功しているからです。技術的な活動と、それを再び覆い隠す不可解な思想の夜を理解するためには、難しい錠を開けようとする人に起こるように、突然に成功がやって来ることから、多分その方面に注意を向けていなければなりません。この様な試みにおいては思想が生まれたいかも知れません。寧ろ思想は声によって、同類と一致しようとする別の試みから生まれます。大変に規則正しい鳥の行動には思想が無いことに私は気付きます。寧ろ鳥の歌声に思想の跡の様なものを私は見出します。しかし今まで一度も払って来なかった或る注意が私を引き止めます。それは鳥たちが決して一緒に歌わないということ

です。それは喧騒に過ぎません。一羽一羽が行動するように歌います。それは結局のところ、鳥たちの歌はどんな音楽とも根本的に関係が無いということです。メロディ（旋律）は社会のものであり、本質的にはハーモニー（調和）です。メロディはモデル（典型）です。それは模倣されるために創られます。ここに見出すのは過ちとか誤りに関する思想であり、それが思想そのものです。

ここで強調するのをお許し戴きたいと思います。悟性とは、それ自体では明瞭で堅固な何ものかですが、悟性を持った人間は姿を隠しています。何故なら、科学は上手く出来た言葉以上の何ものかであるのは明らかであり、悟性の人は論理を軽蔑し対象を探すからです。しかし科学も又、対象の中にはありません。対象の中にあるのは成功と術策でしかありません。もしも物理学の進歩でミューズの名声を上げたいと思うなら、普遍的な基本である話すことから思考することへの活動を、出来る限りやり直さなければなりません。しかし忘恩はあらゆる力の最初の状態です。従って思想のために行動を起こすのは生来からの過ちです。繰り糸の小さな糸玉を解く人は決して間違えませんし、同様に穀粒を突いて失敗しない鳥も間違えないことを繰返し言わなければなりません。その人は自分の奥底にある繰り糸を予見し、見抜き、眼で追うのであると言われるでしょう。しかしこの様に調べることは、いずれにせよ行動することです。それは頭を傾けて周りを回ることです。問題は絶えず変わります。恐らく、思想は試みによって変わらない問題を前提とする、とすることが出来るでしょう。ところがそれは歌われて、そしてもう一度歌われた事物の中とか、言われてからもう一度繰返し言われた言葉の中にしか意味が無いのです。

プラトンは、変わる事無く繰返し言うことであり、学校的と言われなければならない機械的な記憶に本当の地位を与えた、私が知る唯一の作家です。普通の言葉で学ぶとか、知るこの意味するものに注意して下さい。私は、道具や機械の発明よりも詩とか歌を申し分無く熱心に繰り返すことの方が、かなり多くの思想があるような気がします。行動は決して問題を解決しません。行動は過ぎ去ります。穴を開けます。電話機を激しく置く者は、決してかけ直しません。彼は、茨の茂みを通る者が自分自身の通路を探す様に、音の通路を探します。詩を朗読する子供は、その様な通路を決して探しません。何故なら子供は対象を変えることが出来ませんし、変えようと望むことも無いからです。その反対に子供は、美への感情によって、ここに激しく知らされる人間との一致を第一に望みます。従って子供は人間的に話したいのです。この最初の尊敬が多分、その他の全ての思想を齎す最初の思想です。理解することは、尊敬することでしか出来ません。尊敬が無ければ、人は変わるでしょう。科学は第一に言葉に勝たなければなりません。その次に、言葉の準備によって事物に勝たなければなりません。でも、第一に勝つことは決して知ることはありません。恐らく、何時も自分に満足しているのは純粋な労働者の特徴ですが、注意されることは余りに少ないのです。彼が最善のものを見るのはそれを作っている時だけです。寧ろ彼は作るものを与えます。私は既に言いましたが、もう一度誰もが知っていることを言います。それは、経験が適確に語るための教訓を与えはしないということです。教訓を与えるのはミューズたちなのです。

纏めましょう。自然の秩序は次のとおりの様です。先ず話すことです。これは固定されたモデ

ルを再現することであり、それを気に入ることであっても理解することではなく、寧ろ最初は理解して貰うことです。子供は、自分が言っていることを知らないうちから言い出します。ここには根源的な魔法が姿を現しています。それは自分自身で理解している以上に、言葉の意味が上手く運んで行くことを何度も吟味された意見に魔法があるのです。ところで、詩の効力とはその様なものです。最初は一致や、変わらないモデルや、感受すると直ちに修正される間違いによって喜ばれます。意味が発見されるのはその次でしかなく、際限の無い発展によるのです。決して対象を変えるのではなく、その反対に対象へ連れ戻します。既に知っている一つの意味の中にしか探すことが出来ないのは、まさに本当です。しかし、普通の言語に基づいた実際の沈思黙考しかないとも言わなければなりません。ここを良く見て下さい。子供を観察して下さい。如何にあなたが話し、そして書くか注意して下さい。恐らく次のことが分かるでしょう。人は考えていることを言い始めるのではなく、人間の思考はどんなことでも、その反対に言っていることを知ることで忙しいのです。やっとの思いで得た結論は、ソクラテスの方法にまで一飛びであるが如く、私たちを高めてくれますが、その方法とは先ず言うことにあります。そして、言っていることに基づく際限の無い熟考によって最初の対象と一致することにあります。かくして幾何学は言葉によって開始し、続けられて、終わります。幾何学は言葉に帰着するのではなく、図形である対象が逆にそこでは非常に重要なのです。しかしながら、実際家は対象しか注意しないのに、幾何学者の精神そのものは逆にソクラテス派になっていて、自分が言うことを、自分が言ったことと一致させることに取分け忙しいのです。事実、石工は形状や体積や重量や方向に従って行動するので、ある意味で完全な幾何学者です。しかし、石工は全然事物の文法家ではない故に、決してどんな幾何学者でもありません。石工は、幾何学に触れて見ているのです。しかし決して聞きはしないのです。(完)

- (1) タレス(前六二五頃～前五四七頃)は、古代ギリシアの数学者・自然哲学者で、七賢人の一人
- (2) ログスとは、概念、意味、説明、理由、理論、思想などの意味で、本来は話す「ことば」を意味する。
- (3) ポリュヒュムニアは、賛歌を宰領域とする九人のミューズの一人で、豎琴と農業の発明者とされる。ウラニアは、同じく天文を宰領域とする九人のミューズの一人。

第五章 名前

外観には、何とでも好きな名前が付けられるものです。事実には、プラトンの『クラテュロス』において垣間見られるように、名前と言葉が一つの真理であるということです。この点に関しては、コントに従うことしか出来ません。その問題を申し分なく明らかにする作家はコントだけです。しかしながら何時ものやり方に従って私は、ここでその要約を言うつもりはなく、読者をコントへ送り返しますし、寧ろ別のやり方で同じ観念を取り戻すつもりです。そして、この指摘は私たちの主題にも属しています。何故なら作家たちは言葉のこの事実に参加しているからですが、それと同時に保証しているからです。同様に次のことも認められています。彼らの教義に関しての要約は、彼らの教義に決して置き換えられるものではなく、彼らが示した表現から全然分離出来ないことです。しかし、この探求をもっと先へ押し進めて行くと、要約出来る作家は作家ではない、と私は単に言うだけではありません。もっと押し進めて言うと、要約されて装飾の無い観念は、率直な言葉で換言するなら最早観念ではありません。このことは前に言ったことと十分に一致しますが、説明するにはこの方がもっと容易です。

思想は他のものへ、そして更に他のものへ送り届けるしるしによる以外には生きていません。勿論、しるしの力を良く理解しましょう。月は潮のしるしではなく、潮も月のしるしではありません。それらは二つの事物であり、一つのもは決してもう一つのものではなく、その反対に相容れないものであるからです。世界はこの様にして私たちを旅に連れ出しますが、これは常に行為でしかありません。その代わりに本当のしるしに尋ねることで、思想は成熟しますし、常にそこに帰ることで対象の特権によって纏まるのです。その対象とは、謂わば思想の鏡です。全ての芸術作品はしるしです。私は、作品が限り無く、しかも作品そのものの中に意味するものを聞きます。ところで言葉は時々芸術作品になりますが、ならない時も時々あります。道路標識がそうであるように、言葉が他のものを意味する時は決して芸術作品ではありません。しかし、交差点を表す十字架は本当に一つのしるしですが、多くのしるしの中のしるしであり、そして限り無いしるしであり、単にそれ自体においてのしるしでもあります。ところが十字架のどんなしるしも、私たちを十字架へ連れ戻す限り、十字架は美しいのです。かくして美しい詩句も美しいのです。固定されて十分なものの言い方、そしてその様にその意味が私たちを思想に連れ戻すものを、普通の言葉では精力的に思想と呼んでいます。代数学は全てが逆です。何故なら、それらの単語は一つの事物しか意味する必要がないでしょうし、他の観念に導くには何時も他のしるしによるしかないからです。しかしながら、代数学はこの綿密に調べられた意味に決して至りません。コントが指摘した様に、或る意味では現実の言葉にも通じています。何故なら、代数学も又自然の所産であるからです。人間は最初に思考した何ものかを表すのを目指して、この正確な文字表記を発明したのではありません。その反対に、この文字表記は少しずつ形づくられて豊かになり、思った以上に多くのことを早く表す様になりました。そして一つの世界の様に、そこで数々の発見が行われました。フェルマやオイラー(1)は、そのことを証明しています。しかしながら、この大きくて美しい主題には触れないで置かなければなりません。何故なら、最も綿密に調べられた言葉による素晴らしい汲み尽くせない意味によって、主題を閉じ込めている詩は深く隠されて

いて、少なくともそれは私が入ることは出来ませんが、少人数の人々には感受出来るものであるからです。

普通の言葉は、より一層親しみがあって更に良い対象です。それはより一層良く鳴り響き、そして答えます。今も独自のものがある詩に関して、私は何かを言いたいと思います。やはりコントに従いましょう。でも、自由に注釈しながらです。コントは、心 (cœur) という言葉の奥深い曖昧さを感嘆する儘にして置きません。万人のためのものであるこの富を何ものかに発展させましょう。まさに美しくするためのなる語源学の領域へ行くのは止めて、女性たちが見るものだけを考えてみましょう。心という言葉は愛と勇気を一度に示すものですが、同時に生理学的な意味によって二つとも全てを胸部の水準へ高めます。そこは富と分配の場所ではありますが、欲望と欲求の場所ではありません。このことによって勇気は明らかにされます。そこから生理学者は、情熱と興味を混同しないで済みます。そして、この区別は普通の言葉で考えて書きさえすれば、それ自身で謂わば筆の先で行われます。その点に関しては、望めば望む程じっくり考えることが出来ます。しかし、言葉を理解することが重要ですから、誰も言葉を直す考えは持ちません。民衆の知恵はここでは忠告せずに、決定します。こうして私たちは告げられますが、もしもその告知を軽蔑するなら、平板な文体という罰を受けます。それは死刑です。そして作家であっても、作家でないことは何であるかも見抜かれます。書きたいように書くのではなく、書かねばならない様に書く人は幸いです。しかし、書かねばならない様に書くとしても、書いたものを知るのは限り無いのです。「ロドリグよ、お前に心はあるのか」(2)。この質問には鳴り響くものがあります。

従って、私たちの美しい言葉をもう一度鳴り響かせましょう。哲学者が言う様に、これには両面があります。取分け勇気があるのは男性の心であり、取分け愛があるのは女性の心です。しかし、その観念をもう一度集めているのは言葉であり、二つを同時に聞かなければなりません。それは一連の限り無い思考が発展します。何故なら、もしも愛が無ければ本当の勇気も無いとするなら、憎しみは従って同一の人物の中で戦争と両立しないからです。この様にして騎士道精神は、私たちが受け取ったのであり、発明したのでは無いと言う様にして姿を現します。誰もがこの様に話しますが、自分が思っていることよりも多くのことを話します。同様に、それらの言葉は自分が望んでいたのとは別な風にぶつかり合うことも起こります。述べた意味は明らかに一致するのですが、隠されていた意味がぶつかるのです。文章には最早密度が無く、鋭さもありません。かくして平板な文体が告げています。しかし、続けましょう。もしも勇気の無い愛も又無いとするなら、そこには忠実さが姿を現し、誓約も姿を現しますが、結局のところどんな愛であっても構わずに慈悲と呼ばれるものを望む純粋な愛が姿を現します。結局、心という言葉の中には、計算高くて敢えて希望することが無い者の哀れな愛が閉じ込められています。吝嗇の感情は横隔膜よりも下に住んでいて、決して何も誓うことがありません。正しい道に入っていれば、発展を続けることは極めて容易です。しかし、ここでそれらの存在を見詰めるだけでは不十分です。それらの言葉を更に愛さなければなりません。いや寧ろ、崇めなければなりません。その人の声を聞かなければなりません。それは、その人を見ることよりももっと遠くまで及ぶ意味を持っていることなのです。そして、正しく書いた人々が私たちの真の指導者であると直ぐに分かる筈です。それ故に、もしも文化が先行しないなら、科学は盲目です。

今は他の事例を呼び起こし、かくして読者自身にそれを探求して貰えば、それで十分です。辞書の殆ど全体が無知であると理解させ、そして探求する機会を与えるあの詩的光で、その時は照らされます。必然的という言葉は、多くのものから逃れる抽象的な意味になって仕舞います。しかし、その言葉の日常用いる意味は、如何に必然性が私たちを繋ぎ止めているのかを直ぐに思い出させます。コントは、この二重の意味をうっとりと思想しました。人は正しい精神と言いますが、その働きの中に正義を入れなければ言えないものです。正義が現れるか現れないにしろ、正義は非常に遠くにある様に見えます。そして、それとは反対の働きによって、私たちの主要な間違いの源泉として、いや恐らく全ての間違いの源泉として、直ぐに不正が姿を現します。この様にして最も単純な表現も、直ぐに私たちの弱い思考を越えて仕舞います。人は同様に、真っ直ぐな精神と言いますし、法律と言います。幾何学者たちの直線を排除する者は軽率な人間であり、真っ直ぐな精神という言葉は作家を無視して幾何学者たちに仕舞い込んでいます。しかし、私は更にそこに〈右手〉も欲しいと思います。私が右手を望むのは、右手がそこにあるからです。そして知る人ぞ知るのですが、先ずは言葉が私たちを捉えます。そして私たちが言うことは、全てが発展するのを望みます。以上が文体の内面であり、又それが文体です。従って描写された事物が、正しく言うための唯一の規則ではありません。ここでは、この同じ法則によって数々の事例が私を悩ませるに違いありません。熱烈に愛するとも言われます。自分への予言です。しかし、誰が自分自身に奴隷や苦痛を予言していると十分に考えるでしょうか。その上誰が、それ故にここでキリストの受難や、選ばれて排斥された聖杯を与えるのでしょうか。私はコントが言っている様に人民という言葉に二重の意味を、もう一度強調したいと思います。人民とは、労働する当事者が直ちに全体として理解されるのを望むことです。私は単に、情愛、慈悲、信仰と文化、才能、感謝、気品、恩恵、精神、運命、苦難、苛立ち、信頼と誠意、感情、判断力、秩序のような言葉を引用するでしょう。これらの言葉には一つ一つに変えられない問題が提出されています。これらの言葉には一つ一つが理解されるのを望んでおり、それは単に望まれる様な定義に従うだけでなく、あるが儘に従って理解されることです。今では私は、恐らく最初にショックを与えるこの観念を十分に明らかにしましたが、それは各人が言うことを、第一に知るべきです。でも、それは些細な仕事ではないのです。(完)

(1) フェルマ(一六〇一~六五)は、数学者で微積分学・確率論などの先駆者である。オイラー(一七〇七~八三)は、スイスの数学者で、力学・天文学を含む数学のあらゆる分野に膨大な研究を残した。(2) ピエール・コルネイユ(一六〇六~八四)の悲劇『ル・シッド』(一六三六又は一六三七初演)の主人公がロドリゲである。

第六章 乳母たち

今では乳母たちの教えとは何であるか一つの観念が創られ、そして習慣を尊重することによって思っている以上に遙か遠くへ及ぶことが理解されます。しかし、物事の経緯が如何なるものであるかを言うことが適当です。何故なら全ての人々がそれを見ても、僅かな人しか知らないからです。子供は先ず身体の構造に従って話をしますが、それは誰も驚く筈がありません。子供はその様にして自分自身の言葉を、動きや様々な叫び声や片言によって話しますが、言っていることの世界のことは少しも知りませんし、そのことはやはり明白です。言葉が理解されない限り、如何にして知るのでしょうか。誰もその言葉を話しかけない限り、如何にして子供自身の言葉を理解するのでしょうか。それ故に非常に慎重な乳母たちは最初にこの言葉を、乳児に教えるために覚えようとします。子供が発明した言葉を、先ず馴染みの対象に当てていることに気付く時、乳母が絶えず未知の言葉からそれらの単語に一つの意味を探しますが、乳母が一つの意味を見付けていることを人は忘れていきます。その様にして子供は、自分自身の言葉を学びます。言葉から与えられている事物に基づいて要求するものを学びます。この連続的な交換によって、子供の言葉による幾つかの単語が本当の言葉の方へ傾き、そしてゆっくりと変形して行って、だんだんと似て来ることが分かります。本当の言葉には、困難なはっきりとした発音があります。子供は乳母の様に発音出来ませんから、乳母が子供の様に発音します。LはRに代わり、ZはJに代わり、以下同様ですが、文法学者たちはここに言葉の変化の中に観察する何ものかを発見するかも知れません。子供は最も早く行く慣用を具体的に示します。そして乳母は文法を具体的に示します。話すことに関する子供の方法は、少しばかりは万人のものであり、古い習慣を持ち続ける書かれたものを理解する必要も無く、極めて早く言葉を変えることが仮定されますし、屢々指摘されていました。詩人たちはどんなに小さな音節も無視しないと仮定されますから、ここでは極めて強靱です。そこからお分かりになる様に、古典研究は乳母たちが開始した戦いを引き継いでいるのです。しかし、子供が多少なりとも自分自身の言葉を捨てて、大変正確に母語と名付けられている言葉を身に付ける条件に従うようになるのは、書かれたものの権威によるのです。しかしながら、これには一つの例外がありますが、ことによると幾つかあります。ママン（母）という名称は子供によって受け取られ、そして大人たちを支配します。それは乳を飲む唇が時に、最も古くから行われて来た動きで、唇から出る最初の名称です。しかし、子供は決してママンとっていないことに注意しましょう。ママンに近い何らかのものを言っているものであり、少し変えて繰返し言われます。十分に待ちに待ったこの言葉が恣意的に選ばれたものでないのは明白です。子供の口の構造に存在出来る言葉なのです。

子供たちが一緒に成長して彼らの間でしか決して話をする必要がなかったと仮定するなら、自然の言葉、人間の唯一の言葉、単に人体の構造に依存した言葉は、その様にして生まれることでしょう。そして私が観察した双生児の二人には、彼らだけの何らかの固有な言葉の跡が長く存続していたことに私は気付いた様に思いました。しかし最初の言葉は子供と母親の間で、母親の権威の下にあるというのが決まりです。母親自身は、父親やその他の人々を考慮に入れています。従って乳母も同じです。詩人の言葉、取分けその文書は彼らの全てを支配します。読書の第一

の成果は、子供の言葉遣いを譲歩させられない一定の対象に従属させることにあります。もしもあなたが職場や親しい人々との会話においてさえも用いる短縮された言葉、単純化された言葉、割り引かれた言葉を聞いたなら、方言や隠語が如何にして増加するのか、そして本を読まない民衆の間ではどんな言葉も如何にして直ぐに消えて仕舞うのかを、あなたは理解するでしょう。しかしながら、単純化だけが決して唯一の法則ではありません。常に重要な言葉があるでしょうし、言葉に重要性を与える情熱もあるでしょう。暴言そのものには、嘎れた声や唸り声も含まれますが、ご存知の様に罵り言葉の中に保存されています。祈りや呪いや誓いや歌や本を持つ民衆において子供は、自分を越え、又何時も越えるであろう一つの言葉を、非常に早く学ぶ立場に置かれています。そして最初は自分でも知らずに、ママンと言うのです。同様に最初は自分でも知らずに、歌を歌う様にはっきりした発音に注意して何時も話します。意味は、話した結果に倣って分かります。しかし私は、観念を探求しに行く物思いに耽って考え込んだ子供を少しも想像したくありません。その様な子供は存在しませんし、存在することも出来ません。子供の最初の経験は、子供によって決して行われるものではありません。子供は歩き出す前に、身に付けて貰います。対象に注意する前に、差し出されます。学ぶかも知れない前に、教えて貰います。子供は火が燃える術を知る前に、火を恐れます。そして地下室に落ちるかも知れないと知る前に、地下室のドアを恐れますが、それが順番なのです。子供の経験は先ずしるしを対象と見做します。一つの対象のこの最初の認識は、一つのしるしの模倣であり、一連のしるしの模倣です。火と火傷の最初の結合は、火という言葉と、引き下がり、方向を変え、又は守るための動きの間にあります。火そのものは、最初の何ものでもありません。噛み付く犬は、乳母が見せるしるしによって知覚させられます。その上、私たちが馬車を大変上手に避けるのを説明する経験は、殆ど誰によっても行わなかったことを注意して下さい。ここで私たちの対象となるのは人間の行為であり、叫び声です。子供が経験によって学ぶ前に死にそうになるのは明らかです。そして、このことは私たち全てにとっても本当のことです。それ故に大部分の危険は、最初のうちは殆ど私たちには恐くありません。その代わりに顔に出た恐怖は、最も勇敢な者も恐れさせます。そして殆ど誰もが突然の恐怖の動きに抵抗しません。

未開の人々の観念が研究される時、先ずやっと分かることは、事物が彼らを教えなかったことにびっくりさせられることです。しかし、そんなにも事物によって私たちは教えられているのでしょうか。私たちの農民たちでさえも、非人間的な自然から全てを引き出し、彼ら自身の経験を伝統よりも良いとすることには未だ躊躇します。私たち全ての認識の大部分は、少なくともしるしに関係があります。最後に決定するのは事物であるのは明らかです。しかし、私たちは大人になる前には子供であったから、デカルトも言うのを軽視しなかったことですが、それは私たちが全裸の事物に尋ねて開始したことは決してなく、その反対に既にしるしによって全て用意されていて、まるでしるしで武装されたような事物へ行く秩序の中にいるということです。探求のための私たちの仕事というものは、しるしを立証することにあります。そして、それは事物によるしるしに刷り込まれた屈折であり、私たちが観念と呼んでいるものです。単に事物を取り扱う者で、謂わば事物に話しかけることが無い者には、観念が無いと認められます。恐らく、事物に関する思い出は決して観念ではないのです。そして、それは当然です。一つの思い出は誤りになり得ず、それ故に真実にもなり得ません。別の人と言う様に、単に切断され、不完全にされ、混

乱させられるかも知れないのです。その代わりに観念を生むこととは、予想され、試みられ、荒々しくされ、強制されることです。人間が事物を認識する前にしるしを認識し、その上、事物を理解する前にしるしを使用した以上は、どうしてそれに驚くことがあるのでしょうか。一つのしるしは、幼年時代には魔法的です。しるしが意味するものを知る前に、しるしが意味するものを私は分かることから魔法的なのです。しるしは、その本性によってあり得る経験ならどんなものでも先ず着込みます。聡明なアリストテレスは言いました、「子供は先ず全ての大人をパパと呼ぶ」。私は更にもっと言います。パパというしるしは、しるしとして認められ、一つのしるしであるとの素晴らしい意味を理解するや否や、つまり人間たちの間で支援を行い、先ずは素晴らしいものの裡に引き止めるとの素晴らしい意味を理解するや否や、そのしるしはそれ故に常に普遍を前提にされて、子供は先ず全てを試みます。最も古い魔法は、曖昧さによって驚かせます。経験はこの時、ある時は答えたり、又ある時は答えなかったりするから、一つの意味に理解するだけです。経験は間違った前提に噛み付きます。思考することとは恐らくそこから、つまりしるしと事物の本性ととのこの闘いによって、定義されます。そして、観念を命名しながら、事物を誕生させる〈創造者〉の観念は恐らく奥深いものです。それというのも、事物とはそれらの観念の効果によって私たちの裡に感知されるとしても、眼前のこの世界は十分に説明されていないからです。この世界は絶えず存在していて私たちを捉えています。そのこと自体は何者かに姿を現す契機があるのです。世界のこの顔付きを眠りとか習慣とか迅速な行動によって失う方法は一つならずあります。そして、この顔付きに外来の名前を与えながら再び見出すのは、詩人であることを忘れてはなりません。呪文が古くから行われて来たことは、その様に根本的には正しいのです。世界はしるしを通して姿を現します。外観は常に私たちを騙します。そして、何ものかが姿を現すのは、外観を乗り越えるこの動きによるのです。観念とその内容との対立が無ければ、太陽とは何でしょうか。もしも事物が裸の儘でしるしという衣服が無かったなら、判断力は何処を穿つのでしょうか。世界を担いでいるのは常に隠喩的なアトラス(1)ではないのでしょうか。衝突するのは苦痛でしかありません。しかし、広さと強固さを生むのは不可能な思想と思想の衝突です。そこから十分に巨大な存在を蘇生させるためには、私たちは何ものでもない幼年時代のしるしによる衝動を、再び手に入れなければならない様に見えます。それは盲目の詩人のホメロスが表現していることなのです。(完)

(1) アトラスは、ギリシア神話で、オリンポスの神々と争い、その罰として生涯に亘って世界を双肩で担ぐ様になった巨人神。

第七章 ミューズたち

普通の言葉は、どんな英知も閉じ込めていて、本来的にはさ迷っている狂気の沙汰の私たちの思考を調整出来る唯一の対象となるものであるのもので、一冊の書物が何ものであるのかが理解されます。又、如何にして印刷術が、多数の散乱した不滅の複写によって記念建造物の性格を与えながら、書物に完成させたのかが理解されます。一冊の書物について熟考するのは些細なことではありません。それは最も学究的な会話を、遙か遠くに乗り越えて行きます。会話の対象では、反省によって直ぐに変わります。書物は決して変わりませんし、常に蘇らせます。思想はそこを掘らなければなりません。

確かにそれはコントが指摘した様に美しい瞬間であり、自分自身と独りきりの人間は、弁護士と判事を同時に見出す者です。それは良心 (conscience) の瞬間であり、この美しい言葉も又、その全ての意味を一つに収斂します。恐らく、自己と話をする以外に、自己の姿を現すことはありません。その上、プラトンに倣って多くの人々が気付いたのですが、私たちの思想は、私たちと共に始まって終了する独白以外の何ものでもないということです。しかし又、自分の情熱に従いながら自分自身に話しかける、あれらの惑わせる話し手たちに出会わなかった人がいるでしょうか。この時のメカニズムは最も強くなり、疲労と補償の法則によって習慣の法則と共に構成された生理学は、ある時は私たちを惑わせ、又ある時は私たちを立ち戻らせます。この様にしてモデルが無いので、全てが気分により再び降下します。私は、自分から自分へ私の言葉を信頼しなくてはなりません。それというのも言葉について熟考することは、常に話すことであるからです。それ故に私は、私の言葉を信頼して神託の如く聴かなければなりません。この巫女的な状態は、幼年時代のものであり、又全生涯のものでもあります。ところが失望は普通の結果であり、直ぐに苛立ちます。ここに美化された記憶の価値が把握され、注意に値する言葉を一定の形式に連れ戻します。誰もが格言や諺に姿勢を正します。それを価値あることと感じます。格言を思考することは、自己を認めることであり、自己の支配を取り戻すことです。しかし、生物学的な動揺が再び言葉を混乱させます。鏡は自分自身と同じに、顔を顰めます。それ故に真のテキストに連れ戻す頭韻法により、格言や諺は人を喜ばせます。もっと適切に言うなら言葉を結び付けて調和させる或る術により、又健全な人間の動きに基づいて規定された或る韻律により、ついには惑わせることの無い幻想で占められている反復に結び付いた多様性により、人を喜ばせます。それ故に、この観念に従って英知のあらゆる術策が隠されている、素朴で単純な詩人も大目に見られています。そして教えることよりも適合させることの方が重要であり困難です。私の思考による踊りは、全ての踊りの中で最も不安定であり、最も早く痙攣的になります。何故なら、私が向かい合っているのは私の言葉であり、それも又自己であるからです。それ故に私の言葉が具体化して私に抵抗する時、それを変化させ得ないのが確かである時、狂った様な想像力そのものが血と肉によって私を言葉に連れ戻す時は、どれ程安心することでしょうか。ここでは崇拜がついに自分の対象を見出します。というのもデルフォイの神託そのものであっても、私が申し分なくそれを繰返し言うことを誰が私に証明するのでしょうか。

詩人は私の師です。詩人は私を待っていてくれます。二千年の昔から私が他に作りようのない

形式によって、老詩人は私が取るべき道を開けてくれます。彼は、私がそこに来ることを知っています。私の貧弱な即興が、その時に消されることも知っています。彼は、その虚ろなりズムを何時までも課します。私の前で鳴り響かせます。言うべき言葉はそこにやって来て嵌め込まれます。それらの言葉だけであり、決して他の言葉ではありません。ここに私は改めて自分を見出します。しかも私が改めて自分を見出すことを、前もって私は知っています。この様なものが最初の記憶であり、恐らく又唯一のものであります。記憶の娘たちのミューズたちです。オーギュスト・コントはここでも又、私たちを申し分なく導くのです。というのも、その詩人との対談を祈りと呼びたがっているからです。呪文がここで自らの証明を見出します。私は呼び覚まし、そして美しい詩句が姿を現します。このモデルに対して、私の情操は形式を取り戻します。私はそれらの情操を確認します。結局のところ、それは私がそれらの情操を感じているのを知ることを示しています。私はこの忠実な対象の裡に、愛と勇気と熱狂さえも改めて見出します。そして、この対象は私の最も密かな動きを規定し落ち着かせると同時に満足させます。私の思考の踊りは、動くが決して折れない列になっている絵様帯の動きに固定されています。愛と復讐と絶望でさえも全ての歩みが、前もってしるしが付けられています。こうして私はこの神の助けによって、動物的な痙攣から救い出されます。私の思考は、これらを集めて置くために非常に上手く作られているホラ貝の中で、内省に耽ります。それ故に私はそこにいます。そこに、二十世紀も過ぎたこの古い詩のうちに、私の魂の本当の顔があります。そこに私がおります。私自身よりも一層真実で、一層良く構成されている良心による反省の中に、私がおります。そこには私の真の顔があります。それというのも私は又、そこに私の誤りのモデルを見出しますが、そのモデルは許しでもあるからです。〈人間性〉(Humanités)というこの美し言葉をここで鳴り響かせて下さい。ここではその全ての意味が一つになって示されます。母親の両腕の如く、人体は組織も又私の上に再び閉まります。昔の揺籃がもう一度私を安心させます。渋顔は消され、叫びは言葉になります。従って全ての帆を上げて、世界の富で一杯にしたこの大きな船を私の港に迎え入れるこの驚きは、尽きることがありません。

全ての美しいものはその様にして私たちを再び立ち上がらせませんが、それは私たちに課せられる人間的なモデルによるものであり、この至上の権威や既に確認された権威、もっと適切に言うところ崇拝された権威によるものです。しかし、屢々作品が思想を消します。それは言葉を言わない踊りとか音楽に見られるものです。数々の芸術作品はスフィンクスへの通路を創ります。身体はそこで形を整えますが、思想では無理です。従って私は、幼年時代には芸術によって十分に成長して成熟できるとは決して思いません。その様な規律は、思考することから逸脱させるとさえ思います。その様なスフィンクスによって、私たちはエジプト人になるに違いありません。効力が強い薬は壮年期が適しています。その時は偽りの経験によるのと同様に衰弱により、身体も精神も同じ歩みで最早歩く術を知らなくなります。それらの力強い作品と無言の作品は、詩に答えます。しかし先ず話をしなければならないのは詩です。言葉の重みの下で震えている精神は、最初は謎でしかなくても、精神が言うことを知っているのと予め分かっているなければなりません。一、二、三...、月曜日、火曜日...、一月、二月...の様に一連の人間固有のことを言うのは何という喜びでしょう。人間の社会全体がそれらを餌として送り返します。私たちの思想のためにこの道が抽象する外的な法則を、誰が愛さないでしょうか。十個の数字と十本の指を符合させて、誰が

喜ばないでしょうか。それは既に理性です。しかし、詩人は数字をその中空に築きます。詩人は生き生きとした私たちの情熱をそこに流します。動きが多くて捕らえ処の無いものがあるこの私たちの思考から冒険までの、私たちの裡のこの逃亡を詩人は最も美しい逃亡と最も美しい冒険に創ります。そして、意外な出来事さえも連れ戻し、友の神託として共に告げ、そして隠します。期待、危険な通路、直ぐの忘却、遠くから連れ戻された思い出、全ては調和に従って整理されます。そして、これはまさに地面を測るのとは違うものです。それ以前に自分自身を先ず測られないなら、誰が地面を測るのでしょうか。それに、もしも自己を失ったなら、不変のメートルを再び見出しても何の役に立つのでしょうか。この見方によって真の順番が改めて見出されるのですが、その順番に従うと第一に詩人で無いとするなら、決して幾何学者にも成れないのです。何故なら人間は、人間にとって最も嘘つきの対象であり、人間のこの世界が私たちの全ての誤りの場所であるのも本当であるからです。しかし結局のところ、それが私たちの第一の対象です。そこから事実情熱であり、私たちの情熱そのものである政治の宇宙から出発して、謂わばイシス(1)のヴェールを通して結局は英知の主人である事物の世界を発見しなければならないのです。しかしもう一度言いますが、屈することは決して知ることではありません。落ちることも決して知ることではありません。乳母のお伽話から、太陽が時々底を照らす井戸を探求するタレス(2)の自由な冒険に至るまでは、余りに遠いものがあります。前者の前では自己自身の言葉が沢山あります。そして、そのあらゆる事物への愛そのものは、慰められた愛でなければなりません。人間的などんな光景の後でも、結局のところ事物は私たちを待っています。ところが、しるしを十分に蓄えていない事物には決して行く必要が無いというのも大変に古い観念であり、優れた忠告を含んでいます。タッソー(3)の魔法の森の伝説は、人間の力が世界の並外れて大きな力に対して何も出来ないことを教えています。いいえ、そうではありません。しかし、しるしである弱い金の細い棒があります。もっと古い伝説が望んでいるのは、英知の最初の試練は謎を見抜いて解くことです。従って自分の道に沿って、人間は言葉という怪物たちを見出すのです。都市を建設するにはアンフォイン(4)の豎琴が必要である様に、ここではオルフェウス(5)の豎琴が必要です。それが意味するのは、思考する困難に先ず勝たなければならず、それは決して対象に由来するのではなくて、常に情熱に由来するのです。子供が、最初は少しも理解しない美しいものを、写したり暗誦したりしますが、それは時間の無駄であるとあなたは言うのでしょうか。それは恰も、踊りは成長に悪く、労働はそれよりもっと成長に良いと言っているが如くです。哀れな徒弟、幼いせむしです。他の子供は悲劇の王の振りをして、時間を無駄にしているのは本当であるとあなたは信じています。「然り、予はアガメムノン...」(5)。しかし、自らが王で無いなら、子供は世界で何の振りをするのでしょうか。(完)

(1) イシスは、エジプト神話で、夫オシリスの遺骸を集めミイラにして復活させた女神。死者の守護神である。

(2) タレス(前六二五頃～前五四七頃)は、古代ギリシアの数学者・自然哲学者で、七賢人の一人である。

(3) タッソー(一五四四～九五)は、イタリアの詩人で、『エルサレム解放』の中でリナルドは、十字軍を離れて仙女アミルタの許に止まった。

(4) アンフォインは、ギリシア神話で、詩人・音楽家。豎琴を弾くと石が動いたと言われる。

(5) オルフェウスは、ギリシア神話で、ホメロス以前の最大の伝説的詩人。禁を破って後を振り向いたために妻を永遠に失ったと言われる。

(6) アガ멤ノン、ギリシア神話で、トロイア戦争時のギリシアの総帥。「然り、予はアガ멤ノン...」は、ラシーヌ（一六三九～九九）の戯曲『イフィジェニー』（一六七四）の冒頭。

第一章 最初の愛

親孝行は嘗て第一のものです。母の愛は完全さにおいて第一のものです。これらの二つを集めて私たちは、第一のモデルを作らなければなりません。これは血肉で出来た人体組織を決して忘れないための一つの方法であり、最も純粋な愛は既に祭壇へ引き摺られて、生贄の子羊が常に表しているものです。聖母マリアというもう一つの崇拜されたイメージも同様に抱きしめながら、どんな愛でも最高の目的に達するべきであるそのとりなしによって、その上で私たちは人間的に思考する機会を持ちますが、生理学的に思考するのを拒むことはありません。それはこの危険な旅において、一筋縄でいかない危険な旅においての重要な慎重さです。

人は自己への愛から他者への愛へ、如何に良く移るのかを探し求めます。この問題は抽象的です。それは私たちが人体組織から生まれた如く、最初はその中で動揺し、育てられて、人間が人間から決して解放されない以上、常にその中で生まれたのであり、私たちが誰か他者を愛さずに自分自身を愛する術を知らないのは本当の様です。人間嫌いの人自分が自分に満足しないで、幸福でもなく、結局のところ愛することは常に自分を許すことであるのを、人は十分に理解しています。しかし、それらは些細な理由です。全ての民衆に、至る所で讃えられ、崇められ、守られていて、結局は祭壇までも崇拜されている母性愛は、私たちがより一層明るく照らしてくれます。何故なら母と子は長い間一心同体で、同一の存在でいるのは事実であるからです。子供がそこに戻る時は、あらゆる優しさのモデルであり、この動きは画家たちが決して飽きることはありませんでした。しかし、この二重の愛について熟考する特権を持っている母親は、自分が愛するのは彼女であるか、相手であるか、言うことが出来るでしょうか。何時までも引き裂かれた古い肉体と、そこから自由に解放されている若い存在と、彼女は如何に選択するのでしょうか。その絆は、私たちの分別を越えています。しかし結局のところ、それは自然のものです。そして、私たちは最も詰まらない動物とも共通しています。思想は、それとも上手く行かなければなりません。この輪は最初から閉ざされています。人間のあらゆる宗教は、家庭の信仰の上に基礎を置いています。キリスト生誕群像や聖母マリアや恐らく私たちの如何なる思想よりも強いあの神の隠喩が証明している様に、全ての宗教はそこに帰ります。ところで父性愛は、その野生の愛が清くなって既に支配的な情愛の中で礼儀正しくなっているので、母親を常に模倣していることは注目に値することです。この交換は美しく、子供が成長するに応じて絶えず生まれます。何故なら母親も父親の力に頼り、そして模倣するからです。しかし、それは養い育てるための母親自身の仕事の中で、草刈り人とか樵である父親と一緒に家庭へ腰を下ろしに来るからで、その周りでは必然的なものでしかない何らかの力を移し入れているのです。その様にして子供は崇拜すると同時に、尊敬することも学びます。子供の最初の感情には少しの恐怖が混じっています。彼自身も長男として父親の名において命令します。そして、両親自身もこの服従によって支配されます。家族全員が、男性の働きと女性のとりなしを同時に感謝しますし、決して分かれずに結ばれて

いて、どんなに僅かな行動にも感じ易いのは子供の裡では極めて明らかです。それは子供の最初の思考のテキストであり、最初の熟考の対象であり、又全ての熟考の対象でもあります。同胞愛は共通の崇拜によって長く保持されるでしょう。そして、選択の余地の無いこの愛は万人によって理解された隠喩により、正義の最良のモデルになるでしょう。

従って母性愛は全ての愛のモデルです。そして、母親たちの恐怖である野生の愛そのものも、この厳かな支配から決して逃れられません。恋人同志が同時に母と子供の二人を模倣するのを見るのは美しく、屢々守ることと逃避することのために同じ動作を取ります。しかし、誰もが知っていることは簡素に取り扱って良いのです。その反対に、誰もが殆ど忘れていた観念はきちんと取り出さなければなりません。愛は選ぶことを望んでいますし、選ぶことを信じています。でも、母は決して選びません。母から辛うじて出て行く子供には、許可無しで済ませる自然の諸条件があるのを感じながら、それらの諸条件で満足しなければなりません。もっと正確に言うと、愛することが重要なのです。愛すべきものの誕生の到来者は、全てが愛想の良い訳ではないのですが、母親は誕生に倣っての誕生しか待ち受けません。それは母親が気に入るかどうかを知るためではなく、出来るだけ早く行い、あらゆる勇気を出して気に入るのを目指しているのです。二重の仕事です。何故なら二人が一緒に立ち直るからです。しかし、選択したり拒絶したりする観念が、この模範的な愛に生じることは出来ません。というのも、人は気に入るものを選択することが出来るからです。しかし、それは愛することではありません。その上、選択することでもありません。何故なら出会いが全てを生むからです。それとは反対に、気に入ろうと無かろうと、愛することを決めて選択する者は、自分自身の底から選択するのであり、運命というものから免れているのです。余り知られていないその偉大な観念は、精神がこれかあれかを選択する自由は少しも無いものでありますが、その反対に自然の事実は他の運命を決して望まないことによって自由を生んでいるのです。そうすることで、どんな運命でも存在があり得る最良のものになるのです。その代わりに、どんな運命も後悔によって最悪のものになります。この様にして子供も拒絶によって最悪のものになります。しかし、愛によって子供は存在があり得る良いものにもなります。子供が、全てに意味を与える際限の無い信用を見出さなかったなら、決して話も出来ないのでしょうか。従って完全な愛とは、子供が持っているものを良しとすることにあります。

この規則は精神のためのものです。しかし如何に身体が、この最初の愛において愛するのを見なければなりません。これを言ったのはデカルトであり、今日でも多くのことで第一人者でありますし、そのことでも確かに第一人者です。愛の情熱は健康に良く、反対に憎悪は健康に悪い、と私は『情念論』の中で発見します。これは余り知られていない観念であり、余りに人間の近くに接岸し過ぎて軽蔑される危険さえもあります。それ故に愛を保ち、憎悪を拒む自己の良い医者になることを考えるのは誰でしょうか。情熱的な人間の特性は、情熱について書かれたものの言葉を決して信じないものです。そして、直接的経験もここで信じる者だけに教えます。従って、原因によって知らなければなりませんし、それも又デカルトに発見されるものです。何故なら、私たちの最初の愛とは私たちの最も古い愛であり、それは美味しい食べ物で豊かになった血液や、きれいな空気や、心地良い温かさや、要するに乳児を成長させる全てのものでなければ何であるのか、とデカルトは言っているからです。先ずは自分自身の最も古い愛の言葉が存するのは、この動き、この屈曲作用、この内部の受入れ、美味しい乳を吸うことで、生命の諸器官と

和合した快さの内です。全くこれと同様に最初の称賛は、美味しいスープに「ウィ」（そうです）と言う頭の動きでした。私たちのウィは今でもそれに似ています。そして、もって適切に言うなら、私たちの「ノン」（いいえ）は、余りに熱いスープに「ノン」と言う時、子供の頭や体全体の動きに似ています。これらの外部のしるしは、もっと内部のしるしへの道を作ります。何故なら、胃や心臓や身体全体が害を与え始める食べ物に「ノン」と言い、吐き気によって吐き出すまでになりますが、この吐き気は軽蔑や非難や嫌悪の最も激しく最も古い表現を止めているからです。そこからデカルトは、あらゆる人間の嫌悪は良き消化に有害である、とホメロスの力強さと簡潔さで言いました。

私たちのしるしはどんなものでも身体の奥からやって来て、そこへ戻るものであるということです。例え慣習が人間の言葉を緊密に子供の最初の行動に結び付いていないとしても、身体の構造が既に説明しているのは、全てが臓腑からのものであるということです。更に、付き合いの上での微笑は肺や心臓を楽にしますし、軽蔑からの渋面は胃の中でも繰り返されます。それ故に人は、この驚くべきデカルトの観念を大きくすることが出来ますし、膨らませることが出来ます。それには決して疲れないでしょうし、決して限度も無いでしょう。愛の最初の讃歌は、母親の乳への讃歌でした。それはあらゆる方法で大事な栄養を迎えて、抱き締めて、吸い上げながら、子供が全身で歌うものでした。乳を吸うこの熱狂は、生理学的には最初のモデルであり、世界中のあらゆる熱狂のモデルです。合わさっている両手は既に崇拜と称賛のしるしです。そして、接吻の最初の例が乳児にあるのを見ないのは誰でしょうか。人間はこの最初の敬虔な心を決して何一つ忘れません。人間は十字架にも又接吻します。幼児エロスはそれ故に偉大なしるしです。

私は、そのしるしを決して涸渇させません。勿論、それをもっと学びたいと思います。何故なら愛されている子供は受け入れる以上に返すからです。或る意味では更にもっと愛していると私は言います。その感謝において絶対に間違いの無いものを私は見ます。何故なら有難うと言うことが、まさに成長であるからです。成長して幸福になること以外のことを要求する人は誰かいるのでしょうか。このことは多くを約束し、遙か遠くまで導くことが出来ます。このことは騎士の誓約の様に、絶対的な約束以上のものです。これは受け入れられた愛のお陰です。深き信仰は忠義です。信仰と忠義というこれら二つの言葉は類似語であり、それ故に愛する人の信頼は、発展を待ち望む相手の裡に全てのもを絶えず花開かせています。もしも愛を純粋にして、プラトンの名前が結び付けられていて、天国の感情へ自然と行く多くの形を持ったこの英雄主義を少しも理解されなかったなら、人間の高尚さをその本質から切り取りたくなるでしょう。けれども英雄が勇気と企図を生むのは、血液と体液と筋肉の活動によるのは明らかです。従って、子としての父母に対する愛情が全ての愛情に似ているのは、全く低次によるのでは無いのです。フロイド流に、最初の最も純粋な愛にも何らかの性欲があると考えたがる人々は、本末転倒して考えている様に思われます。それというのも肉体全体が如何なる愛にも関係しているのは明らかことであるからです。このことは繰り返し言わなければなりませんし、決して忘れてはいけないことです。しかし、今の私たちの目的はこれらの混合された驚くべき愛の中から何ものかを解明することであるので、自然の秩序に従った純粋な恵みの愛は最初のモデルであり、他のあらゆる愛の教師の様なものでもあって、自然の秩序について行くのは道理に叶っていないのでしょうか。性的本能以

上に激しく、苛立たしく、狂暴で、忘れっぽいものは何も無く、そしてこの鋭い針と結び付いた思考の恐るべき働きによって、人間の裡ではこの本能が直ぐ様に混乱を齎します。臆病になり、悲しくなり、恥ずかしくなり、意地悪になるのを私は知っていますし、これから十分に説明します。しかし又この野生的な愛は、最初の恵みと最も古い愛への忠義を思い出しながら逃げ出します。

最も不変で、最も健全で、最も人間的な文化は、そのことを証明しています。敬虔 (piété) と信仰 (culte) という言葉は結び付いています。これは説明しなければならないことです。それから感情が感情でしかないことは、自らを全て取り戻して逃げ出す活動によるしかないのです。愛の神秘主義というものがあります。そして、全てが自然である以上、人体の構造は結局のところそれを説明しなければなりません。ところが、もしも最初のモデルである母性愛や親孝行のことを正しく考えたならば、抑え難い曖昧さをここに出すことは決して無いでしょう。それは自然を決して拒むことではありません。全くそれとは反対で、自然を全て受け入れることです。そして乳児の感謝の気持ちには、既に最も純粋な愛のあらゆる寛大さも雄々しさも含んでいます。そして母親の希望を満たす素晴らしい野心によって、人間の奇跡にまで及ぶでしょう。大人になってもこの野心を精一杯伸ばすのは、些細なことではありません。そして、完成によって愛に報いることは、子供のモデルに見る如く、常に成長と力による奉納と真の感謝です。性愛を高度なモデルへの従属によって情熱から情操への移行が行われることは、どんな愛も愛の全てになるからですが、高度なモデルとしての母性のイマージュは常に尊敬に足る象徴を与えています。母はまさにこれを待っています。乳児が美しい人生を作るために全身で乳の泉を汲む時、乳児はまさにこれを約束しているのです。(完)

第二章 欲望

〈名誉〉は至る所で同じであり、誰においても同じです。それには自らを支配する意図があり、決して屈しないための覚悟があります。どの様な奴隷状態も、あらゆる国において恥とされています。男性は誰でも自分を王としていて、女性は誰でも女王としています。どちらも外国の侵入を拒む時には、可能な限り全力を働かせ様として集中します。力の試行である遊戯がこのことを立証しています。少なくとも既に説明した様に、遊戯は歳を取ると衰弱します。抑え難い圧力を感じさせるものである人間と事物の前では、同意したり我慢したりすることが中心になります。人は、勝利が可能な閉じられた宇宙では、最初は勝つことを喜びます。次に開かれた場所で勝つことを喜びますが、このことで高度な力を示し、やがて自分に勝つことを喜びます。自分に勝つのは、賢者という稀有な人間の遊戯であると言ってはいけません。それは万人の遊戯です。如何なる種類の羞恥も無く、如何なる自制も無く、恐怖の動きに素直に素早く従う様な人間の観念は、殆ど創られることはありません。その様な動物は、現在の動物（人間）の様にこの惑星の上に立つことも、王であることも決して無いでしょう。英雄の模範は自然であり、万人に認められているものです。卑怯者は何処の国でも軽蔑されます。しかし最も卑怯な人間も、あらゆる恐怖の衝撃に絶対的に追従する生活よりも既に遙か上にいるのです。それ故に全く勇気が無い儘でいることに平気な者は誰もおりません。侮辱は誰にとっても同じで辛いものであり、それは何時も明け透けの慎みの無い攻撃です。そのいい加減な拳固で頬を打たれるのは、常にその象徴でした。その復讐も、力と勇気の証拠を示すことに狙いがあります。これらの原則から思い出されるのは、歴史の本がかなり良く読まれますが、それらの利益は僅かなものであることが発見されます。

しかし、私はそちらの歴史の方へ決して行きません。私たちの仕事は、それらの衝突を内側から考察することです。決して恐れることさえしなければ、外部の力は侮辱しないとの考察によって、直ぐにそこに導かれます。従って恐怖に勝つ者は、容易に侮辱されないと私は思います。しかし、その様な人間は何処かにいるのでしょうか。恐怖は勇気の中で唸っています。恐怖は目的地よりも先へ勇気を押しやります。何故なら、その人間は臆病な自己に対する勝利のことしか考えないのですが、決して勝利を手に入れたのを見ないからです。というのも、その人間は自分自身の行動を只考えるだけで恐怖を抱くことがあり得ますし、自分自身の勇気さえも恐怖を抱くことがあり得るからです。それ故に彼は決して忠告を聞きません。寧ろ彼自身の中で、色々な折りに会議を開いているのを私は見ますし、彼の内面にいて時々は臆面もない陰謀者と裏切り者に対して考えているのです。自分自身の恐怖の仮面を取り、それを裸にして引っ張って罵るのを目指しても、手に触れなかったのは誰でしょうか。

私は、プラトンなら言うであろうが、横隔膜を通して一步ずつ危険な主題の方へ降りて行きます。しかしながら私は、プラトンだけに見出した指摘をもう一度明らかにしたいのです。これらの全ての反乱において、怒りを通して心臓が極めて早く登場することによって、怒りも又興奮

による一種の反乱です。しかしながら怒りは、一連のその規則正しさにおけるが如く、その始まりにおいては勢力の刻印を持っています。そのことに関しては、もっと後で述べます。いずれにしても怒りは、先ず怖がる腹を救済するのに手を貸しています。恐怖に対しては急いで武器を取らなければなりません。しかし私は、読者がプラトンの『国家』を良く読まなかったなら、これらの言い方に十分に慣れているかどうか疑問です。私はプラトンへ投げ返します。この哲学者は恐らく、私が今論じている情熱に十分な対策を講じた唯一の人です。最初の恐怖の一刺しの時には、そんな風にして人間は腹を立て、そしてホメロスが言っている様に自分の心臓に話しかけながら、自分の怒りを味方と見做しているのです。ところで最も屈辱的な欲望に対しても、これと同じ活動は同じ位に迅速です。私は、この武装された愛を野心的な愛と呼びたいと思います。従って私たちは今や、私たちのあらゆる力に関しての収集と調査を行ったのですが、それらは決して仕えたいと思わない精神や、疑い深いカエサルの親衛隊による監視の如き希望を持った復讐心によるものです。

欲望へ行きましょう。その時、欲望が傷付き易い腹部の近くだけにあるのなら、何時も何らかの恐怖には欲望が混じっていることを第一に観察しましょう。それと同じ類似は、成長にも生殖にも再び見出されます。成長が終わると私たちから、私たちと類似のものを産み出すもう1つ別の成長に直ちに貢献するのが、私たち全てに服されている動物的な法則です。そして男女の性の分離によって、この機能は相手の存在を求めますが、それは全ての性の中で最も強く、最も豊かな未来があり、ついにはそう成り得る最も完全な青春とまさに同じ時点にあります。それを見分けたと思うや否や、恐怖に劣らず力強い情動がそこから生まれますし、主権者から見ると恐らく恐怖心よりももっと破廉恥なものです。何故なら征服するための動きに混合された感嘆と、幸福の同意を望む尊敬によって、どんな幸福も直ちに相手の幸福に依存しているのを如何なる曖昧さも無く告げられているからです。しかし、外からの支配に基づく幸福や不幸の告知は、宣言の様に決して抽象的なものではありません。その告知は、恐怖の空腹と同じ様に無意識な動きによって、生命の中心自体で行われますし、私たちの思想と同時に人生の味わいそのものも変えます。外に存在するという事実だけによって、思い出が何時も戻って来ることによって、耐えられない不安が全身から起こります。それを認識する前でさえも、外のものの中に見える力は、不幸へ逃げ去る動きを説明します。もう一度言いましょう。反省すれば誰でも恐怖を恐れることになりましたが、それは誤って感じるからでは無く、恐怖が未知のものであるからです。未知の動きはどんなものでも私たちを怖くさせます。始めにしようとしていたことを不可能にするのを狙っているのが極めて明白なこの反乱には、主権者への侮辱があります。全生活がこれで変えられます。全未来がこれで侮辱されます。何故なら恐怖には恥辱を約束するものがあるからです。愛の最初の動きは尚更そうであり、それは青春期の高い望みを自然と消して仕舞います。そして外部の意向による命令に従って別のものが齎されますが、直ちに疑わしくなり勝ちたいと思うのですが、勝てないのです。その様にして愛は怖がらせません。復讐心とも無縁ではありません。

私は、臆病な恋人を彼女の孤独の中まで、決して余り追って行きたいと思いません。ここでは

あらゆる悪徳が生まれますが、欲望を認めると直ぐにそれを支配する意志によって、主に男たちに生まれます。それは命令で欲望から解放されたいのです。それは恐怖の場合と同様に、欲望を扇動して、加減し、自らを試してみることです。快楽を貪ることであり、そして抑制することでもあります。それは快楽を飾ることであり、もしもこの上なく良くて、想像力によって青春と美と優雅さによる装飾で快楽を飾りますが、大変に遠くからも認識される思い上がった権力に恥をかかせることが出来る全てのしるしによって同時に、快楽を押さえることです。これらの方には、もしも注意して見るなら、あらゆる悪徳が入っており、最も説明がつかない様なものさえも幾つも入っています。そして、もしもその時に快楽が私たちにあるとしても、支配するという傲慢によるのであって、喜びに対する欲求ではないことを誰もが気付かされるでしょう。同様にこの信仰には軽蔑もあり、結局のところ多くの原因によって、あらゆる種類の陶酔の中にしか平和を見出さない絶望があるのです。そして、アルコールによる陶酔には、他のあらゆる陶酔に勝つ力があるというよりも寧ろ、傲慢な部分の沈黙によってあらゆる陶酔を無益にする力があることに注意しなければなりません。

いずれにせよこれらの勝利は、私たちが罰するために自然が毒殺されます。それでも尚、生殖機能をうまく避けるには、常に何らかの莫大な費用がかかる試みを当てにしなければならず、最悪の事態にならないことも、やはり本当です。この危険な通路においては大いに注意しなければなりません。そこでの羞恥心、教養、いや義務感という十分に高い観念でさえも、何時も満足な助けにはならないのです。愛に対して武器を持たない娘たちの間違いはもっと明白ですけれども、それでも少年たちの非行の始まりよりも恐るべきものでなくなると私は思います。そして、私はここで数々の原因から欲望を述べるに止めて、各人が引き出すことが出来る道徳は各人に委ねたいと思いますけれども、それでも私はその点について非常に無知な母親たちに対して、彼女たちが娘たちに気を配っていても、その義務から免れていると思わないために、これらの数行を書いているのです。（完）

第三章 愛

逃げる者たちを追わずに置きましょう。「人間には優しさがある」と人が言う時、それは充実して豊かな意味が生まれます。そして、女性的な意味にとられても、その優しいという意味は直ぐに感じる以上に、思い切って危険を冒す寛大さまで私たちを高めます。そこから試練は、その全ての意味を受け取ります。何故ならば、望まれて選ばれて求められた試練が、本当の試練であるからです。しかし、もっと諸概念を追い詰めながら、支配し取り戻し形あるものにするこの動きによってのみ本当に感じられると、恐らく言わねばなりません。興奮させる情動は、過激な熱狂や更にもっと過激な恐怖が見せてくれる様に、最早誰にとっても情動でないことは周知のとおりです。もしも全ての者が逃げたならば、誰が「私は怖い」と言うのでしょうか。怖いとか、心を打つとか、憎むとか、愛しているのを人が知るためには、精神集中や抑制や呼びかけや自己集中がなければなりません。犯罪、婦女暴行、突然の恐怖、それら全ての激しい発作は意識を消します。そして普通の言葉がここでも又、無意識の言葉に与える意味によって私たちを立ち直らせます。浅学者たちはここで彼らの圧力を軽率な人へ行使しますけれども、その意味が揺らぐことはなく、私は敢えて気兼ねなく言います。間違っ書い何の得があるのでしょうか。ポリュクト(1)は一人の人間です。恐らくは襲撃に早過ぎた人間です。しかし忍従された愛を何時も乗り越えるこの活動は、そのことを考えることでしかなく、その活動はまさしく全ての人がポリュクトなのです。演劇は輝かしい公開によって最良の証言の一つであるのみならず、ポリュクトが人間であり、命令だけで証言出来なかった低次の神々を侮辱し壊滅するための熱狂によって、単なる人間であることを誰もが感じるでしょう。その心臓はまさに虚ろな筋肉であり、恐怖や欲望に対して大胆でもあります。どんな愛も自分自身に対しての働きかけであり、そして自分が望む限りでしか欲しないと誓った以上、それ故に死ななければなりません。生きる限りは恐怖と欲望と一緒に蘇るので、死によってのみ自らを証明するのが英雄の条件です。ポリュクトは超人であると言われそうです。勿論、その理屈で行くなら、戦争の英雄も又超人です。私が信じる処では、少なくとも一方が人間的であるなら、もう一方も又、人間的なのです。人間は恐怖に屈した自分を決して容易に許しません。勿論、アルセスト(2)も自分自身が望む様ではなくて、セリメヌが望む様に愛することを容易に自分に許す訳ではありません。ディアネイラ(3)の服は強力なイメージです。ヘラクレスの叫び声によって世界は震えます。あるいはその時は脅迫や狂乱や犯罪でもある、愛の劇を消して下さい。人間は自分自身を恐れるだけに過ぎません。そして人を殺したり自殺したりする自分自身よりも、逃げる自分自身の方を恐れるのは何故でしょうか。それ故に愛の最初の触れ合いは、全ての劇を告げています。それは大砲の最初の一撃の様なものです。もしも逃げるに任せないとしたら、その瞬間には自分自身が何かを決心しなければなりません。ロメオを見たジュリエットは乳母に言いました、「もしもあの人と結婚しないなら、誰とも結婚しないで死ぬわ」。

この言葉は崇高です。しかし、単に感じることに崇高なものがあることは、詩人たちが感じ

させてくれるとおりです。でも、何故でしょうか。人が感じているのを知るのは、思い切って感じることもあるのです。それは足の先から頭まで震えて取り乱し、逃げ出して自分自身を見失う生活を支配することです。この震えは詩節の中にもありますが、命令に従ってやはり終わります。その様にしてジュリエットは、彼女の詩の規則を先ず確保するのです。全てがそこに整理されるようになるでしょう。人間の心はそこでは決して躊躇しません。そして、それは又生命の起源へ染み通って行く情動のしるしでもあります。愛の矢には偶然生まれたイメージはありません。

従って、その様なものは国王の遊戯です。しかし、そんなにも初々しく無く、しるしの使用そのものによってそんなにもしるしに敏感でなく、その様に時間を潰し、決して自らを投げ入れない者を想像してみましょう。これは普通の人です。兎に角、危険を自ら負ったり、危険を考えたりするや否や、些かのお金を支払ったり詳細に自分のことを誓わなければならないのは事実です。デカルトが見た様に、この不決断は最大の悪です。情熱は、大変に見事な名ですが、愛することの恐れと武装して警戒するのと共に始まります。私は、しるしに見たこの力を恐れます。いや寧ろ私が恐れるのは、最初の効果に従う自分です。私は自分を与えたいし、自分を守りたいと思います。最高の用心とは、相手が持っている力と同等の力に基づいて私を確保することです。そして、私が疑っているとそこから相手の力もやって来るので、私は相手にも疑って欲しいし、そこから力も手に入れたしたいと思います。以上のことから双方に欺瞞のしるしが生まれます。しかし、もう一つの危険とは、相手も私を余り信頼しないことではないでしょうか。そこから前進したり後退したり、結んだり解いたりするこれらの活動は、踊りのテキストです。そして、希望を奪う振りをしている私自身の二重性格によって、舞踏会の明かりが灯っている限り、私は常に希望を守っているのです。責め苦は次のとおり孤独の裡に始まります。相手が不実でも、自らの罪を認めることが出来ないものは一つも無いからです。そこからついに自分の意志を表明したり誓ったりする決心が生まれます。それは受け入れたいものをまさに差し出すことです。それは、どんな力でも持つための条件の下に、どんな力でも与えることです。

しかしながら、もしも友情や仕事や子供たちが、野性的な愛を文明化するために余り専心しなかったなら、双方の誓いで決して全てが決着されることは無いでしょう。何故なら強制への疑いとか、愛とは無縁の打算への疑いが残っているかも知れないからです。余りに多く、余りに早く、軽率に与えたという後悔が残っています。それ故にしるしを解釈したり、心を計算したりすることが終わった訳ではありませんでした。人は気に入られることを望みますが、気に入られる必要が少しも無いことも又望んでいます。これらの劇から全く一度も逃れられませんが、この見方は低次のものへの回帰により、何時も楽しみ、養い、洗い、育てるために大きな仕事があります。そして、宇宙的な力が戻って来ることだけを恐れてはなりません。気分はそれ故に恐るべきしるしです。誰もがここでは相手の最も高い部分しか当てに出来ないのですから、会談においては一致よりも寧ろ自由と相違を探し求め、これらを愛することになります。それによって愛は友情に似て来ます。つまり最も完全な友情の中に完成を見なければなりません。その様にして精

神の一致と万人の救済が行われますが、ポリュクトはそれをこの世の外に探しました。しかし恐らくその時期ではありませんでした。そしてプラトンはこの世界そのものの中に探しましたが、時期尚早でもありました。一方は許された快樂への軽蔑により、又二人とも常に恐るべき迷いに対しては正当な不信により探しましたが、プラトンは当時の風習の墮落により生々しい事例を見たのです。両者はお互いに、美の中に精神の反映しか見たくありませんでした。ところで、これは深い真実です。というのも、すっかり夢中になっている人間は、直ぐに自由で内面的な同意を求めますが、それは最も高い同意であり、そこにしか休息したくないからです。しかし、精神による精神の模索と監視を、最も生き生きとして動物的な情動に根拠を置くこの回り道そのものも、又注目に値します。確かなことは、多くの人々は、いや殆ど全ての人々は、コントが言った様に、精神は殆ど探求せず、真実の魅力とは仕事と競争を脱して、私たちの重厚で地球的な自然に殆ど働きかけないのです。従って政治的な成功の上に築かれたエリートたちにおいても、尊敬の念は殆ど見当たらないし、真の配慮もごく僅かに見出されるだけです。それは屢々愛の無い奴隷的な仕事でしかありません。しかし、最後の幾つかの言葉は最も積極的な意味として聞かなければなりません。言語の天才は心の礼儀正しさや優雅さも又、配慮と呼びます。そして諺は戯れながらも重要なことを言っています、「恋愛は娘たちに知恵を与える」。思考することは愛の最初の効果ですが、恐らくは愛のみの効果です。というのも思考することは論駁したり打ち破ったりすることが決して目的では無い、恐らく唯一の場合であるからです。それは多分、思考が内心の働きの中で称賛に飾られて裏表の無い和合を求める唯一の場合です。証拠には常に幾らかの荒々しさがあり、結局のところそれは秩序と支配の思想です。裁かれた事物で全て一杯になった法律的精神は、愛から本当の思考する方法を学ばなかった者たち全てを恐らく腐敗させます。コントが現実的な説得の価値を発見したのは非常に遅かったのですが、少なくとも無視することはありませんでした。相手を決して束縛したり蔑んだりしないで、それと反対に大きくするために気遣うもっと細やかな証明方法を説得と呼ぶなければなりません。異性への用心は多分、共通の自然により一層近く保持する構造であり、結局のところ証明を試みることが無い無言の拒絶という境界線でもあり、それらは疑いも無く最も激しい警告を男性の詭弁家に与えます。愛しているなら、巫女的な「いいえ」を誰が軽蔑するのでしょうか。そして、それ故に愛以外の処で、外来の相手の思想を、まさに外来であるから自分のものにするのは誰でしょうか。これは自分の思想はどんなものでも動かすことです。この世界で最も優しいものである、この裏表の無い知恵に至る道を作る人は殆どおりません。しかし、命令に基づく忠告に対してこの愛情のある反応が無ければ、私たちには常識のパンにも塩にも欠くことになるでしょう。コントはこのことを大変良く認めましたが、彼はこの世の唯一の思索家を、恐らく夫婦から生み出しているのです。（完）

(1) 『ポリュクト』は、コルネイユの悲劇（一六四一~四二）で、信仰と夫婦愛の葛藤を描く。

(2) アルセストは、モリエールの演劇『人間嫌い』の主人公。若く美しく浮気でコケテッシュな未亡人セリメーヌに恋する。

(3) ディアネイラは、ギリシア神話でヘラクレスの後妻。夫の愛を取り戻そうとして媚薬のネッソスの血を染み込ませた服を着せるが、その毒で却ってヘラクレスを死に追い込む。

第四章 憂鬱な感情

ご存知の様に不健康は、憂鬱な感情が広がります。そこから全てを悪い方へ考える人に関しては、それは胃や肝臓の調子が悪いとか、立ちっぱなしで疲れたからではないかと自問するようにするのが最初の知恵です。人間の取り扱いを知っている乳母は、乳児が泣き出すと、具合の良いその時の姿勢を発見するために、あらゆるやり方で乳児を回転させました。あなたもそれ故に乳児を取り扱ってみて下さい。用心しながらも座り心地の良い椅子を与えたりとか、それとは逆に少し散歩するとか、場合によっては涼しくしたり暖かくしたり、出来ることならスリッパを与えたりしてみてください。もしもその儀式から辛そうな嘆き声を聞いたら、せめて使い古された機械や整備不良の機械の軋む音とか、何か外からの異物で詰まった音だと思って下さい。勿論、こうした判断や心配りを見抜かれないようにして置いて下さい。何故ならその悲しげな人は、自分の不幸を作ろうとしているからです。彼は、全てが作られているのを決して望みません。素晴らしい雄弁に従ってそれらの理由を、自分の気分ぴったりと合わせながら、不幸を作るのに必要なものを探します。ここに詭弁法が現れます。それは抽象的な精神のものの様に見えますが、実際には胃によるものです。「もしも」と「しかし」、そしてあらゆる種類の反論は、その人が満足していないことを見出したい理由なのです。何も気に入らないし、これからも気に入らないと言っている、あの陰鬱な視線を解釈して下さい。批評癖に対する建設の精神は、老人に対する若者の技術者であり、黒い血に対する赤い血です。反論と食物の拒否には深い繋がりががあります。それは動作の中に現れています。そこで私たちは理由から薬へ、そして図表からヴィシーの塩(1)へ送り返されます。それは皆が知っていることであり、普通の言葉でもコレラ患者や黒胆汁質者と言って、それを証明しています。しかしながら、物事は殆ど何時もまるで誰も知らなかった様に進んで行きます。何故なら、誰もが少しは黒胆汁質者であり気難し屋であるからです。誰もが、胃痛患者とか心気症患者と思われるより、意地悪な人間とか無知な人間とか愚かな人間と思われる方が好きです。というのも苛々することの立派な理由を見出すからです。こうして若者が何とか学んでいる間に、文法は二人の陰気な胆汁質者の間では屢々破棄されます。その時に若者に教えられるのは文法ではなく、若者が知る限りでは文法よりももっと極めて重要な何ものかです。

自然はここで笑いによって身を守ります。非常に上手く守ります。何故なら笑いは、真面目さの底にある熱烈な自己への注意力とは全く反対のものであるからです。笑いは、身体各部位を好きな様にはしゃぎ回らせて置きながら、服の様に全身を揺さぶります。笑いは本質上支配の放棄であり、身体を締め付けて麻痺させる不条理な支配に対する最初の薬です。笑いは、解放しながら変化を回復させます。換気し、清掃し、休息させます。これ以上に良いものがあるでしょうか。しかし笑いには、その核心に真剣なものを攻撃して危うく廃位しそうにするという悪い点があります。悲しみの当然の理由を自ら生んでいる者にとって、それら全ての理由が笑いという全ての態度の否定によって突然に失うのは一つの響感です。「固執するな」は次の「緊張するな

」に帰着します。しかし、人は固執しようとし、従って笑いは暴力と同じであり、乳児の様にあなたを飛び上がる様にする試みなのです。笑いが勝者になるためには、喜劇芸術の全ての用心が必要です。しかし又、この勝利は美しいものです。

私は、理性によって緊張を緩めるもう一つの方法を認めます。非常に力強いものです。つまり悲しみが健康に反するという観念であり、今までのものよりも少し秘められているものです。ここで私はデカルトに戻ります。私が先に思い起こしていた喜びと愛についてデカルトが書いたものに戻ります。私たちは、空気や栄養、そして一度に栄養を運んで来て廃物や滓を運んで行く血液の往復までも拒絶する活動によるしか私たちの悲しみを説明出来ないのです、悲しくなろうとしてそれらの理由を研いで磨きをかけようとする者が、それと同時に病気になろうとしているのは明白です。それ故に、この循環の中で私たちが理解させられるのは、単純な判断と表情豊かな動きを維持している遊戯によって病気になっている私たちを、更に一層病気にしていることです。

「思考することは気分を悪くさせる」と誰かが言いました。この観念はここで私たちには上空に見えるのでは無く、まさに苦悩と同じ高さに見えるのです。それ故に病気とは人間にとって特有のもので、誰も実際の病気の中に、思考によるその病気を敢えてその一部に入れたいでしょう。人は決してこの観念について行きたいと思いません。これは余りに恐ろしいものです。病気という観念でも一つの告知であり、確かな前兆になっています。というのも、私はそこで何が出来るのでしょうか。実際の処、それを思考する方法によって私はその観念を追い出すことが出来ません。しかし原因によって思考することが、一つの観念から沢山の他の観念へ直ぐに私たちを投げ入れ、この薬が最良のもので、その他にも観念を変える方法は沢山あります。身体を変えたり、対象を変えたり、場所を変えたり、事業や取引や儀式や祭りへ行くとかです。そして、この様にして人間たちは自分自身から逃れるのです。デイドロガルスーに思い出させた様に、孤独な者には不幸を！ です。

もう一つ言うことがあります。もっと微妙で、今の主題にもっと近いことです。それは気分が常に悲しいということです。ここで言葉が十分に私たちに教えてくれています。不機嫌ですと言うことで、大体言っているのです。しかし、その理由を理解しなければなりません。自分を変える如何なる観念も無いのに、幸せかどうかを単に知ることだけに気を付ける人間を想像してみてください。厳密にはそんなことはあり得ません。それでは眠っていることになるでしょう。しかし、もしも目覚めていて自分自身の人生の色彩を単に出来るだけ注意しているとしても、この光景の不断の変化や支離滅裂や曖昧さによって、疑ったり心配したりすることからは避けられません。終わりの無い独白によって思想の影が生まれます。予期せぬ移行と、全てを占めている見方は直ぐに忘れたものになります。実際は私たちの境界を叩いている周辺世界の効果しかありません。しかし私たちがそれを知ることは決してありません。そして、私たちを混ぜ合わせた全ての事物は謎を生みます。私たちは、全てがそこにあるが、そこに何があるか知らないのを良く知っています。自己について思考しようとする時、自分がどうしているのかも分からず、何であるのかも分からないのは、その人間にとっては常に一つの響感です。そして実際には誰もが自分が行う

ことによって自分を知るだけであり、もっと適切に言うなら自分の作品によって自分を知るだけです。「私とは何か？」と言う必要は決してありませんが、寧ろ「私は何を行うか？」と言うべきで、それは進行中の行為を想定することです。自己にとって一つの作品、一つの企て、一つの作業台の人物である時は幸せです。しかし又、彼の存在は一瞬の閃きでしかありません。常に等価値の数々の可能性を前にして、自分自身を裁こうとする者は不幸です。そして常に保有されている想像力の秘められた法則によって直ぐに不可能になりますが、それは想像力が相殺の動きによって素描したものを消すからです。この空虚な働きの中で、人間はそれによって自分自身を語ろうとしますし、臆病が勇気を取り戻し、悲しみが喜びを、熟考が決心を取り戻し、全てが同等の一つの灰色の風景画に至るまでになることが不可避的に起こります。その様にして人間は、自らを見出したと思った瞬間に自らを失います。それ故に、そんなことは珍しいのですが、例えば彼がそうならなければならない全ての理由が生じたとしても、見物人が光景に満足する様なことは決してあり得ないのです。そして最悪なのは、見物人が光景を乱して、台無しにすることです。何故なら、両者は決して別々ではないからです。虚しく不安になることによって短気は直ぐに答えの中へ移りますが、拡散させます。以上が退屈の底にあるキャンバスです。人間は決してそこに止まっています。彼は思考します。自分の思想を止めたり、追い掛けたりしますし、あるいは立て直します。しかし自分から支払い、発言し、自分を取り戻さないで自分に期待する限り、生温かいのです。人を救うのは、何時も言われていた様に、何らかの誓いです。私が欲していたもの、今でも欲しているもの、それが私というものです。以上が私の思想の曙です。そしてその反対に、何も誓わないのが夢想であり、黄昏に似ています。そこでは全てが刻一刻と暗くなり、混じり合って行きます。

私たちの主題に接近して、「私は何を愛するか」と自問する人間の夢想を追い掛けて行きましょう。全てが再び問題になります。存在方法は全てが曖昧です。姿を現す思い出に全てが依存しています。そして監視が無いと、最も支離滅裂な思い出が近道を取ってやって来ます。思考することのこの退屈は、相手を飾るためではありません。この偽りの光は同時に二つの愛を裏切ります。揺るぎない決心だけが、揺るぎないものを現れさせるのです。信念には、先ず自分自身の信念によって始まらなかつたり続けて行かないものは決して無いのです。そして大変良く言われるのは、誓いの信念です。この輝かしい勇気が無いと、人は自分のために持っている愛で相手を愛で飾ると、相手をも当てにすることが起こり、不実の感情の嫉妬心も現れ、その多くの愛が無ければ、遙か遠くへ行くかも知れないことをその多くの人々も気付いていました。しかし、これでは言い足りません。相手に疑念を抱くのは、自分に躊躇しているからです。そして、私たちが相手の裡に仮定する悪意は、先ずは常に私たちの裡にあるのですが、それは当てどの無い夢想の変化と曖昧さによるのです。それ故に、以上が退屈という灰色の背景に対する、謂わば最も遠くにある舞台装置であり、それは嫉妬心の緯糸のようなものです。人は自分自身の誓いによるしか強くなれません。というのも人は選択するからであり、自分の思考の中でその時固く決心するからです。その様にして最愛のイメージとそれに関係する思い出の中で、人は選択し、固く決

心し、構成するのです。それは人が愛するものを美化して呼び出すことでもあります。しかし、充実した愛の第一の効果が、もしもそれに相応しい相手を助けることでなかったなら、そして先ずそれに相応しい人と仮定しなかったなら、もっと適切に言うならそれに相応し人であって欲しいと思わなかったなら、愛は常に人を裏切るでしょう。疑いはその考えにより、鎮まっている感情に対して信用と未来を開くということ、そのことによっての裏切りです。それは不実の前兆であり、愛することの悲嘆です。そして、疑いは自分自身への言い訳であるからですが、それは自分自身で生き、そして自分自身の実体を証明することにもなるからです。予感の力は全てが感情であることからやって来ます。疑いが侮辱的であるのは、取分けこの意味においてです。誰かに満足したかったなら、必然的に先ず自分に満足しなければなりません。嫉妬深いアルセスト(2)を人間嫌いと呼び出したのは天才の閃きです。それは厳格な愛で武装する最初の気分を強調することです。相手への信頼が一人ひとりの宝である交換において、疑いが決して不実を受け取らないとどうして望まれるのでしょうか。この時は皮肉が一方から他方へ働きます。「そこにあなたの疑念がある」。「そこにあなたの滑稽な身振りがある」。「それはあなたの寛大な愛ですか?」。「それでは、それは私があなたに見出す助けなのですね。私の最悪の敵もまだ増しでしょう」。その様にしてアルセストは愛する術を知りませんし、セリメーヌの方が正しいのです。アルセストはそのことを知っています。嫉妬の中での最悪は、自分自身に対して絶望の理由にすることです。これらの指摘は、そこで一人ひとりが自分自身の情熱も又確実に見分けるのですが、バルザックが言う様に、鉱物学者たちがスウェーデンの鉄を見分けるのと同じ様に確実に見分けます。そして、これらの指摘は思考する動物における愛のドラマが、一頭の雌鹿の前での雄鹿たちの戦いよりももっと遙かに複雑で高級であることをまさに理解しようとするものです。そして私は、恋敵のことを一言も話すこと無く、嫉妬を前にして十分に描写することが出来ました。恋敵とは考え出されたものです。丁度良い時に現れるのです。それは謎の言葉です。気に入ることもあるかも知れません。人はそれを美化することを私は認めました。そしてついに恋敵と知り合いになる時、これに対して抱く狂乱は、彼が自分の役割を十分に果たしていない処から来るのであり、又彼が相応しくないために、セリメーヌも彼も大変に軽蔑する様に導く処から来るのです。もう一度言いますが、嫉妬の避難所は、恋敵が考えから追い払われて行く様に、素晴らしい信用によってセリメーヌを十分に高くすることです。そして、その様なものがまさしくドン・キホーテの裡で歪められずに大きくなった偉大な愛です。彼は与えるのであり、要求しません。(完)

(1) ヴィシーは、フランス中部アリエ県の都市で、第二次大戦中にペタン元帥を首班に建てられた親独政権(一九四〇~四四)で有名だが、その鉱泉は胃に効くと言われて、塩も作られる。

(2) アルセストは、モリエールの演劇『人間嫌い』の主人公。若く美しくて浮気でコケテッシュな未亡人セリメーヌに恋する。

身体の結合は一つの美しい証明です。しかし事実によるあらゆる証明は、観念の前では曖昧です。それ故に、夫婦には喧嘩がつきものです。しかしながら、救いも又無い訳ではありません。ヘーゲルが言う様に夫婦の絆は、最初は観念ですが、子供によって存在するものへ移ります。そして混じり合ったこの自然な人間は、今では相手のイマージュと切り離せない自分自身のイマージュに送り返されて、直ぐに二人に反応します。感情はここでは自分たちに相応しい対象を見出します。子供の成長が無謀な仮定から免れて、全ての愛の約束を展開せずには置きません。離婚は子供によっては起こり得ません。夫婦は子供のうちに自分たちの生命を超えて結び合い組み合わせられたものを見ます。更にこの別個の生命は、最初はその弱さによって、そして直ぐに否応無しの感情の源泉である成長の力によって、全てを自分に立ち戻らせます。子供は選択しませんが、選択することも出来ません。個人的争いの結果がどうであろうと、この子供においては和解が何時も行われ、現存し、生きています。子供たちによっての両親の教育という、この大きな主題を発展させようとしているのは誰でしょうか。それは証人である子供の叫び声によって始まりますが、その叫び声は喧嘩を悪化させます。しかし直ぐに落ち着かせる様になります。それは優しい天性の欲求によって、無駄な考えを思い止まらせます。必然的な規則によって家中を規定します。結局は礼儀正しさの事例によって、気分による即興に対しての大きな算段になります。その上、子供の民衆が毎日の使者となって、更に別の規律と肉体からさらに一層自由な人間性を、家庭の中へ持ち込むのを見るのは美しいものです。子供は、その小さな革の鞆の中には、些細とは言えない数々のものを持ち帰ります。〈人間性〉が回復します。ノートや本は、家の中にもう一つの真剣さを導き入れますが、先ずは貴重な沈黙を導き入れます。更に両親が、学校をやり直したり通り過ぎたつもりでいたものに戻って、適切なものを丁度見出すことも稀有なことではありません。自然に従った成人講座の様なものですが。しかし又、自然は私たちの困難な生活の中で、十分なものは何も無いのは本当であり、何時も繰り返し言わなければならないことなのです。哲学の王アリストテレスは、どんな愛も素早く専制すると、ものの序での様に言いました。熟考すべき言葉です。何か大きな愛が宿っている処は、何処でも何か大きな怒りを予期しなければなりません。かくして余りに期待し過ぎるために父親は、いや母親でさえも屢々乱暴な教師になり、忍耐を要求するこの子供の様な性格を前にして、直ぐに性急となり、意見も割れます。ここから時として学習についての沈黙が生じますが、考えが無い訳ではありません。それ故に労働が無く、協同者も無く、友人も無く、気分を鍛える多くの礼儀正しさに結ばれていない家庭は、常に波乱に委ねられています。いや、寧ろ周囲の社会は下から規定されるには極めて強力ですが、上からは乱すことになります。私は数々の事例によって、軽薄な判断によって、最後には社会が伝える観念によって理解します。そして、それらの観念は注目すべきものですが、男女についての多くの皮肉な話が示す如く、ここではまさに主題以下なのです。

コントはその点に関して本質的なことを言いました。しかし、彼は孤独です。家政の聖書であ

るあの『実証的政治学』第二巻以外に私はその点に関しては、つまらないものを読むだけでした。従ってこの作者が当時の社会の規則の様に活動的な性と、感情的な性に関して言ったことを、私流に明らかにすることは時宜を得ていると思います。

男性は本来、事物を獲得し、変形させて、自分のものにするために作られている、というこの観念に先ず従うのは悪くありません。労働には破壊がありますが、発明もあり、常に乱暴と服従が混じり合い、考慮も尊敬もありません。それは鶴嘴や鞭の一撃に現れます。男性は何らかの正確な観念と荒々しい知恵を手に入れます。荒々しい束の間の知恵です。というのも、ここでは自分自身を道具の様に捕らえられるので、その様にして労働に関しては荒々しい法則となり、もしもこう言って良ければ、自分自身の形とか内的な法則を忘れるからです。必要性に法則は無いと言われていました。それ故に原理と方針は、戦争や征服や治安の労働において、道具よりも更に早く擦り切れます。男性の全ての仕事は、政治も含めて、屋外のものであり、変化と不意打ちの場所内にあります。男性の精神は絶えず構成しています。こうして彼は無言の技術に大変早く降りて行きます。この様にして行政部が形づくられます。しかし、それは如何なる国家や家庭であっても、具体化するためには常に実行し、共同し、服従しているのです。この種の思想は肉体と同時に疲れますし、又、休息もします。そして、行動しながら思考する習慣、謂わば行為が発見する日々と通路の中での習慣は、男性の思想が無為の中では自分自身に退屈して来るのです。樵が木の周りを回っているのを見て下さい。同じ様にトランプをしているのを見て下さい。

これらの指摘が白日の下に晒され、誰もが容易に発見する多くの事例によって明らかにされると、本来は女性が男性以上に思考するという観念が既に滑稽でなくなります。女性たちが容易に空疎であったり、つまらないお喋りに陥ることを私も同意します。何故なら、彼女らは先ず敬意を払って礼儀正しく生きているからですが、それらは内容の無い形式でもあるからです。又、低次の心配りである栄養、清潔、休息が彼女たちの宿命であり、動物の水準にも屢々彼女たちの思想を置き直すからです。しかし、何時も同じことを繰り返す機械的な女性の仕事にも又、或る種の夢想とか空想が伴っていることを理解しなければなりません。私は、女性たちの思想が厳しい要求の多い世界を決して説明していないという意味で、空想と言いました。しかし女性たちの思想が、人間の姿を保存し、保護し、心配りと安全と眠りの場所である家の内部を常に型どおりに片付けるという成果を上げている女性の機能と無関係であることはあり得ません。階段、ベッド、肘掛椅子、椅子、テーブルは、虚ろな人間の姿と同じです。流浪する瞑想はそれ故に常に外部の環境を無視して人間や人間の形に連れ戻しますが、外部の環境にある形は常に危険な状態にあります。その上、子供は先ず人間の規範に従ってまさに成長しなければなりませんし、外部の必然性に従うのではないのです。この家庭指導の実践は、何時も格言に規定されていて、道徳上の判断とあるべきものに関する熟考を準備しています。常に人間の形を尊重する道徳的な力が、説得したり見抜いたりする術を前提としていることも忘れてはなりません。そこから職人の用心や器用さと似ても似つかぬ一種の洞察力と術策が生まれます。木を伐ったり、板を挽いたり、岩を穿いたりすることは、男性のもので、そのために人間の形を危険にするのは戦争の格言

です。そして、それは男性の格言でもあります。それ故に戦争は極めて女性とは無縁であり、恐らく女性は戦争のことを何も決して考えないようになります。もう一度言いましょう。全ての女性の観念は、人間の形が要求するものに合わせて規制されるのです。そして、これは些細なことを言っているではありません。女性の観念は、言葉として充実した意味における観念でしょう。そして、コントが次の様に言ったことは正しかったと理解されます。この種の思想において著しく思考されることは、情操が最も重要です。その代わりに外部の必然性に対しての戦いにおいて、情操は惑わせるだけであるのは明白です。

人間性はそれ故に女性の領域にあり、非人間性は男性の領域ですから、私は命令することの権利と服従することの必要性を公平に尊重されることを望んでいますが、彼ら男性も女性も抽象的概念に相違することもなく身を委ねるや否や、動揺し、そして直ぐに女性を、男性でさえも躓かせます。この男性の力は、人が言う様に束の間のものですが、常に外部の必然性に支えられています。命令するのは必然性であり、決して男性ではないのです。ここに行政のあらゆる力を持つ言葉が認められます。それらは、はっきりと力強く語る諸々の事物であり、彼ではないのです。彼が持って帰るのは宇宙的なものであれ、政治的なものであれ、外部秩序の非情な判決です。男性が強制的に表すことは、服従の必要性です。何故なら男性は最初にそれを体験するからです。実際にそれは決して容赦しないので、その力は専制的に見えます。そして女性が男性から解放され、外部で働き、尊敬を勝ち取ると、男性が単に大使に過ぎなかったそれと同じ不敗の力を直ぐに改めて見出します。

女性の力は、誰もがそれを体験しますけれども、余り知られておりません。その力は先ず誰にも共通した服従の必要性によってしなやかであるので、余り恐れられておりません。しかし又、その力は常に立ち戻って来ますし、ある意味で決して屈しません。何故なら上記に述べた様に、屈することが出来ないからです。人間の名においての権利の要求は、常に完全に残っていて、外部の必然性が少しその手を緩めると、男性の力を再び征服します。男性の力には服従しなければなりません。女性の忠告にも耳を傾けなければならないでしょう。以上は全ての夫婦喧嘩の主題です。そしてお分かりの様に、二人とも何時も正しいのです。少なくともその経験がある限り、喧嘩は続けられますが、もしもこのことを良く理解するならば、全ての喧嘩は終わることでしょう。(完)

第六章 友情

ラ・ブリュイエール(1)は言いました、「人に満足するのは何と難しいことであろう！」。それ故に裁判官や商人の視線の前では、つなぎ止める愛も友情も決して無いのです。その上、検証することは疑うことを前提としているので、観察する者の唯一の視線は、愛も友情も殺すに必要なものを提供しています。両眼に目隠し布をして愛は表されるのです。恋する人をその点で非難する者は、昔からのこの知らせを未だ完全に理解していなかったのです。人が見ているのを示さないことを学んだ時、確かに礼儀正しさの何ものかを知ります。しかしながら、それは始まりに過ぎません。完全な礼儀正しさは確かに決して見ないことにあります。それ故に人物を熟視することは、どんなものでも礼儀正しいことではありません。その意味では感嘆も、確かに完全に礼儀正しいことではありません。その上、この時に眼は眼を探し、見るために方向を変えるが如く監視しますが、その無言の命令は世の中の王や女王に特有なもので、素早く理解されます。あるいは言葉の無い喧嘩になって、やがては無礼になります。友情は礼儀無しで済ませたいのを私は知っています。しかしながら、全く無しで済むとは思いません。少なくとも友情に相応しい礼儀正しさはあります。しかし、他の礼儀よりも厳格ではありませんが、注意深くて繊細でないとは言えません。それどころか全く反対です。精神というものには恐らくこの種のしるしを理解するのに鋭敏なものがあります。それらのしるしには友情の危機が如きものがあり、それらのしるしに先行しているものでさえあります。私が言いたいことを十分に理解するためには、彼の手の内が良く分からないからであるにしろ、その反対に話してはいけないことも十分に知っているからにしろ、あるいは仲間の中で礼儀正しさに欠いた者がいるからであるにしろ、困難な状況の中にいる才気ある人を観察するしかないのです。それらの機微はスタンダールとかバルザック、あるいはその他の風俗史家の裡にあります。それらを学ばなければならない不幸を持っているとするなら、それらをそこで学ばなければなりません。

愛は決して礼儀正しくありません。余りに多くのことを尋ねます。愛は秩序を乱すものです。礼儀正しさが望むのは、愛の対象の前では独りにさせて置くことです。この愛の条件は多くの友情を砕くものであり、人々が言った様に好ましいものではありません。そして、愛へ行く友情の通路は難しく、その帰りの通路は更にもっと難しいものを生む主な理由が恐らくそこにはあります。しかし、友情の段階からもっと低い段階へ戻らないのも同じ理由によることに注意して下さい。誰も自分に寄せられていた信頼を追い払う儘にして置きません。追い払うなら全てを追い払う方法が好まれます。けれども愛が友情の一段階にないことは明白です。一方には欲望への接触がありますが、他方には決してありません。常識外れの愛でもやはり愛ですが、少しも友情ではありません。愛においては選択の余地は決して見られません。自然が力強い衝撃によって全てを決定したのです。残るは人間の高尚さを救うだけです。そして愛の中にその高尚さを発見したり、自分を発見するので、それだけ益々愛は決して見ることのない英雄的なものであり、決して見ないことは考えないまでになります。愛する者は決して老いないと見ます。しかし友人が老

いるのを人は見ます。

友人が疲れていたり、悲しんでいたり、気難しくなっていたり、気紛れになっていた、弱々しくなっていたり、繰り返し言ったりしているのを、どうして見ないでいられるのでしょうか。勿論、ここには幾つかの段階があって、愛がその優しさを抱かせることによって友情にとっての良き師であることに変わりありません。自分が存在することの全てについて、愛する人に感謝します。未来の自分の全てに予め人は許してやります。誓いは先ず感激によるもので、謂わば贅沢なものです。友情の裡にも、謂わば拡散して行くものですが、誓いは決して無いのでしょうか。あるいは見たり裁いたりすることを妨げませんが、見たり裁いたりすることも後で誓いが引き起こすのでしょうか。諺にも言いますが、許すことは忘れることではないのです。もしもそうであるとしても、友情には許し以上のものがあります。友情は消します。それは友人が見出す新しい視線です。清められた視線です。幼い視線です。不信は自然の衝撃で打ち破られるので、何も許さない人々は愛することを望むかも知れません。しかし、彼らは友情においては重苦しく、気難しいのです。友情への意向は従って幼年時のものであり、生涯において幼年時のしるしなのです。その上この忘却、しかも善意の忘却は、知性を解放するものです。全てを記憶に止める人々は、考え過ぎて創意工夫することが決して出来ません。恐らくはこの間接的な道によって、友情は精神を探し求めます。友情は精神をそんなにも評価しませんが、必要としています。愚かな者たちは全てを明らかにしたがりです。そして、言葉の普通の用法に従って求められた解釈は一種の侮辱です。大事な経験はその点で既に精神に磨きをかけているとも言わなければなりません。というのも、人事の活動において不平を言う余地などは決して無いからです。かくして最初にそのことを感じさえすれば、歳と共に些細なことを考えないで、より一層良く学ぶのです。

これらの指摘によって友情は、持続によって強くなって行くことが分かります。しかし又、友情が選択されているとするなら、始めは困難であることも分かります。何故なら、ここには愛のあの禁止命令とか警告が全く無いので、常に待たされるか延ばされるようになるからです。そして、時々友情によって生まれる高い観念は、裁くことを余りに考え過ぎることになります。強制されない選択は、何時までも終わらない躊躇によって決して行われぬことも十分にあり得ます。従って友情の機会は、屢々友情を生む最良の者に値する人々によっても、まさしく逃すことがあるのが分かります。継続する術を知る人は、常に始める術を知りません。もっと適切に言うなら、常に力強く、常に生き生きとした友情を人は見ましたが、長年の疎遠や沈黙で碎ける様な友情も人は見ました。私は、二人の兄弟の様に仲が良くて意見も合って生活していた二人の友人の悲しい話を聞きましたが、それと同時に強い印象も受けました。二人には、各人が自分の家庭で似た様な不幸があり、その経緯による衝撃から相手の不幸を増大させる勇気は無かったとのことでした。あるいは多分、彼らは慰めによる希望さえも拒んだのです。同情を恐れた彼らの気持ちは別々に離れました。そして、今でも別々に離れています。ここにはあらゆる種類の交際と、社会的な義務による価値が把握されますが、それらは多くの偶然の出会いの間で、少なくとも友情の出会いを保証しています。社会性はいやでも隣人、学友、戦友、組合員、同僚たちによっ

て作られますが、それは従って生物学的性質が愛にあることを、友情にあることで見出します。熟考を終了するこの有益な強制が無ければ、恐らく人は愛することを決して選択しないでしょう。取分け、学校や軍隊では上辺を飾ったり諂ったりしない仲間たちをを作りますし、それは容認すべきことです。この必然性は感情を生まないが、これを強くします。昔の人々は友情を論じる時、お互いに助け合ったことを決して忘れません。このことは始めショックを与えます。というのも誰もが共通した鎖は友情を生むことが出来ないで、精神が少しも無い単なる慣れに過ぎないと良く感じるからです。しかし逆に、相手無しに済ませる感情を友情と呼ぶことは出来ません。感情は純粋な時に発展しますが、障害がなければまさに消えて仕舞うと言えます。友情は障害によって大きくなります。そして相手の存在は、絶えず偶然性を払い落とすものであり、誓いを強くする障害です。賢明な人は誰でもそれ故に、習慣と社会との結び付きを望んでいます。もしも友情が欲望を当てにするなら、友情そのものの本質を間違えているのです。常に面白く常に人気のある相手の存在を仮定してみましょう。その場合でさえも、勇気がなければならぬ時に、熟考によって勇気が消えて仕舞います。ご存知の様に、「彼は面白い」と言われる人は、大したお世辞にもならないのです。人はまさに面白いことを望みますが、面白くなくてもやはり確実に好かれることを望みます。心の奥底では更に、どんな愛とも同じ様に、どんな友情も好かれないとしても、打ち勝とうと思えます。従って時々嫌われることを試みるまでになります。でも、そのことは高潔なことです。何故なら相手にも又、好きにさせる必要がないのを理解させることでもあるからです。結局のところ一言で言えば、愛撫の術は何でもありますが、それは常に軽蔑されます。その上、諺にもある様に、友人を知ることを学ぶのは不幸の中です。不幸な男は、予期している助力によって不幸を遠ざけることが決して無いのです。そんな男たちは、役立つことを好みます。少なくとも彼らは不幸な顔が少しも好きではありません。面白がらせる男が自分の仕事の辛さを知るのは、その過程においてです。この主題について熟考すれば、友情は消えるかも知れません。いずれにせよ思考する人類は、自分の喜びを確かにするための誓いを必要とします。かくしてクロティルデ・ド・ヴォ(2)の格言を私は理解します。「我々人類は感情を作るために、義務が必要である」。(完)

(1) ラ・ブリュイエール(一六四五～九六)は、作家でモラリストで、匿名で『性格論』(一六八八)を刊行し、後に加筆して版を重ねる。

(2) クロティルデ・ド・ヴォ(四七五頃～五四五)は、夫クロビス一世をアウリス派からカトリックに改宗させた。

第七章 信義

大衆の〈本能〉は、仕事や立場や意見や愛情を変える人々を非難します。寧ろ彼らを嘆くに違いないでしょう。全て作り上げた幸福は何時も騙すものであり、それへの誘惑によって彼らは勇氣と忍耐によって作り上げられるに違いない幸福を逃します。何故なら仕事を行うことの幸福は、それを上手くやる人にしか分からないからです。ところがそれに反して、如何なる仕事でも、その仕事を試みる人には最初は厳しいものです。有望であった仕事も指から漏れて仕舞います。宇宙の法則に従って受け取り前に与えることが要求され、困難なことだけが現れます。画家、音楽家、詩人、あらゆる種類の弟子たちは、始めにそれを選んだ時の容易さを仕事が直ちに忘却へ投げ入れ、そこから来る絶望を知ります。それ故に人は自分から愛することを学びます。ヴァイオリンは厳しい師です。それは音に基づく力量と栄光によって遠くから好まれますが、忍耐心の無い者を騙します。更にその上完熟して果実の様に摘む楽しみを求めますが、全く虚しいことです。同じ間違いは気に入った意見を求めて、一つの意見から他の意見へ行く様に思考することの熱情にも認められます。しかし気に入ることは、真実ならどんな意見でも構わず、真実を意見から創り出すことです。例えば二百歩の処にある太陽の外観は私たちに欺きます。しかし、それがその外観を背ける理由にはなりません。何故なら、その意見の中に真実の距離があるからで、少なくともそこから引き出して来なければならないからです。タレス(1)の実力は全てこの人を欺く意見に止まり、結局は少なくとも自分に期待し、そして自分に報いることにあります。それ故にどんな愛の裡にも試練があり、騎士たちも肉体的な愛の経験によってそのことを大変良く理解したのです。従って対象を、謂わば砂糖を嘗める様に味わうのではなくて、彼らは逆に試練によって自分自身の信義を試みて確立したのです。この様にして忍従し受け入れるまさにその点において、彼らは克服し、自分を取り戻し、そして自分自身から与えたのです。かくして彼らは、愛することの幸福を発見するでしょう。この様な回り道は、最初は笑われます。何故なら騙されるのが嫌だからです。正しいことは苦痛である、とディオゲネス(2)が謎の様に言ったことを決して信じたくないのです。人は信じたくないのです。人間的な問題の全てがここに集まっているのです。様々な道を通って誰もがそこにやって来ます。ヴァイオリンを演奏するにしろ、飛行機を操縦するにしろ、あるいは単にトランプ遊びをするにしろ、人は決心するのであり、誓わなければなりません。それは文字通りに自分に約束することです。そして、決して曲げないことです。試練は私たちに申し分無く教えてくれますし、曖昧なものは何もありません。しかし試練が好きにならなければなりません。勇氣を蓄えなければなりません。何故ならどんな仕事にあっても、馬に乗って行くにせよ、思考するにせよ、私たちの眼の前にある希望が消える困難な点がありますが、謂わば私たちの背後にあって誓った信念でもある希望によって、そこを越えるしかないのです。ところが経験が勇氣ある者たちに見せてくれたのは、困難が勝利と幸福そのものを教えてくれることです。しかし、それは試みたことがなかった者、実際に試みたことがなかった者には全然理解出来ないことです。アリストテレスは次の様に言って、簡潔な表現でその貴重な

秘密を私たちの眼前に投げつけました。幾何学者は幾何学が楽しく、音楽家には音楽が、競技者には競技が、節制家には節制が、勇気ある者には勇気が楽しいのです。そして、ここでは実例が規則を伴っています。何故ならアリストテレスによって誓うのでなければ、アリストテレスからは何も引き出せないからです。それに、この粗野な師匠はプラトンよりも好きになるのが難しいからです。しかし、それはやはり外見でしかありません。何故ならプラトンも大変に早く気に入らないことをやりましたし、追従者たちを引きつけるのと同じ位に早く追い払うからです。しかし真実の愛はそこで強くなります。この困難な主題の輪を敬虔な模倣によって閉じながら、私はまさに、信義ある人は信義を楽しむのであると言います。

それ故に私は、どんな観念も網の中で捕らえる様にしながら、長く、忍耐強く、信用ある狩に負っている獲物を広げ終わっていませんでした。でも、少なくともその概略を与えることは出来ます。プラトンとアリストテレスと教父たちも一緒にそこにいるでしょうし、それは否定するためよりも、肯定するために前進する一つの証になるでしょう。

一人の人が自分自身の企てを疑う時は、三つのことを何時も一緒に恐れます。他人と、外部の必然性と、自分自身です。ところで先ず確信しなければならないのは、自分自身です。何故なら、堀を越せるか否か疑う者は、その疑いだけで落下して仕舞うからです。望む術を知るだろうと信じることも無く、自分自身に立派に誓うことも無く、デカルトが言う如く自由意志を決して欠かさない様に決心することも無く望むことは、決して望むことにはなりません。自分自身を弱く変わり易いと予想する人は、既にそうなのです。それは敗北者として戦うことになります。何かを企てる人が、試みる前からその成功を既に疑っているのが分かる時、彼には信念が無いと言われます。その様にして世の中の習慣が私たちに思い起こさせるのは、信念はこの地上にも住んでいて、最も詰まらない仕事にもその全てを含んでいるということです。見込みが無ければもっと崇高なのです。実を言うと、常に見込みは無いのです。何故なら、自己を信じるという決心には全ての道が信念によって開かれるであろう、ということは含まれていないからです。しかし、もしもあなたが先ず信念を持っていないなら、全ての道は閉じられ、全ての幸福が削除されるのは少なくとも確かです。証拠を無視しても自分を自由と見なければならぬ、と言うだけでは十分ではありません。いや寧ろ、そのことを何も約束せず、何も言えないのがこの世界であり、その救いの無い世界へ私たちを引き戻すのです。従って最初的美徳は信念です。

信念は、希望も無く進んで行くことが出来ません。登山家たちが遠くから山を眺める時は、全てが障害です。ルートを探すのは進みながらです。しかし自分自身の信念に希望が無ければ、決して前進しないでしょう。逆に自分自身の希望を砕く者は、どんな信念でも、自分自身の信念でも砕くでしょう。ルートが遮断されているとの観念で試みることは、試みることになりません。事物が、望むことの障害になっていると予め決まっていることも、望むことになりません。従って、お分かりの様に、発明家や探検者や改革者は、遠くの山が生み出すあの想像上の障害を信じない者たちなのです。彼らは寧ろ正確で、ついには吟味された感情を持っているのですが、事物の真理は無関心なものであり私たちの味方でも敵でもなく、敢えて行う者たちに単に味方する

のです。そこからは機会と足場が見付かることになります。そして、自分の前で直ちに試みるというこの美德が、まさに希望になるのです。

人々は常に賭けの中におります。他者への信念と希望が無ければ、この世界で何が出来るでしょうか。ところが人々は屢々殆どが、どんな障害にもなりますし、その障害の全てでさえあります。例えば平和も正義も、単に人々に依存しています。しかし人間嫌いは希望を殺しますし、信念さえも殺します。もしも人々が無知で怠惰で悪意を抱いていて薬も無いと私が信じるなら、何を試みることが出来るでしょうか。もしも私が、子供は愚鈍であるとか軽薄であると信じたなら、少なくとも教育することを試みるでしょうか。しかし、ここで私たちの広大な観念が大きな声で語ります。嫌悪には、仮定するものを存在させる意味で洞察力があります。何故なら無知も不正も嫌悪も、それに直ぐに答えるからです。愛が見出す証拠は常にもっと少ないでしょう。というのも愛は、相手が注意深く親切で寛大であるために、その様に望めば十分であるとは決して約束する訳にいかないからです。けれども、そのことだけからでも愛したり誓ったりすることを選択しなければならず、そこを決して譲ってはならないことは明白です。ここで最も強い抵抗は、最も寛大な約束によってしか打ち破ることが出来ないのも明白であるからです。従って私たちの同類に関係していて、信念からも派生している或る種の希望がありますが、その真の名は慈悲です。この力強い観念は、キリスト教革命によって二つの別々の観念と同じく良く推敲されていますが、未だ民衆の言葉においてあらゆる意味で入っていませんでした。その言葉はここでは外的な効果だけで満足するものです。結局それは自分自身に対する義務をその領域に連れ戻されなかったので、同類を愛する義務は未だ弱くて抽象的であるということです。憐憫は胃に委ねられています。しかしながら、普通の言葉に持ち続けられている共通の思想の力によって、慈悲の言葉は望まなければならない事物の領域では保持されていますし、それは重要なことです。ポリュクト(3)の直観力によって慈悲は愛を照らし出します。その時、一般的考えは信念と希望と慈悲が美德であることを、感嘆した哲学者に教えるでしょう。しかし、常に尊敬されている信義だけは、常に誓いの後で愛することからこの三重の内容を発展させるでしょう。慈悲の無い愛があることも容易に人は気付きますが、その愛は愛らしくすることが重荷となって、その役の中で決して十分な助けを与えません。その愛は絶えず選択しますし、そこから相手を怖がらせて、そして捨てます。そこでは人間的未来が二人に恐怖を与えます。非人間的未来も、もう一つの希望の無い愛である悲しい愛で恐れさせます。この愛は全てを恐れ、全てを信託と思い、そして殆ど生きる勇気がありません。礼儀正しくする望みは、愛が何時も治す術を知らない一種の不安に、賢明に抗って戦います。もしも私が慈悲の無い愛を不信の愛と名付けるなら、希望の無い愛は震え戦く愛と名付けなければなりません。信念の無い愛に関しては、他の名を付ける必要もありません。独りでの如何なる名からも脱しています。それとは反対に誓った信念による美しい表現を鳴らせて下さい。この最後の言い方は二重の意味で、自己の愛を高めており、充実した意味を与えることを私は期待しています。(完)

(1) タレス（前六二五頃～前五四七頃）は、古代ギリシアの数学者・自然哲学者で、七賢人の一人。

(2) デイオゲネス（前四一三～前三二七又は前三二三）は、古代ギリシアの数学者で、犬儒（キニク）学派の代表者。

(3) 『ポリュクト』（1643初演）は、コルネイユ（一六〇六～八四）の悲劇で、信仰（宗教的義務）と夫婦愛（地上的愛）の葛藤を描いた。

アラン
思想と年齢（中）

<http://p.booklog.jp/book/113860>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113860>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト